

(都) 大年線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—茅野市内—

かまい あみだどう
構井・阿弥陀堂遺跡

2008.3

長野県諏訪建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



横井・阿弥陀堂遺跡遠景（西方より）



永明寺山を望む



茅野市内中心を望む



横井・阿弥陀堂遺跡調査区全景

はじめに

長野県のほぼ中央に位置する茅野市は、東に八ヶ岳連峰、西に守屋山系、北に蓼科山系と三方を山に囲まれた高原の都市です。それぞれの山麓には、旧石器時代や縄文時代以来、人々の活動の場として使用されてきた多くの遺跡が残されています。

一方、市街地に面した上川の低地は、農業技術の未発達な時代において、数少ない水田耕作地であったと考えられています。そして、この低地に面した段丘崖上には、弥生時代から断続的に集落が展開していたことがわかっています。構井・阿弥陀堂遺跡もその一つになります。また、この地区は山梨県から諏訪方面へ抜ける甲州街道筋にあたり、西側に諏訪湖盆を見渡す扇の要に位置しています。さらに、佐久・上田方面に繋がるメルヘン街道・大門街道と、伊那方面に至る杖突街道が交差する地点でもあります。そのため、古くから交通の要所でもありました。

本書は、茅野市の市街地を貫通する県道大年線の建設に伴い、2005（平成17）年度から2006（平成18）年度に発掘調査した構井・阿弥陀堂遺跡の報告書です。

今回の調査地では、交通の要所でもあり、水田可耕地に面した段丘崖上という立地条件から、縄文時代をはじめ、弥生時代、古墳時代後期、平安時代、中世にわたる各時代の集落跡が見つかりました。特に、縄文時代前期前葉期の竪穴住居跡は、諏訪湖に面する上川下流域ではじめての発見になります。ここでは、東海地方との関連性の高い土器が出土しており、広域にわたる交流の一端を見ることができます。また、弥生時代後期では茅野市域で2例目となる方形周溝墓が発見され、竪穴住居跡群とともに安定した農耕集落が営まれていたことを示しています。さらに平安時代の住居跡からは、甲斐国と関わりの深い土器が数多く出土しました。

こうした成果は、茅野市域における各時代の交流関係や、集落の発達を明らかにするだけでなく、中部高地地域や周辺地域を含めた歴史解明につなげられれば幸い、と考えています。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた長野県諏訪建設事務所、茅野市、茅野市教育委員会などの関係機関、地元的地権者や関係者の方々に敬意と感謝を申し上げます。

例 言

- 1 本書は、地方道路交付金（街路）事業—県道大年線—建設に伴う茅野市構井・阿弥陀堂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は長野県諏訪建設事務所の委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺跡の概要は長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』22・23で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図(1:25,000)、茅野市都市計画図(1:2,500)をもとに作成した。なお、今回は新世界測地系に基づいた。
- 5 発掘調査にあたっては以下の機関、諸氏に業務委託もしくは協力を得た（敬称略）。
(株) 新日本航業：測量基準点および地形測量、単点測量等の測量、航空撮影
(有) 文化財コム：石器の実測・トレース
(有) アルケーリサーチ：遺物写真の撮影、報告書編集
(株) 加速器分析研究所：AMS分析による年代測定
(株) パレオ・ラボ：リン酸・カルシウム分析、炭化種実同定分析、炭化樹種同定分析
信州大学教授 原山 智：黒曜石以外の石器石材同定分析
沼津工業高等専門学校教授 望月明彦：黒曜石産地同定分析
- 6 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、報告書の刊行後に茅野市教育委員会へ移管する。
- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表します。（敬称略）
鶴飼幸雄 小池岳史 小林健一 小林深志 原田哲郎 百瀬一郎 望月明彦 守矢昌文 諏訪考古学研究会 茅野市教育委員会 尖石縄文考古館
- 8 発掘調査の担当は以下のとおりである。
平成17（2005）年度 調査研究員 土屋哲樹 広田和穂 藤原直人
平成18（2006）年度 調査研究員 藤原直人
- 9 平成18・19年度の発掘調査補助員、整理作業員は本文第1章に記載した。
- 10 本書の執筆・編集・校正は藤原直人が行い、調査第2課長 寺内隆夫 調査部長 平林 彰が全体を校閲した。

凡 例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。
 - a) 遺構実測図
竪穴住居跡 1:60 掘立柱建物跡 1:60 土坑 1:60 溝跡 1:80 (1:60) 遺構内施設 1:30
 - b) 遺物実測図
土器実測図 1:3 土器拓影図 1:3 石器実測図 1:8 (石皿)、1:2 (石斧・磨斧・凹石類・石包丁・石製模造品)、2:3 (黒曜石製石器・石匙)
- 2 遺物写真の縮尺は概ね以下の通りである。
土器 1:3 石器 1:4 (石皿)、1:3 (凹石類・凹石類(磨石))、1:2 (打製石斧・凹石類(敲石))、2:3 (石錘・スクレイパー・ピエス・石匙・磨製石斧・二次加工剥片・石包丁・石製模造品)、3:4 (石鏃・両極石器・石核)
- 3 遺構図・遺物図の網掛けは以下の通りである。
遺構図 ■：被熱面 ◻：遺物
遺物図
土器断面 ■：須恵器 ■：灰釉陶器 •：繊維土器
土器内外面 •：黒色処理 ■：赤彩 →：磨き方向
石器 →：機能範囲
- 4 基本土層および遺構覆土の色調は、『新版 標準土色帖』による。
- 5 竪穴住居跡の面積は、住居跡の下場線を床面積として、プランメーターで計測した。
- 6 本付録C Dに、遺構全体図、土器観察表、石器観察表、自然科学分析結果報告書、周辺遺跡の遺構分布図を取録した。

目次

巻頭図版
はじめに
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 保護協議から本調査に至る経緯	1
1 保護協議	1
2 発掘届けと発掘の指示	1
3 受委託契約	1
第2節 発掘調査・整理作業の体制	2
1 調査組織	2
(1) 平成17年度	2
(2) 平成18年度	2
(3) 平成19年度	3
第3節 発掘作業の方法	3
1 発掘調査の方法	3
(1) 遺跡の名称と記号	3
(2) 遺構の名称と記号	3
(3) 遺構検出から遺構完掘まで	4
(4) 記録	4
・ 1 基準点の設定	4
・ 2 測量・図面作成	4
・ 3 写真	4
第4節 整理の方法と報告書の作成	4
1 基礎整理作業	4
2 本格整理作業	5
第5節 調査日誌抄	5
第2章 遺跡の環境	7
第1節 遺跡の位置	7
第2節 地質・地形環境	8
第3節 歴史的環境	9
1 縄文時代	9
2 弥生時代	12
3 古墳時代	13
4 奈良・平安時代	14
5 中・近世	14
第4節 基本土層	15
第3章 遺構	17
第1節 概要	17
第2節 縄文時代の遺構	17
1 概要	17
2 縄文時代前期の遺構	17

(1) 竪穴住居跡	17
(2) 土 坑	22
3 縄文時代中期の遺構	22
(1) 竪穴住居跡	22
第3節 弥生時代の遺構	23
1 概 要	23
2 弥生時代後期の遺構	23
(1) 竪穴住居跡	23
(2) 溝 跡	25
第4節 古墳時代～平安時代の遺構	26
1 概 要	26
2 古墳時代後期の遺構	26
(1) 竪穴住居跡	26
(2) 掘立柱建物跡	28
(3) 土 坑	28
3 平安時代の遺構	28
(1) 竪穴住居跡	28
(2) 掘立柱建物跡	36
(3) 溝 跡	36
(4) 土 坑	36
第5節 中世の遺構	38
1 概 要	38
2 中世の遺構	39
(1) 竪穴建物跡	39
(2) 土 坑	39
第4章 遺 物	40
第1節 概 要	40
第2節 縄文時代の遺物	40
1 縄文時代早期末～前期の土器	40
(1) 概 要	40
(2) 分 類	40
(3) 遺構出土の土器	41
(4) 時期の概観	42
2 縄文時代中期の土器	42
(1) 概 要	42
(2) 遺構出土の土器	42
3 縄文時代の石器	43
(1) 概 要	43
(2) 縄文時代の石器組成	43
(3) 器種別の概要	44
(4) 縄文時代中期の石器	45
第3節 弥生時代の遺物	45
1 弥生時代後期の土器	45
(1) 概 要	45
(2) 分 類	46
(3) 遺構出土の土器	46
(4) 遺構外出土の土器	48

2	弥生時代の石器	49
第4節	古墳時代～平安時代の遺物	49
1	古墳時代後期の土器	49
(1)	概要	49
(2)	遺構出土の土器	49
(3)	時期の概観	50
2	古墳時代後期の石製品	50
3	平安時代の土器	50
(1)	概要	50
(2)	分類	51
(3)	遺構出土の土器	52
(4)	時期の概観	54
4	平安時代の石器	55
第5節	中世の遺物	55
1	中世の焼物	55
(1)	概要	55
(2)	遺構出土の焼物	55
2	古墳時代後期～中世の金属製品	56
(1)	金属製品	56
(2)	銭貨	56
第5章	科学分析	57
第1節	科学分析の目的	57
第2節	AMS放射性炭素 ¹⁴ C年代測定	57
第3節	炭化種実の同定分析	58
第4節	炭化材の樹種同定分析	59
第5節	黒曜石産地同定分析	59
第6節	リン酸・カルシウム分析	60
第6章	総括	61
	参考文献	
	写真図版	
	報告書抄録	
	奥付	

挿図目次

第 1 図	遺跡の位置図	7	第 42 図	2 号竪穴住居跡出土土器	102
第 2 図	茅野市地質図	8	第 43 図	3～4 号竪穴住居跡出土土器	103
第 3 図	茅野市遺跡分布図	10	第 44 図	4・5・6 号竪穴住居跡出土土器	104
第 4 図	基本土層図	15	第 45 図	6 号竪穴住居跡出土土器	105
第 5 図	遺構全体図	19・20	第 46 図	6・7 号竪穴住居跡出土土器	106
第 6 図	構井・阿弥陀堂遺跡周辺の 遺跡分布状況図	63・64	第 47 図	7・9 号竪穴住居跡出土土器	107
第 7 図	1 号竪穴住居跡	67	第 48 図	10・11・12 号竪穴住居跡 出土土器	108
第 8 図	2 号竪穴住居跡	68	第 49 図	13 号竪穴住居跡出土土器	109
第 9 図	3 号竪穴住居跡	69	第 50 図	14・15 号竪穴住居跡出土土器	110
第 10 図	4 号竪穴住居跡	70	第 51 図	16 号竪穴住居跡出土土器	111
第 11 図	5 号竪穴住居跡	71	第 52 図	16・17 号竪穴住居跡出土土器	112
第 12 図	6 号竪穴住居跡	72	第 53 図	17・18 号竪穴住居跡出土土器	113
第 13 図	7・8 号竪穴住居跡	73	第 54 図	19 号竪穴住居跡出土土器	114
第 14 図	9・10 号竪穴住居跡	74	第 55 図	19・20 号竪穴住居跡出土土器	115
第 15 図	11・12・13・38 号竪穴住居跡	75	第 56 図	21・22 号竪穴住居跡出土土器	116
第 16 図	14・15 号竪穴住居跡	76	第 57 図	23・24 号竪穴住居跡出土土器	117
第 17 図	16・17 号竪穴住居跡	77	第 58 図	25・26・27・28 号竪穴住居跡 出土土器	118
第 18 図	18 号竪穴住居跡	78	第 59 図	29・30 号竪穴住居跡出土土器	119
第 19 図	19 号竪穴住居跡	79	第 60 図	31・32 号竪穴住居跡出土土器	120
第 20 図	19 号竪穴住居跡 掘り方	80	第 61 図	32 号竪穴住居跡出土土器	121
第 21 図	20・21 号竪穴住居跡 掘り方	81	第 62 図	32 号竪穴住居跡出土土器	122
第 22 図	22・23・24 号竪穴住居跡	82	第 63 図	32・33 号竪穴住居跡出土土器	123
第 23 図	25 号竪穴住居跡	83	第 64 図	34・35・36・37 号竪穴住居跡 出土土器	124
第 24 図	26・27 号竪穴住居跡	84	第 65 図	38・39 号竪穴住居跡出土土器	125
第 25 図	28 号竪穴住居跡	85	第 66 図	1・4 号溝跡・2 号掘立柱建物跡・ 32 号土坑出土土器	126
第 26 図	29・30 号竪穴住居跡	86	第 67 図	5 号溝跡出土土器	127
第 27 図	31 号竪穴住居跡	87	第 68 図	4 号土坑・遺構外出土土器	128
第 28 図	32 号竪穴住居跡	88	第 69 図	石鏃・石鎌・スクレーパー	129
第 29 図	32・33 号竪穴住居跡	89	第 70 図	スクレーパー・石匙・両極石器	130
第 30 図	34・35 号竪穴住居跡	90	第 71 図	両極(石核)・ピース・石核	131
第 31 図	36・37・38 号竪穴住居跡	91	第 72 図	石匙・二次加工剥片・打製石斧	132
第 32 図	39 号竪穴住居跡	92	第 73 図	打製石斧	133
第 33 図	1 号溝跡	93	第 74 図	打製石斧・磨製石斧	134
第 34 図	4 号溝跡	94	第 75 図	凹石類(1)	135
第 35 図	5 号溝跡	95	第 76 図	凹石類(2)	136
第 36 図	1・3・4 号土坑	96	第 77 図	凹石類(3)	137
第 37 図	10～19 号土坑	97	第 78 図	凹石類(4)	138
第 38 図	20、26～33 号土坑	98	第 79 図	凹石類(5)	139
第 39 図	34～37 号土坑	99			
第 40 図	1・3 号掘立柱建物跡	100			
第 41 図	2 号掘立柱建物跡	101			

第 80 図 凹石類 (6)	140	第 83 図 石皿・台石・石包丁・石製模造品・ 金属製品・銭貨	143
第 81 図 凹石類 (7)	141		
第 82 図 凹石類 (8)・石皿	142		

挿表目次

第 1 表 遺跡地名表	11・12	第 5 表 石器組成グラフ	43
第 2 表 2号掘立柱建物跡柱穴一覧表	28	第 6 表 金属製品・銭貨一覧表	56
第 3 表 3号掘立柱建物跡柱穴一覧表	29	第 7 表 黒曜石産地別グラフ	59
第 4 表 1号掘立柱建物跡柱穴一覧表	36		

写真図版目次

PL1 SB01・02・04・05	PL15 SB18・19・21・24・28 出土土器
PL2 SB06・07・09・10・11・12・13	PL16 SB30・31・32 出土土器
PL3 SB14・15・16・17・18・19	PL17 SB33・37・38 出土土器
PL4 SB20・21・22・23・25・26・28	PL18 SB39・SD02 出土土器
PL5 SB29・30・31・32・33	PL19 SD04・05 出土土器
PL6 SB34・35・36・37・39	PL20 SK04・32、遺構外出土土器、 金属製品・銭貨
PL7 ST01・02・03、SD01・04	PL21 石鎌、石錐・スクレーパー・ピエス
PL8 SD05、SK01・03・04、ST03	PL22 石匙・二次加工剥片・磨製石斧・石包丁・ 石製模造品、両極石器・石核
PL9 SK10・32・33・34、5区土層断面ほか	PL23 打製石斧、凹石類
PL10 SB02・03・05・06 出土土器	PL24 凹石類 (磨石)・凹石類 (敲石)
PL11 SB07・09・10 出土土器	PL25 石皿
PL12 SB11・12・13 出土土器	
PL13 SB15・16 出土土器	
PL14 SB17・18 出土土器	

添付 CD 収録データ一覧

1. 構井・阿弥陀堂遺跡報告書.pdf
2. 土器台帳.xls
3. 石器台帳.xls
4. AMS 分析フォルダー
 - ・工程表.doc
 - ・測定結果報告書.doc
 - ・報告書構井・阿弥陀堂遺跡.doc
5. 遺跡炭化種実同定フォルダー
 - ・本文.doc
 - ・表.xls
 - ・キャプション.doc
 - ・図版フォルダー
6. 炭化材樹種同定
 - ・Wood.doc
 - ・WoodT.xls
 - ・WoodPC.doc
 - ・WoodP フォルダー
7. 黒曜石産地同定分析フォルダー
 - ・構井・阿弥陀堂推定結果.xls
 - ・写真フォルダー
8. リン酸カルシウムフォルダー
 - ・P・Ca 分析.doc
 - ・表 1-3.xls
 - ・caption.doc
 - ・図版 1.jpg

第1章 調査の経緯と方法

第1節 保護協議から本調査に至る経緯

1 保護協議

県道大年線建設事業に係わる埋蔵文化財の保護協議は、平成15年11月13日、平成16年9月16日、同年10月4日に長野県諏訪建設事務所、長野県教育委員会、茅野市教育委員会の三者で行われ、事業地内の調査については記録保存とするが、茅野市教育委員会が試掘調査を実施し、本調査については試掘調査の結果を待って再度協議を行うこととなった。

これを受けて、平成16年10月19日～11月2日に茅野市教育委員会による試掘調査が実施され、縄文時代前期から古墳時代後期の遺構が検出された。これらの遺構は、上下2層に検出面が分かれる箇所が存在したため、部分的に2面調査の必要性が示された。

試掘調査の結果を受け、平成17年1月12日、長野県諏訪建設事務所、茅野市教育委員会、長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センターの四者による保護協議が実施され、以下の事項が確認された。

- ・ 事業地内には構井・阿弥陀堂遺跡があるが、事業の公共性から記録保存とする。
- ・ 茅野市教育委員会は、平成17年度以降は調査の体制が組めないこと、県事業であることから調査は県埋蔵文化財センターが実施する。
- ・ 調査対象面積は5,000㎡とする。ただし、部分的に2面の調査が必要と考えられることから、最大で7,000㎡の調査が必要である。

2 発掘届けと発掘の指示

平成17年2月14日付 16 諏建第433号で長野県諏訪建設事務所長から、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、長野県教育委員会あてに通知が送付された。これを受け、長野県教育委員会教育長は、同年3月9日付 16 教文第18-207号で、記録保存のための発掘調査を長野県埋蔵文化財センターに委託のうえ、実施する旨を長野県建設事務所長あてに通知した。平成17年、長野県埋蔵文化財センターは下記の内容で長野県教育委員会あてに文化財保護法第57条に基づく発掘届を提出し、教育長もしくは教育長職務代理人から調査許可を受けた。

- ・ 平成17年度 発掘届：17長埋第10号
調査許可：17教文第4-4号
- ・ 平成18年度 発掘届：18長埋第1-13号
調査許可：18教文第4-25号

3 受委託契約

長野県諏訪建設事務所と長野県埋蔵文化財センターの契約内容は下記のとおりである。

- ・ 平成17年度 内 容：発掘調査・基礎整理作業
期 間：平成17年4月1日～平成18年3月27日

第1章 調査の経緯と方法

- 受託料：当初契約 70,680,000円
変更契約 60,316,000円
- ・平成18年度 内 容：発掘調査・基礎整理・本格整理作業
期 間：平成18年6月26日～平成19年3月27日
受託料：当初契約 18,208,000円
変更契約 12,452,000円
- ・平成19年度 内 容：本格整理作業
期 間：平成19年4月2日～平成20年3月27日
受託料：当初契約 9,566,000円
変更契約 8,025,000円

第2節 発掘調査・整理作業の体制

1 調査組織

(1) 平成17年度

- ・発掘調査期間 平成17年4月21日～11月30日
- ・調査面積 5,000㎡
- ・基礎整理期間 平成17年12月2日～平成18年3月27日
- ・調査・整理体制 所 長：仁科松男 副所長：根岸誠司 管理部長補佐：上原 貞
調 査 部 長：市澤英利 調査第二課長：平林 彰
調 査 研 究 員：土屋哲樹 広田和穂 藤原直人
発 掘 補 助 員：小池美秋 伊藤益郎 篠原治郎 小松純子 新村 力 柳沢省一
宮坂 勇 小川文啓 金子清春 小平 寛 森 浩子 相澤勝浩
北沢俊弘 小林 貢 土橋宏州 新井清一 藤森三千恵 武田 武
宮坂今朝壽 藤森敏幸 小林弘晃 河合慎太郎 北原良一
守屋幸介 今井敬樹 内川 寛 岩崎友美 高木政光 室岡正男
藤森敬介 山田三郎 菊池治市 鳥立政秀 名取寛禎 平林泉地
魚石 勇 藤本邦尋 小沢富久衛
基礎整理作業員：深沢優子 大井晴美

(2) 平成18年度

- ・発掘調査期間 平成19年1月15日～1月26日
- ・調査面積 300㎡
- ・基礎整理期間 平成19年1月29日～3月27日
- ・本格整理期間 平成18年4月2日～平成19年3月27日
- ・調査・整理体制 所 長：仁科松男 副所長：根岸誠司 管理部係長：山崎勇治
調 査 部 長：市澤英利 調査第二課長：平林 彰

調査研究員：藤原直人

発掘補助員：室岡正男 島立政秀 名取寛規 平林泉地

本格整理作業員：鈴木幹子 浅井とし子

(3) 平成19年度

- ・本格整理期間 平成19年4月2日～平成20年3月27日
- ・調査・整理体制 所 長：仁科松男 副所長：根岸誠司 管理部係長：山崎勇治
調査部長：平林 彰 調査第二課長：寺内隆夫
調査研究員：藤原直人

第3節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

埋文センターでは調査法の共通認識と調査の統一性を図るため「遺跡調査の方針と手順」を作成し、これに沿って発掘調査を行っている。本調査も基本的にこれに従った。また、調査区が市街地にあつたため、安全対策・騒音対策・防塵対策など、そのつど地元・事業者・工事委託業者と協議を重ね、措置をとった。

(1) 遺跡の名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、遺跡名には、記録の便宜を図るため大文字のアルファベットの3文字を用いた遺跡記号をあてている。3文字の先頭のアルファベットは長野県を9分割した地区を示し、茅野市は「G」地区に含まれる。2・3文字目は遺跡名を省略したもので、ローマ字表記した「KAMA I・AMIDADOU」から「KA」を用いた。

この記号は、本遺跡に関する遺物および図面、写真など全ての記録で使用している。遺跡と読み方、遺跡記号は以下のとおりである。

遺跡名：構井・阿弥陀堂遺跡 読み方：かまい・あみだどういせき 遺跡記号：GKA

(2) 遺構の名称と記号

遺構記号は記録の保存活用のために便宜上つけたものである。本遺跡で該当する遺構記号を以下に記す。

記号 種類・性格

- SB 2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形などの掘り込み。本書では、その性格の検討後、竪穴住居跡・竪穴状遺構と表記した。
- ST SBより小さな落ち込み、および石が一定間隔で方形、円形に配置されたもの。他の落ち込みが付属する場合がある。本書では、性格を検討し、掘立柱建物跡と表記した。
- SK 単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められないSBより小さな掘り込み。落とし穴、貯蔵穴などが該当する。本書では土坑と表記した。

- S D 一辺が長くなる溝状の掘り込み。溝・堀・水路が該当する。本書では、溝跡、あるいは溝状遺構と表記した。
- S F 単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。および、炭化物の集中範囲。いわゆる火床・焼土集中などが該当する。

(3) 遺構検出から遺構完掘まで

遺構検出 茅野市教育委員会の試掘調査結果を受けて、遺構検出面までは重機によって掘削した。その後、人力による遺構検出のための平面精査を行った。試掘調査で検出面が2面に分かれた地点については、1面の調査終了後、重機によりトレンチを設定した。これにより2面目の検出面を確認し、検出面までの無遺物層については重機により掘削した。つづいて2面目の平面精査を行った。

遺構掘り下げ 検出遺構の掘り下げは、土層観察用ベルトを設定し、堆積状況や遺物出土状況を把握して遺構廃絶後の状況を記録化する。次ぎに遺構底面まで掘り下げ、遺構の残存構造を記録化した。最後に、堀方など遺構構築に係わる落ち込みを調査し、記録化した。今回は、特殊な性格や構造を示す遺構がなかったため、すべてこの方法で進めた。

(4) 記録

基準点の設定 調査区は国土交通省国土地理院の旧測量法による日本測地系・平面直角座標系第8系(X = 0.0000, Y = 0.0000)を基点として、大々地区・大地区・中地区に地区割りし、測量杭は測量業者に委託し実施した。

測量・図面作成 遺構の断面図などの作成は、調査研究員および実測指導を経た補助員が、上記の測量杭を基準として行う簡易測量を基本とした。また、平面図は測量業者の単点図をもとに結線した。全体図・地形コンタ図等は測量業者の単点測量図面(1:200, 1:100)を加工して使用した。

写真 発掘調査中の遺構等の写真撮影では、6×7判・35mm判カメラを使用した。6×7判カメラは将来大判に引き伸ばすことが予想されるものに使用し、基本的な遺物出土状態や遺構写真については35mm判カメラを使用した。カラーについてはポジフィルムを使用した。

第4節 整理の方法と報告書の作成

1 基礎整理作業

調査記録の修正・補正、遺物洗浄・注記作業などの基礎整理作業を平成17・18年度の冬期に実施した。図面は記載事項の内容の点検・修正を行い、記入漏れや付加事項を追加・編集した。修正済みの遺構個別図のデジタル・トレース、調査範囲図、遺構配置図は業者に委託した。

写真は現像し、35mm・6×7判の白黒はベタ焼きをアルバムに貼付し、35mm・6×7判のポジフィルムは35mmはマウントに取め、6×7判はマウントをつけずにアルバムに収納した。アルバムには撮影場所、撮影内容、撮影日などの撮影情報を転記した。

遺物の洗浄・注記は発掘期間中に現地で洗浄し、残部は基礎整理作業中に篠ノ井整理棟で洗浄した。遺物の注記は基礎整理作業中に篠ノ井整理棟で行った。

2 本格整理作業

報告書作成に向けての整理作業を平成18年度に実施し、刊行のための編集作業を平成19年度に行った。報告書作成にあたっては、遺構図面の校正・編集、遺物図の仮割付、遺構写真の仮割付までをセンターで行い、図面のデジタル化、本割付などの編集は編集委託業者に委託した。印刷は、デジタル入稿の形で印刷を実施した。

図面は、基礎整理作業でデジタル化された遺構個別図に、出土した遺物の出土状況がわかりやすいように合成した図を編集した。写真は、報告書掲載用のフィルムを選択した後、業者委託によってスキヤニング・トリミングを行い、報告書に掲載した。

遺物では、土器と石器、金属器に大別して整理作業を行った。

並行して図面・写真の分類・整理を行った。遺構実測図面についてはグラフィックソフトを用いたトレースを行い、委託業務によるデジタル化を試みた。

遺物の整理：土器・石器などの遺物は人手による実測・トレース（石器のトレース、黒曜石の実測・トレース、は委託業務により実施）、仮図版組みまでを行い、図版作成については委託業務により行った。

報告書の作成：版組みによる図版作成は編集委託業務により実施した。

記録と遺物の収納：発掘作業で作成した実測図や測量図面、整理作業で作成した遺物実測図等はすべて台帳に記録した。写真についても発掘作業中に撮影した写真や整理作業で撮影した遺物写真についても台帳に記録し、後日の検索ができるよう作成した。

遺物については報告書掲載遺物と非掲載に分別し、それらの検索が可能な台帳を作成し収納した。

第5節 調査日誌抄

平成17年度

4月20日 地元説明会（上原・ちの町地区）

4月21日 現地で諏訪建設事務所（藤森氏）立会いのもと用地の確認。

4月22日 発掘機材準備。調査区周りの防塵・安全対策。

6月9日 永明中学校の生徒が発掘作業現場を見学（生徒34名、教員2名）。

4月27日 発掘補助員の開始式。1区の表土剥ぎ開始。防塵

6月10日 平安時代の2号竪穴住居跡を検出。2軒の竪穴住居跡との重複が認められる。

対策のための防塵ネット使用の承諾を周辺住民から得る。
4月28日 人力による遺構検出・掘下げ作業開始。昨年度（平成18年度）の茅野市試掘トレンチ検出。

6月16日 諏訪神事研究会（代表：原田哲郎氏）7名見学。

5月9日 平安時代と思われる1号掘立柱建物跡検出。

6月17日 周辺住民から重機の騒音について苦情が寄せられた（茅野市市民環境課）ため、重機による表土剥ぎ中止。地元への説明が、27日超低騒音型重機により再開

5月11日 2区重機による表土剥ぎ開始。

7月5日 2区南部の遺構確認開始。

5月13日 縄文時代中期の1号竪穴住居跡検出、掘下げ開始。

7月14日 平安時代の16号竪穴住居跡と古墳時代後期の19号竪穴住居跡が重複した状態で検出。

5月19日 3区重機による表土剥ぎ開始。2区人力による遺構検出・掘下げ作業開始。

8月4日 4区表土剥ぎ開始。

5月31日 3区測量基準杭業者委託で打設。

8月17日 弥生時代後期の29号竪穴住居跡と縄文時代前

6月1日 1区の調査終了。1区横の旧私道部分復元。

第1章 調査の経緯と方法

- 期前葉の28号竪穴住居跡検出。29号掘下げ開始。
- 8月22日 5区重機による表土剥ぎ開始（アスファルト除去）。
- 8月29日 2区・3区の1面目の調査終了。
- 8月30日 縄文時代前期前葉の31号竪穴住居跡と重複する弥生時代後期の4号溝跡（方形周溝墓）検出。
- 8月31日 2区・3区重機による2面目の掘削開始。
- 9月9日 3区の2面目が検出されなかったことから、深掘りトレンチ掘削（重機）。15日より2区で実施、2面目以下で遺構・遺物は確認できなかった。
- 10月3日 6区、掘削前に安全対策。後、重機による表土剥ぎ開始。
- 10月6日 永明中学校2年生3名、発掘体験。弥生時代後期の32号竪穴住居跡と重複した縄文時代前期前葉の35号竪穴住居跡を検出。掘下げ開始。
- 10月12日 6区調査終了。
- 10月19日 重機による全面（遺跡見学区域は見学会終了後）埋め戻し開始。
- 10月23日 遺跡見学会（見学者70名）。
- 11月2日 調査終了。
- 11月3日 撤収準備。
- 11月22日 機材搬出（篠ノ井へ）。
- 11月24日 水道撤去。
- 11月25日 プレハブ撤去。
- 11月28日 埋め戻し終了。
- 11月30日 現場撤収。

基礎整理作業

- 12月1日 基礎整理作業開始。
- 12月16日 図面台帳終了。
- 12月22日 遺物洗浄・注記作業終了。
- 1月5日 図面修正・遺構所見開始（～3月27日）。
- 1月30日 写真整理終了。
- 2月8日 黒曜石産地同定委託、完了。
- 2月27日 遺構トレース図修正開始（～3月13日）。
- 3月7日 科学分析（AMS年代測定）委託、完了。
- 3月17日 地形測量業務委託、完了（測量成果簿・図面等納入）。
- 3月24日 科学分析（リン酸カルシウム分析）委託、完了。

平成18年度 発掘調査

- 1月15日 機材搬入、重機による表土剥ぎ開始。
- 1月17日 遺構検出。
- 1月26日 調査終了、諏訪建設事務所（藤森氏）立会い。

平成18年度 本格整理作業

- 9月4日 本格整理作業開始（土器の接合・遺構図の編集開始）。
- 9月11日 土器の抽出・分類開始。
- 9月21日 土器復元開始（～2月23日・中断あり）。
- 9月29日 土器実測開始（～3月5日・中断あり）。
- 10月10日 土壌サンプル洗浄開始。
- 10月12日 石器実測開始（黒曜石以外）。
- 10月26日 土壌サンプル洗浄終了。
- 10月16日 黒曜石計測作業。
- 11月1日 遺構計測カード作成（～22日）。土器トレース開始。
- 11月30日 遺構図編集終了。
- 12月11日 土器観察表作成（～1月8日）。
- 12月12日 委託用石器一覧の作成。
- 1月5日 土器拓本（～2月6日）。
- 1月29日 平成19年度分基礎整理作業開始（本格整理と並行作業）。
- 1月30日 測量委託業者と遺構図面の校正（～2月28日）。
- 2月14日 炭化樹種・種子同定試料、委託業者へ引渡し。
- 2月16日 遺物（版）割付図版作成（～23日）。
- 2月28日 炭化樹種・種子同定委託業務、完了。
- 石器実測・トレース委託業務、打合せ（図面校正）。

平成19年度

- 7月25日 発掘報告書の編集委託業務、開始。
- 1月28日 発掘報告書の編集委託業務、完了。
- 2月25日 記録類・遺物の収納作業、開始。
- 3月7日 発掘報告書の印刷業務。
- 3月19日 発掘報告書の刊行。

第2章 遺跡の環境

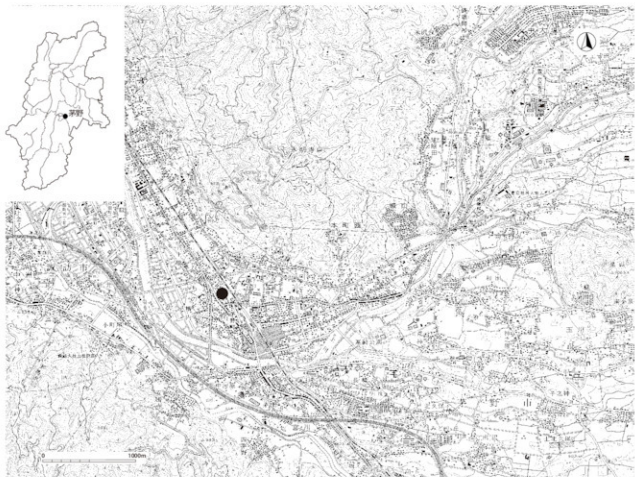
第1節 遺跡の位置

茅野市は、日本列島のほぼ中央付近にあたる。太平洋側（静岡県沼津市）までは約120km、日本海沿岸（富山県富山市）へは約130kmと、ほぼ中間地点の内陸部に位置する。遺跡は、北緯 $35^{\circ}59'41''$ 、東経 $138^{\circ}09'04''$ 、世界測地系では、北緯 $35^{\circ}59'40''$ 、東経 $138^{\circ}08'53''$ にあたる。

遺跡の地番は、茅野市ちの2551-9～3417-3他で、茅野駅から南西に約500m、歩いて10分ほどの市街地にある。その中でも調査区は、茅野駅のあるJR中央東線と、これに平行する旧国道20号に挟まれた場所である。

旧国道20号は、江戸時代には甲州街道が設けられ、人の往来が絶えなかった街道である。また、南北に甲斐と諏訪を結ぶ交通路のほかに、上田・佐久方面の峠越えの道、伊那方面からの杖突峠越えの道が交差する地点にも近い。このように東西交通路の基点でもあり、古くは古東山道（山浦道）が通っているなど、交通の要所にあたる。

さらに戦国時代には、遺跡の北東側の永明寺山に上原城が築かれ、山の麓の城下町は繁栄をみせていた。



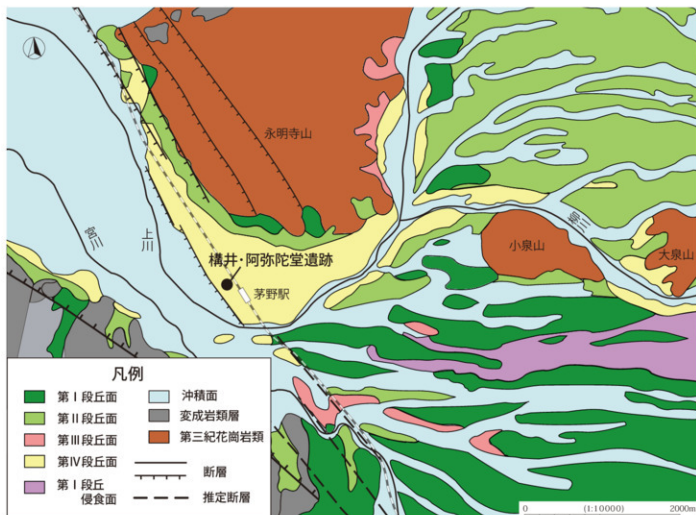
第1図 遺跡の位置図

第2節 地質・地形環境

茅野市域は、中央構造線と、糸魚川・静岡構造線（以下、フォッサ・マグナ）の交わる場所に位置している。中央構造線は日本を内帯と外帯に分け、糸魚川・静岡構造線は日本を東北日本と南西日本に分けている。このように、地理的な位置だけでなく、地質学的にも日本列島を分ける分岐点にあっている。また、フォッサ・マグナに関連する断層が構井・阿弥陀堂遺跡の西側を走っており、上川の低地と段丘を分けている。

茅野市域は地質的に大きく2分される。西側は、中央構造線上に位置する西山山地で、中古生層や第三紀層の海底堆積物からなる岩石によって形成されている。一方、東側はフォッサ・マグナから噴出した霧ヶ峰・八ヶ岳と、それら火山群噴出物の堆積する地域からなっている。遺跡は、後者の火山群が噴出して形成された台地の末端にあたる。

四方を山に囲まれた茅野市域は、東部には赤岳（2899m）を主峰とする八ヶ岳連邦がそびえ、主峰から北には横岳、硫黄岳、天狗岳、竊枯山などの2000m級の山々が連なり、さらにその北端には独立峰のような蓼科山が連なっている。北部には蓼科山から続く八子ヶ峰、さらに西には霧ヶ峰山地の主峰車山が鎮座している。その霧ヶ峰山地は南に緩やかに続き、遺跡のある永明寺山まで至っている。



第2図 茅野市地質図

八ヶ岳からの噴出物はその裾野に緩やかに傾斜する広大な台地を形成している。また、八ヶ岳噴出物の形成した台地の北側には、霧ヶ峰山麓の扇状地と上川の氾濫原によって形成された「山浦」と呼ばれる地区がある。これら八ヶ岳山麓から「山浦」、霧ヶ峰山麓には、多くの縄文時代遺跡が立地している。また、黒曜石の産地である霧ヶ峰山麓は黒曜石搬出ルート（茅野市教育委員会1986）ともいわれている。

これに対し、守屋山山麓は急傾斜の断層崖の地形で、諏訪湖盆地に接した上川・宮川の堆積物からなる上川沖積地を形成している。この沖積低地周辺には、弥生時代以降の遺跡が多く認められる。

本遺跡は茅野市のほぼ中心部、「山浦」地区と諏訪盆地の接点にあたる位置にあり、永明寺山裾から、南の上川沖積地に向かって広がっている平坦な段丘面に存在する。この上川河床と永明寺山裾の間の段丘面は、上川・宮川沿い鬼場・栗沢・本町に形成された侵食段丘上の地形面で、第4段丘面（茅野面）と呼ばれ、南に面した上川の河床からは3～6mの比高差を測る。この面上にはテフラ層はほとんどのせていない。さらに細別すれば、本町・塚原・上原・横内の地籍は塚原段丘（塚原面）と呼ばれている。

茅野面、塚原面は、現在では市街地化し、開発の著しい地域の一つであるが、かつては水稲耕作・畑作地帯として早くから開けた地域でもある。

第3節 歴史的環境

1 縄文時代

茅野市内の縄文時代の遺跡は、八ヶ岳西南麓・霧ヶ峰山麓のいわゆる「山浦」と呼ばれる地区と、諏訪湖盆地に望む永明寺山麓・守屋山麓の大きく2つに分けることができる。そして、これらの地区は様相を異にしている。前者では八ヶ岳西南麓の尖石遺跡をはじめとして早くから注目され、調査も行われてきた地域で、比較的集落規模の大きな遺跡が多い。一方、後者では急峻な地形、あるいは市街地化されていた場所に該当しており、調査される機会が少なく、規模や内容が不明な遺跡が多い。

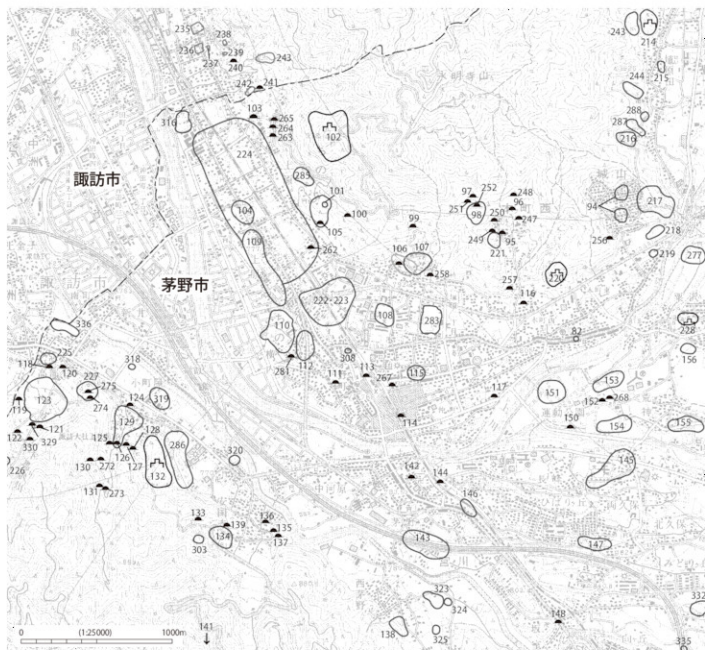
本遺跡は、後者に入る永明寺山麓の遺跡である。ここでは、今回集落跡が検出された縄文時代前期前葉の遺跡を中心に、諏訪湖盆地に望む地域を概観しておく。

永明寺山麓の段丘上には、山裾より一段上がったテラス状の高台に位置する一本榎遺跡(107)と、台地上の(構井・)阿弥陀堂遺跡(222)がある。一本榎遺跡は、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡6軒とともに、前期前葉とみられる繊維土器が出土している。ただし前期の遺構は検出されていない。(構井・)阿弥陀堂遺跡では、縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認され、縄文時代中期後半の竪穴住居跡が8軒検出されている。しかし、これまでの調査地点では、縄文時代前期前葉の遺構・遺物はみつからない。

永明寺山東麓まで範囲を広げると、棚畑遺跡(94)があげられる。ここでは、縄文時代早期の配石群・中期初頭の住居跡が検出されている。前期前葉の遺構はないものの無文の繊維土器、中越式土器、木鳥式土器が出土している。一方、上川をはさんだ東岸の長峰台地の裾には、下ノ原遺跡があり、縄文時代前期前葉の住居跡2軒、中期26軒、後期2軒が検出され、前期前葉の住居跡からは木鳥式土器、繊維土器が出土している。

宮川、上川を挟んだ対岸の守屋山系の山脚では、縄文時代中期～後期にかけての住居跡を検出した高部遺跡や前期末葉～中期初頭の晴ヶ峰遺跡があるが、前期前葉の遺構・遺物はほとんどみつからない。

このように、諏訪湖盆地の上川・宮川に面した地域の縄文時代前期前葉のあり方は、遺跡数も少なく、



第3図 茅野市遺跡分布図

遺構を伴わない土器のみの出土に留まる遺跡が多い。

一方、「山浦」と呼ばれる地域の遺跡のあり方は、諏訪湖盆地に面した遺跡とは様相が全く異なる。代表的な縄文時代前期前葉の遺跡では、上川中・上流域の駒形遺跡、高風呂遺跡があげられる。

駒形遺跡は、平成6・8年に長野県教育委員会の試掘・分布調査によって100軒を超える中期前葉・後葉の集落であることが確認され、平成16・17年には道路建設に伴う調査（長野県埋文センター2007）で37軒の竪穴住居跡や8棟の方形柱穴列などを調査している。高風呂遺跡は前期初頭から前葉を中心とする遺跡で、早期末から前期・中期にかけての遺構が検出されている。また、両遺跡では、石器製作に係わりと見られる黒曜石集中などの遺構や多数の黒曜石が出土していることから、黒曜石原産地直下の拠点集落とみられている。そして、拠点集落の周辺ではよせの台遺跡やノ瀬・芝の木遺跡などの小規模な集落の存在が知られている。

遺跡名	旧石器	縄文							弥生		古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
		縄前期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	中期	後期						
44 榎塚	●		●	●	●	●	●						●	●		
82 水尻			●	●	●											
94 榎塚			●	●	●			●								
95 西入矢穴1号古墳											●					
96 中矢穴1号古墳											●					
97 矢穴2号古墳											●					
98 矢穴					●						●					
99 家石古墳											●		●			
100 十二功古墳											●					
101 大明寺					●								●	●		
102 上原城跡														●		
103 鉄古塚古墳											●					鉄甲塚古墳
104 地藏堂					●											
105 藤塚古墳											●					
106 一本塚古墳											●					
107 一本塚					●		●	●			●			●		
108 水野中グラウンド										●			●	●		
109 大明寺					●		●						●	●		
110 家下					●		●		●				●	●	●	
111 一ノ坪古墳											●			●	●	
112 下籠河原											●					
113 姥塚古墳											●		●			
114 大塚古墳											●					
115 原池					●		●						●			
116 塚の廻古墳											●					
117 王塚古墳											●					
118 神長吉黄古墳											●		●			
119 赤津神社古墳											●					
120 女倉塚古墳											●		●			
121 神塚塚古墳											●		●			
122 塚屋古墳											●					
123 高部					●		●			●			●		●	
124 蛇塚古墳											●					
125 前宮古墳											●					
126 石塚古墳											●					
127 横穴古墳											●					
128 芳久保古墳											●					
129 前宮											●		●	●	●	
130 常坊主1号古墳											●		●	●	●	
131 山ノ神古墳											●					
132 千沢城跡					●									●		
133 小瀬通り古墳群					●		●				●					
134 小瀬通										●			●			
135 藤り塚古墳											●					
136 塚屋古墳											●					
137 百々通り古墳											●					
138 裏の山						●					●					
139 御嶽古墳											●					
140 山ノ神(標山)					●	●	●						●			
141 崎ヶ峰					●	●	●									
142 四ツ塚古墳群											●					
143 御社宮司			●				●	●		●			●	●	●	
144 金塚塚古墳											●					
145 長峰	●			●	●	●							●			
146 狐久保					●	●							●			
147 林の塚	●				●	●							●			
148 南塚塚古墳											●					
149 長峰(比古尾原)						●					●					
150 川久保古墳											●					
151 下河原			●		●			●			●					
152 石小屋1号古墳											●					
153 京塚原			●													
154 下ノ原				●	●	●	●	●					●			
155 中野前					●	●	●									
156 上の原					●	●	●									
211 古田城跡	●		●											●		
183 標山					●	●	●						●			
212 尾野前					●	●	●						●			
213 田原石					●	●	●									
214 橋原田城跡														●		
215 橋原田																
216 李久保																
217 鬼塚城跡																
218 土佐屋敷				●			●				●	●	●	●	●	
219 御座石神社						●	●							●	●	
220 御座石神社						●	●							●	●	
221 西入						●	●							●	●	
222-223 横井・阿弥陀堂				●	●	●	●			●			●	●	●	
223 横井																
224 上原城下町																
225 神長官邸											●					
226 礎基																

第1表 遺跡地名表

第2章 遺跡の環境

遺跡名	旧石器			縄文				弥生			古墳	奈良	平安	中世	近世	備考	
	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	中期	後期	不明							
227	狐塚																
228	粟沢橋跡													●			
243	姫塚前															●	不明
244	桂入																不明
247	椋松平古墳										●						
248	中央穴2号古墳										●						
249	西入穴2号古墳										●						
250	西入穴3号古墳										●						
251	矢穴1号古墳										●						
252	矢穴3号古墳										●						
256	中ヤヅカ古墳										●						
257	西林古墳										●						
258	沢口古墳										●						
262	武野の古墳										●						
263	上原矢穴1号古墳										●						
264	上原矢穴2号古墳										●						
265	上原矢穴3号古墳										●						
267	大淵古墳										●						
268	石小塚2号古墳										●						
272	塚塚北2号古墳										●						
273	山ノ神2号古墳										●						
274	狐塚1号古墳										●						
275	狐塚2号古墳										●						
277	広塚	●	●														
281	塚ノ嶺古墳										●						
283	田裏																
285	松山平													●			
286	千代城下町															●	
287	半十郎久保				●											●	
288	小久保								●							●	
303	出願					●										●	
308	大歳神社		●							●						●	
316	和尚塚敷									●						●	
318	姫宮															●	
319	熊玉社周辺															●	
320	平通															●	
323	中村				●						●					●	
324	外宿外				●		●				●					●	
325	蟹田										●					●	
330	須無2号古墳										●						
332	下新田																
335	入の日影																
336	高塚家下															●	

第1表 遺跡地名表

2 弥生時代

弥生時代になると遺跡の動向は一転する。八ヶ岳西南麓や霧ヶ峰・蓼科山系山麓ではほとんど遺跡が見られないようになり、逆に、諏訪湖盆地に面する永明寺山麓や守屋山麓部に遺跡が集中ようになる。

本遺跡周辺に位置する遺跡には、同じ段丘面上に位置する永明中学校グランド遺跡（108）、永明寺山麓の高台の台地状に立地する一本榎遺跡、永明寺山東麓の山腹にある棚畑遺跡、そして本遺跡に隣接する段丘直下の上川沖積地には家下遺跡（110）が知られている。

永明中学校グランド遺跡は本遺跡の北東700mに位置し、弥生時代後期の竪穴住居跡9軒が調査されており、永明寺山麓の低位段丘面上にある遺跡としては、（横井・）阿弥陀堂遺跡と双壁をなす遺跡とされている。また、（横井・）阿弥陀堂遺跡を含めた一つの大きな集落との考え方もある。現段階では、いずれの遺跡も発掘面積が少なく明確な答えは出せない。今後、調査面積が増加することによって関係が明らかにされていくものと考えられる。

一本榎遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡6軒が確認されており、古墳時代への過渡期に営まれた遺跡として貴重である。また、棚畑遺跡は、弥生時代中期後半の竪穴住居跡が1軒と小規模である。山腹の山根みの集落とでもいえる立地で、山での生業を主たる営みとしていた集団の可能性が考えられる。

家下遺跡（110）では、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構・遺物が発見されている。特に、弥生時代では中期に集落が開始され、後期前半から中葉にかけては環濠集落が発見されている。環濠の規模がほぼつかめた例としては、長野県内ではじめての事例である。また、弥生時代後期の12基の

方形周溝墓の検出は茅野市域ではじめてで、環濠集落の発見とともに重要な調査となった。また、遺構は確認されていないが、弥生時代前期末葉の条痕文系土器が出土している。家下遺跡の南東約1.5kmに位置する沖積低地帯に位置する御社宮司遺跡からも条痕文系土器の出土が確認されており、地域への稲作文化の波及にかかわる発見となっている。

3 古墳時代

茅野市内では数多くの古墳が知られているが、集落遺跡の数は古墳と比較すると驚くほど少ない。本遺跡以外では一本椀遺跡・大歳神社遺跡(308)など永明寺山南麓の低位段丘上の遺跡と上川沖積地に立地する家下遺跡・下蟹河原遺跡(112)の4遺跡があげられる。

上川・宮川の対岸にあたる守矢山麓には高部遺跡・神長官邸遺跡が存在し、その宮川上流には御社宮司遺跡がある。また、上川の支流、永明寺山南東麓の鬼場城跡の南には土佐屋敷遺跡がある。

一本椀遺跡は、7世紀半ばの古墳が確認されている。

家下遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡が9軒検出されている。同じような低位段丘崖下の沖積低地に立地する遺跡には、茅野駅から西に300mほど離れた、下蟹河原遺跡がある。遺跡の経緯は、昭和6年の五味重吉氏の発見がきっかけとなり、五味氏と矢島数由氏により調査され、古式土師器を中心とする32個体の土器が出土し、それらの資料は編年研究するうえで現在でも欠くことのできないものとなっている。また、カマド状の遺構からは古墳時代後期の甕が出土している。御社宮司遺跡は、宮川に面した坂室地籍にあり、古墳時代前期の竪穴住居跡が1軒検出されている。この調査により、茅野市内では沖積低地は、「河川の氾濫等により遺跡は存在しない」と考えられていたこと、すでに市街地として利用されていたこと、水田開発などにより遺跡として認識されづかったことが、中央自動車道建設に伴い本格調査が行われたのを契機として再認識されたといえる。

守屋山山麓に立地する高部遺跡では、古墳時代後期と考えられる竪穴住居跡2軒・土溝墓1基が検出されている。

古墳の分布は、永明寺山麓の古墳群。上川河床古墳群。守屋山麓の古墳群。長峰台地の古墳群の4つに大きく分類されている。

本遺跡に最も近く、関係が想定されるのは永明寺山麓古墳群である。古墳の分布から大きく3小群に分けられている。まず、本町地区の山麓の標高約800～900mに位置する矢穴1～3号墳を中心とする一群である。矢穴3号墳は永明寺山麓古墳群の中で最も早く調査された古墳で、直刀(鑷切先大刀)・鉄鏃などが出土している。その直刀から造営は7世紀後半と推定されている。2つ目の小群は、塚原地区の一群で、永明寺山南麓の小丘陵の山腹、標高約800～860mに点在している。発掘調査の行われた古墳としては、環頭柄大刀・甕等を出土した7世紀前半の釜石古墳や直刀・甕・鉄鏃等を出土した7世紀半ばの一本椀古墳があげられる。3つ目は、永明寺山の西向き斜面で、諏訪市との市境近くに位置する。残存する小規模な石室から7世紀末葉とされる鉄古塚(鉄甲塚)古墳やほぼ同時期とされる上原矢穴1～3号古墳で小群を形成するが、諏訪市の矢穴古墳を含めてとらえるべきではないかという意見もある。

永明寺山麓の南西を流れる上川によって形成された沖積地には、上川河床古墳群が存在する。古墳群の範囲は、北は鬼場城から旧国道20号線の断崖崖までの上川右岸に立地する。

代表的な古墳は塚ノ越古墳・大塚古墳・姥塚古墳・王京塚古墳が知られている。上川河床古墳群の造営時期は7世紀後半から8世紀初頭と考えられている。

これら古墳の築造の基盤となった集落は、家下遺跡や下蟹河原遺跡周辺の上川が形成した沖積低地に立地する集落群の可能性が考えられる。

4 奈良・平安時代

茅野市域での奈良時代の遺跡は、現在のところほとんど調査が行われていない。茅野市の遺跡台帳には4遺跡「家下遺跡・乞食塚古墳(120)・前宮遺跡(129)・土佐屋敷遺跡(218)」登録されているが、実際に調査が行われ遺構を検出したのは家下遺跡のみで、多量の土器の出土を見ているが竪穴住居跡の検出は2軒とわずかである。岡谷市・諏訪市などと比較すると遺跡の数はきわめて少なく、周知の遺跡も少ない状況である。奈良時代の諏訪地方の中心は、「諏訪湖東岸地区にあったのではないか」というと推測や「茅野市域では現在の集落と重複しているため発見できてない」という考えがある。

平安時代になると、諏訪湖盆地を望む永明寺山南麓や守屋山山麓には比較的大きな集落が出現する。それは、永明寺山南麓では(構井・)阿弥陀堂遺跡であり、守屋山山麓では高部遺跡をあげることができる。

(構井・)阿弥陀堂遺跡は、前述のように長期にわたる複合遺跡であるが、平安時代の集落関連遺構が他の時代を大きく上回っている。竪穴住居跡をみると、縄文時代が13軒、弥生時代21件、奈良時代1軒なのに対し、平安時代36軒である。本遺跡周辺は宅地化が進み、遺跡の広がりを推測しづらい状況であるが、永明寺山南麓際から本遺跡周辺にかけては、古代の集落がさらに展開することが予想される。

高部遺跡は縄文時代中期の遺跡として知られているが、概期では平安時代前期から後期の竪穴住居跡24軒が発見されている。高部遺跡周辺は古代律令制下では諏訪部の中の神戸郷にあたり、年代的には神戸郷から武居荘に該当することから、平安時代前半に考古学視点から郷戸制に結びついた異例の成果を果たした遺跡といえる。

平安時代になると、拠点的な集落とは別に竪穴住居跡が単独で発見される遺跡が点在するようになる(特に山浦地区などの山間部)。その代表例が、標高約1062～1065mに位置する神田頭C遺跡(304)で、平安時代後期の竪穴住居跡が単独で確認されている。この遺跡周辺には単独、ないしは2軒の竪穴住居跡で構成されると考えられる遺跡が点在している。構井・阿弥陀堂遺跡や高部遺跡と比較すると特異な形態の集落で、10世紀後半から11世紀前半に見られる現象である(柳川1994)。

5 中・近世

永明寺山麓の構井・阿弥陀堂遺跡では、これまでに中世の遺構は発見されていないが、中国宋代の青磁(同安窯系・龍泉窯系)や青白磁の梅瓶が出土している。このことから、中世集落の存在が予想されている。隣接する永明寺山の山腹には上原城跡(102)・板垣平遺跡(285)が知られている。

上原城は諏訪氏の居城であったが、後には武田氏に侵略され、諏訪の高島城に居を移している。現在は石垣のみ残存している。板垣平遺跡は諏訪氏の居館と見られ、諏訪氏に関わる面と、武田氏に関わるものと考えられる面の2つの地表面を確認している。また、2間×1間の掘立柱建物跡が検出されている。2つの地形面と掘立柱建物跡の一部が検出されたことから、全貌はつかめていないものの、板垣信方の屋敷地としての可能性が強くなってきている。

上原城下町遺跡は国道20号線の両側の低位段丘面上の上原地区ほぼ全域が遺跡と考えられている。平成2年の茅野市の調査では詳細な分布調査が実施され、甲州街道の宿場として成立する以前にも、上原城の城下町として13世紀後半から成立し、近世では上原宿として発展し、そして一部の地割は現代でも受け継がれていることが明らかにさつづある。

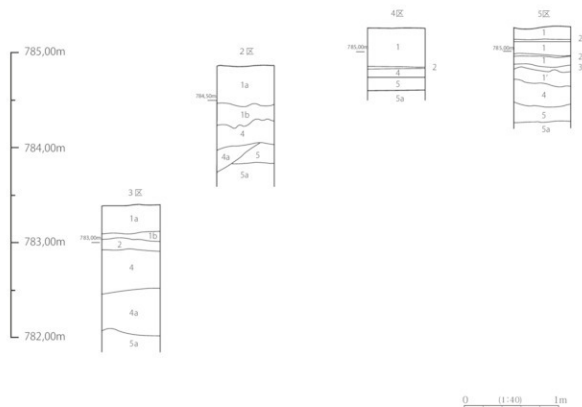
一方、上川・宮川の対岸には茅野市史跡に指定されている干沢城跡(132)を中心に干沢城下町(286)や諏訪神社と関わりのある守屋神長官邸遺跡(225)、諏訪大社上社の神事をうかがわせる三面の造成地と大量のカワラケを出土した礎並遺跡など、諏訪神社信仰と関わりの深い遺跡が集中している。

第4節 基本土層

構井・阿弥陀堂遺跡の土層は、下記のとおりである。基本土層は本調査に先立ち茅野市教育委員会が実施した試掘調査の結果を参考に、本調査中に層序の観察を行い決定した。

- 1 層 2.5Y 4/1 黄灰色 耕作土 微量の砂粒を混入する。
- 1' 層 2.5Y 4/2 黄灰色 耕作土 炭化物粒子を少量混入する。
- 1a 層 砂礫層 客土層。
- 1b 層 10Y 4/1 褐灰色 耕作土 しまりが有り、褐鉄鋼粒子を多量に混入する。
- 2 層 2.5Y 4/4 黄灰色 旧水田層 褐鉄鋼粒子を多量に混入する。
- 3 層 10YR 3/2 黒褐色 旧水田層。
- 4 層 10YR 2/1 黒褐色 しまりやや有り、やや粘質、黄褐色土粒子（ ϕ 1～2cm）を少量混入する。
- 4a 層 10YR 2/2 黒褐色 4層に多量の礫（ ϕ 3～30cm）が混入する。
- 5 層 10YR 4/4 黄褐色 しまり・粘性有、混入物少ない。
- 5a 層 10YR 4/4 黄褐色 5層に多量の礫（ ϕ 3～20cm）が混入する。

1層から3層までは耕作土や盛土などの客土層で、遺構が検出されたのは4層以下の層である。4層は、1・4区と3区西側、5区西端部では堆積が薄く5～10cmほどで、上部からの削平で部分的に検出されない箇所もあった。3区東側と2区西側では最深度で40～50cm、同じ黒褐色土で礫を混入する4a層



第4図 基本土層図

を含めると1mほどの深さであった。4a層は、2区の西側から3区で確認されたが、2区東側と1・4・5区では確認されていない。2次堆積層である5層は2区東側と1・4・5区で認められ、2区西側と3区では認められず、4a層直下は5a層となる。5a層は基盤となる層で、重機によって4mほど掘り込んだが変化は認められなかった。

今回の調査は、試掘調査の結果、遺構が2面のわたって存在する可能性が指摘されていたため、2面の調査を行った。2面目の調査は、4・4a層が認められた3区東側と2区西側の区域について、重機により5・5a層上面まで掘下げ、その後、人力により5・5a層上面の検出を行った。しかし、遺構・遺物は検出されなかった。

第3章 遺構

第1節 概要

5000 m²の調査区で検出された遺構は、竪穴住居跡39軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡3条、土坑26基ほかである。時期別にみると、縄文時代前期がそれぞれ7軒、1基。縄文時代中期が2軒。弥生時代後期が5軒、2条。古墳時代後期が6軒、2棟、2基。平安時代が18軒、1棟、1条、21基。中世が1軒、2基である。

遺構図・写真の掲載は、竪穴住居跡(SB)・溝跡(SD)・土坑(SK)・掘立柱建物跡(ST)の遺構記号順である。各遺構は、時代順ではなく調査時に命名した遺構番号順になっている。一方、本章での記述は各時代の様相を把握するため、時代順とした。

第2節 縄文時代の遺構

1 概要

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡9軒、土坑1基が確認された。このうち、竪穴住居跡7軒と土坑1基が前期に比定される。中期の竪穴住居跡は2軒である。

前期の竪穴住居群には2つのまとまりが存在する。1つは東部の4区・5区、II-C,DグリッドのSB28、30、31、34、35の5軒(Aグループ)である。もう1つは、3区西端部のI-Oグリッドに位置するSB21、SB38の2軒(Bグループ)である。調査区内の地形を見ると、3区西側が、なだらかな平坦部となっており、Bグループの住居群が立地している。一方、II-C,Dグリッド周辺には、5区のSB35付近を頂点とした丘陵状の高まりが存在する。その東側は急激に落ち込み、西側は緩斜面となっている。Aグループは、この小尾根状の高まりに立地している。

中期の2軒は、1区のII-Wグリッドのほぼ中央部(SB01)と、3区西端部の旧国道20号線に近いI-Oグリッドほぼ中央部(SB14)に位置している。両住居跡は、直線距離で約145m離れており、2軒が同じ集落に属していたかは不明である。また、本遺跡は東から西に向かって緩やかに傾斜しており、SB01周辺の標高は784.0m、SB14付近では781.5mと、約2.5mの比高差がある。

2 縄文時代前期の遺構

(1) 竪穴住居跡(SB)

21号竪穴住居跡(SB21)(第21図、PL4) 位置:3区、I-O-02.07グリッド
 形状:楕円形 規模:(508×440残存長)cm、深さ19cm、床面積(16.05)m² 主軸方位:不明
 調査の経緯:4a層上面で確認した。覆土と地山の差がほとんどなく平面形がつかみづらかったため、トレンチにより床面と壁を検出しプランを確定した。覆土床面直上には焼土粒子が含まれていることから、焼土粒子の有無により床・柱穴などを確認した。遺構の重複:なし
 住居内施設:礫を多く含む地山の5a層を床としているが、床面は水平ではなく、中央部が深く壁面に近

いほど浅くなっている。床面自体に硬化は見られない。壁は緩やかに立ち上がる。周溝は検出されなかった。柱穴は5基検出され、深さはP1が24cm、P2は35cm、P3は30cm、P4は27cm、P5は23cmを測る。炉跡は、床面が部分的に被熱し広範囲に赤化していたことや、掘り込みが検出されなかったことから、特定できなかった。

堆積状況：2層に分層され、覆土下層や床面直上には部分的に多量の焼土が散在していた。

遺物出土状況：覆土下層や床面直上に散在する焼土粒子混入層に、土器が数点出土している。

時期：縄文時代前期前葉

28号竪穴住居跡 (SB28) (第25図、PL4) 位置：4区、VII-C-05、D-01 グリッド

形状：隅丸方形 **規模：**420×382cm、深さ40cm、床面積12.11㎡ **主軸方位：**不明

調査の経緯：5a層上面で確認した。当初は29号竪穴住居跡と重複すると考えトレンチで確認したが、重複は認められなかった。覆土には地山に比べ礫の混入が少なく、しまりに欠けていることを根拠にプランを確認した。南壁の大部分はカクランにより不明である。**遺構の重複：**SD04との重複が予想されるが、カクランのため不明である。

住居内施設：床面は5a層を掘り込んで構築されており、硬化面や貼床は認められない。5a層に含まれる礫のため床面は凹凸が認められる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出されなかった。柱穴は7基確認された。主柱穴は位置と規模からP2・P6・P4・P7と考えられる。P5は壁際にて設けられていることから、出入口にかかわる柱穴の可能性がある。各柱穴の深さは、P1が21cm、P2が33cm、P3が16cm、P4が24cm、P5が16cm、P6が8cm、P7が22cmを測る。P3のみが不整形円形を呈し断面に傾斜が認められる。炉跡と考えられる被熱や掘り込みは検出されなかった。

堆積状況：覆土は3層に分層したが、各層の差異はほとんどなかった。**遺物出土状況：**ごくわずかが出土したのみである。弥生土器が出土しているが、混入したものと考えられる。

時期：縄文時代前期前葉

30号竪穴住居跡 (SB30) (第26図、PL5) 位置：4区、VII-C-05、10 グリッド

形状：楕円形 **規模：**412×(380残存長)cm、深さ34cm、床面積11.16㎡ **主軸方位：**不明

調査の経緯：5層上面で検出された。覆土が5層に類似していたため、トレンチにより床面と壁を検出し、平面プランを確認した。基本土層の5層中にある床面は、若干の色調の違いで判断した。柱穴は、床面との色調の違いにより確認できた。**遺構の重複：**SD04と重複し、本跡はSD04に切られている。

住居内施設：床面は基本土層の5層中にあり、硬化面・貼床は認められない。壁はやや緩やかに立ち上がる。周溝は認められない。柱穴は4基検出され、深さはP1が45cm、P2は46cm、P3は42cm、P4は40cmを測る。炉跡と思われる被熱面や掘り込みは検出されていない。

堆積状況：7層に分層できた。下部層は地山に近い色調であったが、上部層は土壌化した黒色土であった。**遺物出土状況：**下部層との境である6層より上位で、多くの土器小片が出土している。床直はほとんどない。(第59図1、PL16)はP2とP3の間から、2はP4周辺から出土している。

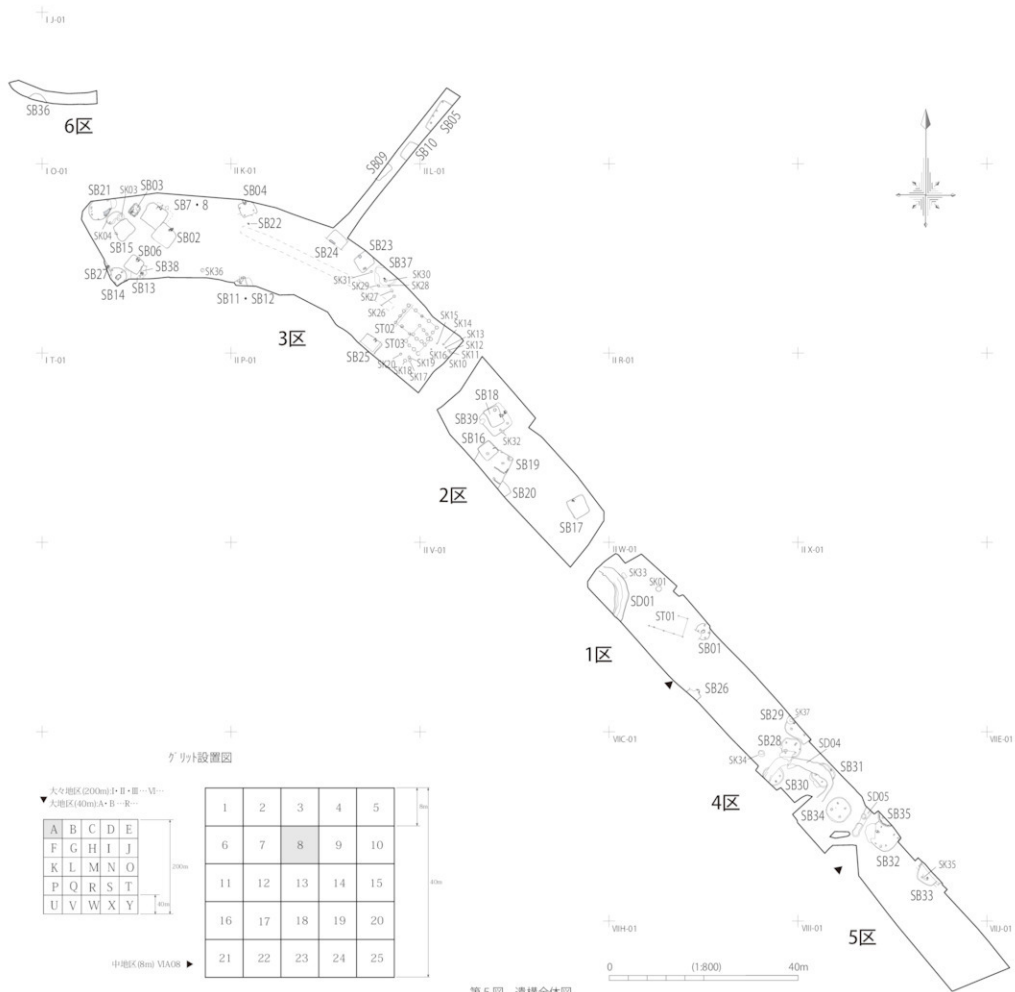
時期：縄文時代前期前葉

31号竪穴住居跡 (SB31) (第27図、PL5) 位置：3区、VII-D-01、06 グリッド

形状：隅丸方形 **規模：**460×430cm、深さ48cm、床面積14.70㎡ **主軸方位：**N40° W

調査の経緯：5層上面で、5層に比べ色調が暗かったことから平面プランを確認した。床面は直上に微量の炭化物粒子が散在していたことと、しまりが強いことから判断した。**遺構の重複：**なし

住居内施設：床面は5層中に構築されており、ほぼ全面が硬化していた。貼床は認められない。床面の中央部(主柱穴の内側)が窪んでおり、壁際とは最大13cmの差がある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝



グリッド設置図

▼ 大々地区(200m) I - II - III - IV - V
 ▲ 大地区(40m) A - B - R - S - T - U - V - W - X - Y

A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

第5図 遺構全体図

が全周する。柱穴は5基検出し、深さはP1が42cm、P2は58cm、P3は56cm、P4は44cm、P5は58cmを測る。主柱穴は配置からP1・P2・P3・P4と考えられるが、P4・P5は作り替えの可能性もある。また、P3のみ不整形を呈する。炉跡の掘り込みは認められなかったが、P1とP4の中間にやや不明瞭な被熱面が検出されている。

堆積状況：3層に分層した。最下層は炭化物粒子が認められることから分層したが、1・2層の差異は微妙で単一と考えても差し支えないものと思われるが、混入物の黄褐色粒子の量で分層した。覆土のしまりが大変強く、地山との区別はつきにくかった。**遺物出土状況**：ほぼ全域の覆土中から、少量の破片が出土している。

時期：縄文時代前期前葉

34号竪穴住居跡（SB34）（第30図、PL6） 位置：4区、Ⅶ-D-06,07,11,12グリッド

形状：隅丸円形 **規模**：510×495cm、深さ46cm、床面積17.56㎡ **主軸方位**：不明

調査の経緯：基本土層の5層上面で、5層に比べ色調が暗かったことから平面プランを確認した。遺構中央には下水管が埋設されていたため、下水管を撤去した部分をトレンチとして断面観察し掘下げた。壁は色調の違いで判断し、床面は覆土より硬化しているため検出した。**遺構の重複**：なし

住居内施設：床面は全体に硬化しているが、貼床は認められない。壁は垂直気味に立ち上がる。周溝は北壁、P2の南西、P4の南、北東の壁寄り、部分的に検出された。床面は5層中に構築されている。柱穴は5基確認され、深さはP1が45cm、P2が41cm、P3が28cm、P4が42cm、P5が13cmを測る。主柱穴と考えられるのは位置と形状からP1・P2・P3が考えられる。4本柱と考えれば北東部に柱穴が存在するものと思われるが、掘り込みは認められなかった。ただし、柱の想定される位置には、床面から若干浮いた状態で礫が出土している。P1とP4からは、南西側の壁に向かって間仕切りと考えられる溝が検出された。深さは前者が最大1cm、後者は最大8cmを測る。炉跡と考えられる被熱面や掘り込みは検出できなかったが、P3の北東約50cmの個所で床面上に焼土粒子が微量認められた。さらに北東にカクランがあることから消滅した可能性も考えられるが、詳細は不明である。

堆積状況：2層に分層されたが、違いはわずかである。**遺物出土状況**：全域から土器片が出土しているが極少量である。

時期：縄文時代前期前葉

35号竪穴住居跡（SB35）（第30図、PL6） 位置：5区、Ⅶ-D-13

形状：円形（大半が調査区外のため推定） **規模**：不明、深さ43cm（残存部）、床面積（1.43㎡） **主軸方位**：不明

調査の経緯：32号竪穴住居跡調査中に32号の北壁が認められないことから、再度平面を精査し、32号に切られている本跡を確認した。基本土層の5層中に構築されているが、本跡覆土の色調が暗かったため、平面が円形と思われるプランを確認した。覆土はひじょうにしまりがあり、床面の硬化と区別が難しかったが、色調が地山の方が明るいことから判断した。**遺構の重複**：32号竪穴住居跡に切られている。

住居内施設：床面は5層中に構築されている。床面は全体に硬化しているが、貼床は認められない。壁はやや垂直気味に立ち上がる。周溝は壁に沿って断続的に認められる。調査区内で確認できた柱穴は1基のみで、深さは48cmを測る。炉跡は不明である。

堆積状況：覆土は、しまりの強いにぶい黄褐色土の単層であった。**遺物出土状況**：全域から小片が少量出土している。

時期：縄文時代前期前葉

38号竪穴住居跡（SB38）（第31図） 位置：3区、I-O-13グリッド

形状:西・南・東の3方向を他遺構とカクランにより壊されており不明 **規模:**不明、深さ12cm(残存部)、床面積(1.59㎡) **主軸方位:**不明

調査の経緯:重複する6号、13号竪穴住居跡の調査中にそれぞれの壁面で確認された。基本土層の5層中に構築されており、黒褐色の覆土との色調の差で平面を検出した。検出当初は、四方を遺構やカクランに切られた古代前期前葉の竪穴住居跡と判断したが、床面上から出土した土器(第65図1、PL17)と北側に残る壁面から縄文時代前期前葉の竪穴住居跡と判断した。**遺構の重複:**6号・13号竪穴住居跡に切られている。**住居内施設:**柱穴、周溝、炉跡は検出されていない。床面の硬化は弱く、貼床は認められない。壁は垂直気味に立ち上がる。

堆積状況:覆土は黒褐色土の単層である。**遺物出土状況:**北壁際にややまとまって土器が出土している。

時期:縄文時代前期前葉

(2) 土坑(SK)

34号土坑(SK34)(第39図、PL9) **位置:**3区、I-O-13グリッド

形状:不整形円形 **規模:**149×130cm、深さ12cm(残存部)、床面積(1.59㎡) **主軸方位:**不明。調査の経緯:5層上面で検出。30号竪穴住居跡検出中に確認した。覆土が黒褐色土であるため平面プランの検出は容易であった。遺構の重複はなく、底面は平坦である。壁面は底部では垂直に近いが、中位からは緩やかな傾斜で立ち上がっている。

堆積状況:5層に分層された。レンズ状の堆積をしめす。最下層は黄褐色土を多く含み、上位4層は土壌がやや砂質である。最下層は一気に埋没し、その後自然に埋没した可能性が考えられる。**遺物出土状況:**黒曜石の石鏃(第69図10、PL21)が覆土中層から出土している。覆土から木鳥式の小破片が出土している。**時期:**縄文時代前期前葉

3 縄文時代中期の遺構

(1) 竪穴住居跡(SB)

1号竪穴住居跡(SB01)(第7図、PL1) **位置:**1区、II-W-13グリッド

形状:円形(西壁の一部はカクラン、東壁の一部は調査区外のため推定) **規模:**(330×326残存長)cm、深さ8cm、床面積8.01㎡ **主軸方位:**N37°E

調査の経緯:5層上面で、5層より色調の暗い平面プランを確認した。検出時には炉の礎が露出していたことから、床面に近いことが予想された。床面の状況は南西部で本跡を壊しているカクランの断面で確認できたことから、断面の情報を目安に掘り進んだ。**遺構の重複:**なし

住居内施設:床面はほぼ平坦で、炉跡周辺の一部で硬化が確認できた。ただし、面としてとらえられるほど連続しておらず、炉跡から離れるほど軟弱であった。壁は垂直気味に立ち上がり、周溝は検出されなかった。柱穴は主柱穴と考えられる4基が確認され、深さはP1が18cm、P2は40cm、P3は27cm、P4は25cmを測る。炉跡は床面の中央部に設けられ、楕円形を呈する石囲炉で深さは18cmを測った。火床部に部分的な被熱が認められたが、硬化は認められなかった。

堆積状況:黒褐色土の単層である。**遺物出土状況:**遺物は小片2点のみである。

時期:住居・炉の形態から縄文時代中期と見られる。

14号竪穴住居跡(SB14)(第16図、PL3) **位置:**3区、I-O-12,13,17,18グリッド

形状:不整形円形(南・西が調査区外のため推定) **規模:**(390×337残存長)cm、深さ12cm、床面積(残存で9.246㎡) **主軸方位:**N41°E

調査の経緯：5層で検出した。5層と住居覆土が類似しており、平面では検出できなかったため、トレンチにより床面と壁を確認し、プランを確定した。南東部と南西部は調査区外で全貌は不明であるが、残存部から不整な円形と考えられる。遺構検出中にすでに炉跡が露出していた。壁と床面の検出はカクランが多く判断しづらかった。**遺構の重複：**SB27に切られている。

住居内施設：床面はほぼ平坦で、基本土層の4層を床面としているが、貼床は認められない。壁は緩やかに立ち上がり、周溝は認められない。主柱穴と考えられる柱穴が4基確認された。P1～P3は壁際で、P4はやや炉跡寄りで検出された。深さはP1が43cm、P2が39cm、P3が33cm、P4が44cmを測る。炉跡は床面中央部のやや北東に設けられている。平面形は楕円形の石囲炉である。炉底面は床面から20～25cmの深さで、内面は被熱による硬化が認められた。

堆積状況：2層に分層された。下層にはローム・ブロックを多量に混入し、埋め戻された可能性もある。**遺物出土状況：**遺物の出土量は少なく、覆土中から破片が出土している。

時期：縄文時代中期後葉

第3節 弥生時代の遺構

1 概要

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡5軒、溝2条が検出された。竪穴住居跡の分布は、3区・II-KグリッドのSB37以外、東側の4区・5区に位置している。ここでは、縄文時代前期の竪穴住居跡と重複するように、丘陵状の高まりに集中する傾向がうかがえる。周溝墓は4区にある。居住域と墓域が重なることから、住居跡と墓跡には時間差があるものと考えられる。

遺構はすべて後期に属し、中でも後期中葉の短期間に集中する。ただし、出土土器の様相から2時期に分けること可能である。

2 弥生時代後期の遺構

(1) 竪穴住居跡 (SB)

29号竪穴住居跡 (SB29) (第26図、PL5) **位置：**4区、II-W-25,X-21、VII-C-05、D-01グリッド
形状：隅丸方形 (遺構が調査区外へ延びるため推定)。南東壁にかかる自然礫は、地表に現れているだけで120×75cmを超える。南東壁が外に張出すように膨らんでいるのは、巨礫を去除こうとした結果ではないかも推定できる。ただし、本跡が巨礫を竪穴内に取込んで上屋を建てたか、埋め戻して壁外としたかは不明である。**規模：**(615×222残存長) cm、深さ28(残存部) cm **主軸方位：**N50° W

調査の経緯：4区の調査区北壁際で、5層上面を掘り込む黒褐色土の落ち込みとして平面プランを確認した。しかし、竪穴住居跡内に大きな自然礫を取込んで構築されていたため、検出当初は竪穴住居跡と土坑の重複ととらえ調査にあたった。断面観察と巨礫周辺の調査から、重複ではなく1軒の竪穴住居跡であることが判明した。**遺構の重複：**SK37に切られる。

住居内施設：床面は5層中に構築されている。貼床は認められないが、炉跡の南東部で若干の硬化面が確認できた。壁はやや緩やかに立ち上がる。周溝は認められなかった。柱穴は2基確認され、深さはP1が40cm、P2は29cmを測る。位置と規模から主柱穴と考えられる。炉跡は西壁寄りに検出されたが、

SK37 との重複により西側を破壊されている。火床の周囲には円礫が配されており、比熱面は硬化し、最深部で8cmの深さを測る。覆土中に焼土は含まれず、住居跡の覆土が堆積していた。

堆積状況：黒褐色土を2層に分層できたが、差異はなくほとんどなかった。**遺物出土状況**：少量の破片が覆土中から出土している。

時期：弥生時代後期

32号竪穴住居跡（SB32）（第28図、PL5） **位置**：5区、Ⅶ-D-12,13,18 グリッド

形状：隅丸方形（西壁の一部はカクランにより破壊され、北東側は調査区外のため推定） **規模**：6.15 × (5.60 残存長) cm、深さ15cm **主軸方位**：N50° W

調査の経緯：傾斜する地山面で検出したため、西側が5層、東側は4a層を切り込んでいた。西側の検出は、覆土が黒褐色のため5層との差が明瞭で検出は容易であったが、東側は4a層と覆土の差がほとんどないため床面の広がりや若干の土のしまりの違いからプランを確定した。**遺構の重複**：SB35を切る。

住居内施設：床は西側では5層中、東側は4a層中に構築されていた。床面の硬化は西側では顕著であった。東側では部分的な硬化は認められたが全体的に不明瞭であった。壁は緩やかに立ち上がる。周溝は確認されなかった。柱穴7基確認され、深さはP1が39cm、P2は31cm、P3は36cm、P4は13cm、P5は13cm、P6は23cm、P7は19cmを測る。主柱穴はP2・P3・P5の3基が確認できた。本来は4本柱と考えられるが、カクランにより1基は不明である。炉跡は住居跡の北西壁寄りに確認された。炉跡中央部には礫が4個配され、礫を境に北西側の底面は被熱により硬化した火床が確認できた。南東側では被熱は認められなかった。

堆積状況：黒褐色土を3層に分層した。覆土中には多量の土器片が混入する。**遺物出土状況**：ほぼ全域から土器片が多数出土している。床直遺物が少ないことから、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

時期：弥生時代後期

33号竪穴住居跡（SB33）（第29図、PL5） **位置**：5区、Ⅶ-D-19,24 グリッド

形状：隅丸方形（北東側が調査区外のため推定） **規模**：453 × (270 残存長) cm、深さ28cm、床面積(9.36) m² **主軸方位**：N-31° -E

調査の経緯：調査区北西壁際の基本土層5層上面で検出された。覆土と5層は色調や硬度の点でほとんど差異がないため、トレンチにより床面・壁面を検出し平面プランを確定した。壁は覆土との硬度の違いにより判断した。**遺構の重複**：SK35に切られる。

住居内施設：床面は炉の周囲で部分的な硬化が認められた。全体的には硬化というより、覆土に比べ多少しまりがある程度であった。特に壁近くは軟弱であった。壁はやや垂直気味に立ち上がる。周溝は確認されなかった。柱穴は1基確認され、深さは17cmを測る。炉跡は南壁寄りに検出された。礫が火床を取り囲むように配された石囲炉で、南側の礫は台石状の平らな礫が水平に置かれていた。火床には藁が内面を上にして置かれている。藁の下位の炉跡覆土には焼土がみられないことから、置かれた藁の上位を燃焼部として使用していた可能性が考えられる。

堆積状況：黒褐色土の単層である。**遺物出土状況**：ほぼ全域から破片が出土している。（第63図1・2・4、PL17）は炉内、3は炉跡周辺から出土している。

時期：弥生時代後期

36号竪穴住居跡（SB36）（第31図、PL6） **位置**：6区、I-I-20、J-16 グリッド

形状：隅丸方形（南側が調査区外のため推定） **規模**：不明、深さ、10（残存部）cm **主軸方位**：不明

調査の経緯：調査区南壁際の4a層上面で検出した。覆土と4a層は色調や硬度の点でほとんど差異がな

いため、トレンチにより床面・壁を検出し、平面プランを確定した。遺構の重複：なし

住居内施設：床面の硬化は認められず、覆土よりしまりのある面を床面ととらえ調査にあたった。壁は緩やかに立ち上がる。柱穴・周溝・炉跡は認められなかった。

堆積状況：黒褐色土の単層である。**遺物出土状況：**小破片が少量出土している。

時期：弥生時代後期

37号竪穴住居跡 (SB37) (第31図、PL6) 位置：3区、II-K-14.15.19.20 グリッド

形状：不明 規模：不明 主軸方位：不明

調査の経緯：5層上面で検出作業中に、焼土とこれに伴う礫が確認されたため炉跡の可能性を想定し、周囲を精査したところ約450×300cmの硬化面を検出した。遺構の重複：なし

住居内施設：床の硬化は明瞭であったが、貼床は認められなかった。壁は検出時に削平してしまったものと思われる、柱穴・周溝も確認できなかった。炉跡は、掘り込みが浅く、50×40cmの焼土の広がりがある程度であった。細長い礫が2個「L」字状に配された形で検出された。

堆積状況：住居の覆土は残存していない。**遺物出土状況：**硬化面のみの検出ではあったが、図化可能な4個体分の破片が床面上から出土した。(第64図4、PL17)はほとんどが南東の壁寄りから小破片の状態でもとまって出土している。

時期：弥生時代後期

(2) 溝跡 (SD)

4号溝跡 (SD04) (第34図、PL7)

位置：4区、VII-C-05、D-01.06に位置する。

形状：今回の調査では「コ」の字状の部分の検出となったが、調査区外に溝が延びるため全貌は不明である。おそらく方形を呈するものと考えられる。溝のコーナーは北東部と北西部で検出されている。陸橋部は北東部では見られず、北西部はカクランのため不明である。主体部は検出されていない。**規模：**東西方向の溝は全長13.95m、幅234～100cm、深さ22～13cm、南北方向は調査区内で約6.6m、幅170～90cm、深さ38～7cmである。**主軸方位：**東西方向はN-18°-Eで、南北はこれにほぼ直交する。

調査の経緯：当初はSB34を切る「L」字状の溝跡として掘下げた。その後、SB28付近のカクラン南側にも溝跡が検出された。平面形が「L」字の溝跡と断面形状や幅に類似点が認められたため、方形周溝墓の可能性を視野に入れた。その結果、カクラン南側のSB30土層観察ベルトで本跡の断面が検出され、調査区内では「コ」字状を呈していることが判明した。南半部分が調査区外のため断定はできないが、出土遺物の時期や、溝の形状から方形周溝墓と考えられる。

堆積状況：しまりのある黒色土と、しまりのない黒色土の2層からなり、自然埋没の様相を呈している。**遺物出土状況：**弥生時代後期の壺(1)と甕(2)が出土している。いずれも北東コーナー付近で、2層中からとまって検出された。壺は上部と下部が割れた状態、甕は破片の状態で出土している。

時期：弥生時代後期。

5号溝跡 (SD05) (第35図、PL8)

位置：4区、VII-D-12に位置する。

形状：直線的に伸びている。底面にはやや凹凸があり平坦ではない。溝の北側の調査区壁寄りと南側では中央部よりやや深さがある。中央部はほとんど削平してしまい掘込みは約1cmを残すのみである。**規模：**長さ6.70m、幅160～135cm、深さ最深部で13cmを測る。**主軸方位：**S28°W

調査の経緯：4層中から掘り込んでいた可能性が考えられるが、覆土と4層に差はなく、5層上面までや

や削平してプランを検出した。遺構の重複：なし

堆積状況：しまりのない黒色土で、自然埋没の様相を呈している。**遺物出土状況：**弥生時代後期の壺（第67図1、PL19）と甕（2～4）が、溝の底面から出土した。壺（1）は横に倒れた潰れた状態で出土している。甕（2～4）も同様な状況であったと考えられるが、上部が削平されているため詳細は不明である。

時期：弥生時代後期

第4節 古墳時代～平安時代の遺構

1 概要

奈良時代から平安時代前半の遺構がなく、時代的な連続性はない。しかし、遺物がなく時期を帰属できない掘立柱建物跡や土坑が存在するため、第3節にまとめて報告する。時期が特定できたものは、古墳時代後期の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟、土坑2基。平安時代の竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡1棟、土坑21基である。時期不明な遺構は、便宜的に平安時代の項に含めて報告する。

遺構の分布状況を見ると、古墳時代後期の竪穴住居跡は、主に調査区東側の3区と2区で検出され、特に3区の北に突出した取り付け道路部分と2区に偏る。掘立柱建物跡では、古墳時代後期の遺物を出土したSTO2が2区東側で検出されている。時期は6世紀後半～7世紀代に比定される。

一方、平安時代の竪穴住居跡は調査区の西側、2・3区に集中して分布している。時期は9世紀半ば～10世紀初頭が主体を占めている。

2 古墳時代後期の遺構

(1) 竪穴住居跡（SB）

5号竪穴住居跡（SB05）（第11図、PL1） 位置：3区、II-G-16.21 グリッド

形状：方形もしくは長方形（南東部は調査区外のため推定） **規模：**710 × (225 残存長) cm、深さ32cm、床面積（12.17）㎡。 **主軸方位：**不明

調査の経緯：4層で検出された。4層に対して、色調がやや暗く、混入する小礫が多い点で平面プランを確定した。南北方向にトレンチを設定し床面を確認してから掘下げを開始した。床面の状況が南西側と北東側で異なることが確認されたため、当初は遺構の重複と考えた。しかし、土層や床面レベルに差が認められないことから1軒の竪穴住居跡と判断した。**遺構の重複：**なし

住居内施設：床面は4層中にあり、堅牢ではないが貼床が認められた。北東側では浅い掘方が認められたが、南西部は地山を床面としており掘方は認められなかった。こうした状況から、堀方をもつ部分が古い住居範囲で、地山を床面とした部分は拡張によって広げられた可能性が考えられる。壁はやや傾斜を持ち、周溝は認められない。柱穴は壁寄りに4基確認された。深さは、P1が12cm、P2が12cm、P3が12cm、P4が14cmを測る。いずれも壁柱穴と考えられる。カマドは認められなかったが、調査区外に存在すると思われる。

堆積状況：主体は黒褐色土の堆積で3層に分層された。下層に黄褐色土粒子を混ぜる土壌が堆積しているが、各層の堆積がレンズ状ではなくほぼ平坦に堆積している。**遺物出土状況：**（第44図1・2、PL10）がP4付近の床面上から完形で出土したが、それ以外は全域から少量破片で出土している。

時期：古墳時代後期

9号竪穴住居跡 (SB09) (第14図、PL2) 位置：3区、II-K-04.05 グリッド

形状：方形 (西側が調査区外のため推定) 規模：420×(130残存長) cm、深さ26cm、床面積(4.69) m²
主軸方位：N46° E

調査の経緯：3区取り付け道路部分で、基本土層の4層で検出した。ただし、検出では住居跡覆土と4層の差異がないため、トレンチにより床面と壁を確認し、プランを確定した。遺構の重複：なし

住居内施設：床面は4層を利用しており、貼床・硬化面は認められない。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。柱穴・周溝は検出されなかった。カマドは、調査区外に存在するものと思われる。

堆積状況：主体は黒褐色土の堆積で3層に分層された。下層に黄褐色土粒子を混ぜる土壌が堆積しているが、各層の堆積がレンズ状ではなくほぼ平坦に堆積している。遺物出土状況：全域から破片が少量出土している。(第47図2)は混入品と考えられる。

時期：古墳時代後期

10号竪穴住居跡 (SB10) (第14図、PL2) 位置：3区、II-K-16 グリッド

形状：北壁がやや張り出す方形 (東側が調査区外のため推定) 規模：420×(200残存長) cm、深さ41cm、床面積(6.89) m²、主軸方位：N38° E

調査の経緯：基本土層の4層上面で検出した。覆土との違いが分かりづらいためトレンチにより床と壁を検出し平面プランを確定した。遺構の重複：なし

住居内施設：床面は4層を利用しており、貼床は認められず硬化面も不明瞭であった。壁はやや傾斜して立ち上がり、柱穴・周溝は認められなかった。カマドは調査区外に存在するものと考えられる。

堆積状況：主体は黒褐色土の堆積で3層に分層された。下層に黄褐色土粒子を混ぜる土壌が堆積しているが、各層の堆積がレンズ状ではなくほぼ平坦に堆積している。遺物出土状況：全域から破片が少量出土している。

時期：古墳時代後期

19号竪穴住居跡 (SB19) (第19.20図、PL3) 位置：2区、II-Q-12.13.17.18 グリッド

形状：方形 (南側が調査区外のため推定) 規模：734×(6.86残存長) cm、深さ33cm、床面積(40.85) m²、主軸方位：N30° E

調査の経緯：4層上面で検出した。検出当初はSB16との切り合いがつかめず、トレンチでSB16と本跡の壁面・床面を確認し、平面プランを確定した。SB20との切り合いでは、SB20の覆土に廃棄されていた多量の自然礫が本跡で見られないこと、SB20の床面がSB19におよばないことから、本跡がSB20を切っていると判断した。遺構の重複：SB16に切られ、SB20を切る。

住居内施設：5a層に構築された床面には、貼床は認められなかった。床面の硬化は中央部分とカマド周辺で顕著であったが、壁際は軟弱であった。壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。周溝は東壁に際で検出された。長さは98cmを測る。主柱穴と考えられる柱穴はP2・P3・P7の3基確認された。深さは、P2が45cm、P3が深さ26cm、P7が33cmを測る。4本の主柱穴とすれば床面西側が該当するが、遺構外の可能性がある。また、掘方調査中にP1・P6・P8・P10・P11が検出された。深さはP1が42cm、P2は45cm、P3は26cm、P4は16cm、P5は17cm、P6は12cm、P7は33cm、P8は14cm、P9は10cm、P10は14cm、P11は25cm、P12は5cm、P13は8cm、P14は9cmを測る。この他、貯蔵穴と考えられるP4・P5が北東コーナーで検出された。P4はP5の内側に設けられており段堀り状を呈している。また、間仕切りと考えられる掘り込みP13・P14が2基確認されている。カマドは、北壁の中央部に構築されている。残存状況は悪く、火床と考えられる被熱部は認められたが、赤

化した層は薄く、軟弱であった。住居跡の床面上に、おびたしい焼土や構築材に使われたと考えられる粘土がブロック・粒子状に散在していた。また、北壁の中央部には袖部を設けるために掘り残したと考えられる地山の突出部が検出されている。このことから、カマドは粘土により築かれ、住居廃絶時に破壊されたものと考えられる。

堆積状況: φ 10cm 前後の礫を比較的多く混入する黒色土である。**遺物出土状況:** カマドを主体として、東側のコーナーで多量に土器が出土している。

時期: 平安時代

20号竪穴住居跡 (SB20) (第21図、PL4) 位置: 2区、II-Q-18 グリッド

形状: 方形? (南西部が調査区外、重複もあり推定) **規模:** (300 × 210 残存長) cm、深さ 24cm、床面積 (4.50) m²、**主軸方位:** 不明

調査の経緯: 4a層でSB19と切り合って検出された。平面での覆土の違いに差がないため、トレンチにより覆土の断面を視察した。断面検査の結果、本跡の覆土にはφ 10～20cm大の自然礫が散在し、SB19には自然礫がほとんど含まれていなかった。後者の平面プランが明瞭なことから、SB19に切られているものと判断した。**遺構の重複:** 北東部でSB19に切られる。

住居内施設: 床面は4a層を利用し、貼床は認められていない。壁はやや傾斜しながら立ち上がる。柱穴、周溝は検出されていない。カマドは、SB19によって壊されたか、調査区外の可能性があり、不明である。

堆積状況: 黒褐色土の単層で、覆土中に自然礫を多量に混入する。**遺物出土状況:** 少量の破片が覆土から出土している。

時期: 古墳時代後期

22号竪穴住居跡 (SB22) (第22図、PL4) 位置: 3区、II-K-06 グリッド

形状: 不明 **規模:** 不明、深さ 26cm、床面積は不明、**主軸方位:** 不明

調査の経緯: カクランの壁面に焼土を確認したため周辺を精査したが、カクランと試掘時のトレンチにより、カマド部分以外は破壊されていた。そのため、詳細は不明である。**遺構の重複:** なし

住居内施設: カマド本体の火床部のみ確認した。袖、焚口などは不明。

堆積状況: 黒褐色土、単層であった。**遺物出土状況:** カマドから少量の破片が出土している。

時期: 古墳時代後期

(2) 掘立柱建物跡 (ST)

2号掘立柱建物跡 (ST02) (第41図、PL7)

位置: 3区、II-K-20,25、L-16,21に位置する。

形状: 側柱建物 **規模:** 4間×3間、770 × 460cm、柱間面積は 35.42 m²。**長軸方位:** N52° E

調査の経緯: 4層上面で等間隔に並ぶ柱穴検出し、掘立柱建物跡と認定した。平面で柱の痕跡が認められなかったため、平面プランの中心を通るように半葺 (4間の柱穴は4葺) した。**遺構の重複:** 本跡の柱穴 P3とP5が、ST03のP6とP8を切る。

建物内施設: 柱間内に硬化面や焼土跡などは見つかっていない。柱は、ほぼ直線に並び、柱間は北西・南東の梁列と北東の梁列では柱間はほぼ等間隔であるが、南西の桁列では間隔がやや不揃いで、P7とP6の間隔が広い。各柱穴の平面形状は円形で、断面は底面が平

ビット	P1	P2	P3	P4
長×短×深 cm	72 × 70 × 40	68 × 64 × 48	82 × 76 × 48	76 × 66 × 54
	P5	P6	P7	P8
	76 × 70 × 39	60 × 50 × 44	74 × 64 × 52	60 × (60) × 38
	P9	P10	P11	P12
	62 × (56 × 43)	(70) × 60 × 37	74 × 70 × 40	76 × 70 × 48
	P13	P14		
	60 × 56 × 46	74 × 70 × 48		

第2表 2号掘立柱建物跡柱穴一覧表

坦な円筒状である。柱痕が土層で確認できたのはP1とP4である。柱の痕跡が検出できたのはP1とP4で、他の柱穴では柱の痕跡は認められなかった。P6・7・13の底面では小穴が穿たれていることから、柱の埋設に係わる可能性が考えられる。

遺物出土状況：P13から土師器の坏（第67図）の破片が出土している。

時期：出土した土師器から古墳時代後期の可能性が考えられる。

3号掘立柱建物跡（第40図、PL7.8）

位置：3区、II-K-21.25、L-21.25に位置する。

形状：総柱建物 規模：3間×2間で、456×400cm、柱間面積は18.24㎡。長軸方位：N46° W

調査の経緯：4層上面で検出したが、調査では掘立柱建物跡とは認識していなかった。調査終了後の室内整理作業の図面上で、柱穴が並ぶことから総柱の掘立柱建物跡とした。**遺構の重複**：本跡の柱穴P6とP8がSTO2に切られる。

建物内施設：P1～P4・P9～P12の柱穴はほぼ直線に並ぶが、P5～P8はやや不揃いでP6が西方向にずれている。柱の痕跡が土層で検出されたのはP3とP7・P8で、P1・2・5・6は柱の抜き取り痕と考えられる土層の堆積をみせる。P9～P12については掘り込みが他の柱穴に比べて20cm以下と浅く柱の痕跡はみられない。

遺物出土状況：遺物の出土はない。

時期：STO2との切りあい関係と覆土の状況からSTO2より古い古墳時代後期

ピット	P1	P2	P3	P4
長×短×深 cm	60×55×27	70×60×31	50×50×40	(65)×70×30
	P5	P6	P7	P8
	65×60×19	76×70×39	74×68×41	76×66×54
	P9	P10	P11	P12
	72×76×12	62×58×20	77×76×18	88×(75)×10

第3表 3号掘立柱建物跡柱穴一覧表

(3) 土坑 (SK)

32号土坑 (SK32) (第38図、PL9) **位置**：2区、II-K-14に位置する。

形状：楕円形。規模：70×60cm、深さ35cm。**調査の経緯**：4層上面で検出した。堆積状況：3層に分層されたが、全層にロームブロックの混入がみられることから、埋め戻された可能性がある。**遺物出土状況**：甕（第66図1、PL20）がほぼ完形で出土している。**時期**：古墳時代後期

33号土坑 (SK33) (第38図、PL9) **位置**：1区、II-W-01に位置する。

形状：隅丸長方形。規模：120×66cm、深さ22cmを測る。主軸方位：N-38° -W。構造：土坑主軸の側面には長さ40～20cm、幅25～10cmの自然礫が配され、その間には同様な礫が平置きされていた。**調査の経緯**：5層上面で検出した。堆積状況ほか：黒色土が単層である。**遺物出土状況**：剣形の石製模造品（第83図103、PL22）が1点と、刀子（第83図1、PL20）1点が覆土から出土している。**時期**：古墳時代。**所見**：形状、礫の配置、出土遺物などから埋葬に係わる可能性がある。

3 平安時代の遺構

(1) 竪穴住居跡 (SB)

2号竪穴住居跡 (SB02) (第8図、PL1) **位置**：3区、I-O-08.09.13.14 グリッド

形状：方形 規模：448×410cm、深さ17cm、床面積：13.929㎡ 主軸方位：N44° E

調査の経緯：4a層上面の検出時に、カマドの焼土や袖石が露出し住居跡と判断した。他の3辺の壁は4a層と差がなく不明確であったため、トレンチにより床面上に薄い炭化物粒子の広がりを検出し、床・壁を確定した。SB07と重複する。本跡の床面上に広がる炭化物粒子が、SB07の推定範囲まで広がっていることを確認し、本跡がSB07を切っていると判断した。**遺構の重複**：SB07と重複する。

住居跡内施設: 4a層中を床面としている。床面の硬化は弱く明瞭ではない。カマド焚口付近から住居跡中央にかけて焼土・粘土粒子・炭化物粒子が水平に堆積していたことから、床面と判断した。また、カマド周辺で明瞭であった床面は中央付近では断片的であった。貼床は認められなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴、周溝などは検出されなかった。カマドは、北東壁のほぼ中央に構築され、煙道部は壁外を掘り込んで作られている。構築材の崩落は著しく、礫の被熱の状況から火床部・袖石を判断したが天井等については不明である。

堆積状況: 床面直上以外は、礫を多量に混入する暗褐色土が堆積していた。**遺物出土状況:** 全域から破片が出土している。

時期: 平安時代

4号竪穴住居跡 (SB04) (第10図、PL1) 位置: 3区、II-K-01.06 グリッド

形状: 隅丸方形 (北東コーナーの一部は調査区外) **規模:** 336 × 310cm、深さ 12cm、床面積 9.17 m²

主軸方位: N22° W

調査の経緯: 4層で確認した。検出時にカマドの構築材と考えられる礫が出土したこと、覆土が基本土層より暗い色調を示すことからプランを確定した。**遺構の重複:** なし。

住居内施設: 4層中に構築された床面は、硬化面は認められないものの、中央部に2~4cmの貼床が確認できた。壁は外傾しながら立ち上がる。4基の柱穴が四隅寄りで確認された。深さはP1・P2が22cm、P3が20cm、P4が24cmを測る。カマドは、北壁中央に位置し、燃燒部の左右には袖の芯材に使用されたとみられる礫が、焚き口の上部には天井に用いられたと考えられる礫が残存していた。袖部・天井部を覆っていたと考えられる粘質土や土壌などは認められない。火床の被熱は焚き口付近で顕著に認められたが、奥壁側では不明瞭であった。煙道は調査区外におよんでいるため不明である。カマド以外の付属施設は存在していない。

堆積状況: 床面直上の覆土に多数の礫が認められたことから住居跡廃絶時に廃棄された可能性が考えられる。**遺物出土状況:** カマドを主体にほぼ全域から破片が出土している。

時期: 平安時代

6号竪穴住居跡 (SB06) (第12図、PL2) 位置: 3区、I-O-13 グリッド

形状: 隅丸方形 **規模:** 338 × 336cm 深さ 32cm、床面積 9.372 m² **主軸方位:** N34° E

調査の経緯: 4層を掘り込んでいる。検出時にカマド上部の構築材である礫が検出されたことから、住居跡を確認した。覆土と地山の差がなく平面プランがつかめなかったため、トレンチにより壁・床を検出し隅丸方形のプランを検出した。床面は5層上面の黄褐色土を掘り込んで構築されているため明瞭であったが、壁面の上半部は4層の黒褐色土のため確定しづらかったが、硬さの違いでほぼ直角に立ち上がる壁面を判断した。**遺構の重複:** SB38.13を切る。

住居跡内施設: 床面は5層中に構築され、硬化した貼床が中央部付近で確認できた。周辺部 (壁際) は軟質であった。壁は検出面では地山と覆土の違いが少なく不明瞭であったが、床面近くで壁のたちあがりを確認することができた。柱穴は認められない。カマドは、北東壁中央に構築されている。天井部は崩落していたが、袖石はほぼ原位置を留めているものと考えられる。火床の残りは良い。火床の中央奥壁寄りには支脚石が残存していた。その上には裏の底部片が逆位で被せたような状態で検出された。カマド内には土師器の裏の破片が多量に出土した。カマド以外の付属施設は存在していない。

堆積状況: 覆土は2層に分層したが、ほとんど差異のないぶい黄褐色土である。**遺物出土状況:** カマドから多量に出土しているが、ほかは全域から破片が出土している。

時期: 平安時代

7号竪穴住居跡 (SB07) (第13図, PL2) 位置: 3区、I-O-08,09 グリッド

形状: 北西壁がやや張りだす不整の隅丸方形 規模: 458 × 454cm、深さ 20cm、床面積 18.82 m² 主軸方位: N39° E

調査の経緯: 4a層で検出された。基本土層に比べ覆土の色調がやや暗い。トレンチで壁の立ち上がりを確認し、プランを決定した。遺構の重複: SB02に切られ、SB08を切る。

住居内施設: 床面は砂礫層(4a層)に構築されていることから礫の凹凸が著しく、貼床は認められない。硬化は部分的に認められ、カマド周辺の床面直上には炭化物粒子が薄く堆積していた。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。柱穴、周溝は認められない。カマドは、北東壁のほぼ中央に位置する。残存状況は悪く袖部や天上部は崩落しており、袖部芯材の埋設痕跡が検出された。両袖部の中間には被熱により赤化した火床が認められ、そのほぼ中央には支脚石が残存していた。支脚石の高さは5cmほどで比較的低いものである。

堆積状況: 床面直上以外は、礫を多量に混入する黒褐色土が堆積していた。遺物出土状況: カマド周辺から多量に出土した。(第47図15, PL11)は南西コーナーの床面から出土した。ほかは全域から破片が少量出土している。

時期: 平安時代

8号竪穴住居跡 (SB08) (第13図) 位置: 3区、I-O-09 グリッド

形状: 方形? (削平と重複のため不明) 規模: 415 × (265 残存長) cm、深さ不明。面積 (4.05 m²) 主軸方位: N39° E?

調査の経緯: I-O-08,09 グリッドの遺構検出中に重複する2軒のSB07と08を確認した。SB07のカマドが残されていることや07の北東壁・南東壁が確認できたことから、SB07に切られていると判断した。本跡は確認時にすでに床面やカマドが削られており、掘方と思われる掘り込みとカマドの火床下部が検出されたのみある。遺構の重複: SB02・07に切られる。

住居内施設: 検出時には床面下まで削平されていたため、柱穴・周溝を含め不明である。カマドは、北東壁中央部で火床下部と思われる被熱面が確認したが、検出作業によって消滅してしまった。

堆積状況: 覆土は残存していない。遺物出土状況: 出土遺物はない。

時期: 古墳時代後期～平安時代 (SB02・07より古)

11号竪穴住居跡 (SB11) (第15図, PL2) 位置: 3区、II-K-11,16 グリッド

形状: 方形 (南側は調査区外のため推定) 規模: (242 × 230 残存長) cm、深さ 8cm、床面積 (4.08) m²、主軸方位: N32° W

調査の経緯: 4層で確認された。当初、1軒の住居跡と考え調査にあたったが、トレンチを入れたところ、SB12と重複することがわかったが、重複部分はカクランを受けていたため新旧関係がとらえ難かった。カマド崩落による焼土粒子の散在範囲を追ったところ、SB12がこれを切っていないことがわかり、本跡がSB12を切って構築されたことが判明した。遺構の重複: SB12を切る。

住居内施設: 床面は4層中に構築され、貼床は見られなかった。硬化は全面におよんでいた。壁はやや傾斜しながら立ち上がる。柱穴・周溝は検出されなかった。カマドは崩落が著しく、残存状況は不良である。構築材に用いたと考えられる焼土や粘土が粒子状になって散見されたが、明瞭な硬化面や袖部は検出されなかった。住居廃棄時に人為的に破壊されたものと考えられる。

堆積状況: 黒褐色土の単層である。遺物出土状況: 全域から破片が少量出土している。

時期: 平安時代

12号竪穴住居跡 (SB12) (第15図, PL2) 位置: 3区、II-K-16 グリッド

形状:方形(南側は調査区外、また重複があり推定) **規模:**(206×94 残存長) cm、深さ10cm、床面積(1.56) m²、**主軸方位:**不明

調査の経緯:4層で確認された。当初、1軒の住居跡(SB11)と考え調査にあたったが、トレンチを入れたところ、2軒であることが判明した。**遺構の重複:**SB11に切られる。

住居内施設:4層に構築された床面に貼床は認められなかったが、硬化面は非常にしまりがあった。壁は壁はやや傾斜しながら立ち上がる。柱穴・周溝は検出されていない。住居覆土中にカマド由来の焼土粒子が散見されたが、カマドは検出されていない。

堆積状況:黒褐色土の単層である。**遺物出土状況:**全域から破片が数点出土している。

時期:平安時代

13号竪穴住居跡(SB13)(第15図、PL2) **位置:**3区、I-O-13.18グリッド

形状:不明(南側は調査区外、重複もあり) **規模:**(240×210 残存長) cm、深さ33cm、床面積(2.91) m²、**主軸方位:**N36° E

調査の経緯:SBO6の東壁に本跡の床面が確認され、また、カマドの構築材と考えられる礫が検出されたことから、SBO6に切られる本跡を確認した。**遺構の重複:**SBO6に切れ、SB38を切っている。

住居内施設:4層に構築された床面に貼床は認められなかったが、カマド焚口前方で床の一部が硬化していた。壁の立ち上がりは不明である。柱穴、周溝は検出されていない。カマドは、袖部と支脚に使われた礫が原位置を保っていたが、天井石と考えられる礫は崩落していた。また、カマド内部には住居廃絶時に廃棄したと思われる自然礫が多量に認められた。火床の煙道寄りには、後方にやや傾斜した支脚石が残されていた。支脚としては太く幅16cm×13cmを測る。カマド以外の付属施設は見つからない。

堆積状況:黒褐色土の単層であるが、覆土がほとんど残っていないため不明な点が多い。**遺物出土状況:**カマド内で出土した土器は、廃棄された礫の下でまとまっており、一括廃棄されたものと考えられる。

時期:平安時代

15号竪穴住居跡(SB15)(第16図、PL3) **位置:**3区、I-O-07.08.13グリッド

形状:不整の隅丸方形 **規模:**430×358cm、深さ17cm、床面積12.91 m²、**主軸方位:**S57° W

調査の経緯:4a層で検出した。周辺の遺構(SB03.SK03・04)は中世で、本跡検出に際しても中世の遺物が散見されたため、中世の竪穴状遺構を想定して掘り下げた。南壁中央から焼土跡が確認されたことから、南カマドを持つ平安時代の遺構と判断した。4a層に比べ覆土への礫混入が少なく、色調が暗いことから不整の隅丸方形のプランを確認した。SK03.04との重複では、SKの覆土が本跡の覆土よりしまりが無く、色調が暗いことから平面で明確に確認できた。**遺構の重複:**SK03、04に切られる。

住居内施設:4a層との差異が少なく床面は不明瞭である。カマドの火床面や火床周辺に見られる焼土粒子の散在から床面を判断した。貼床は認められない。壁も残存高は少なくゆるやかに立ち上がる。カマドは、南西壁の中央よりやや北寄りに位置する。残存状況は不良で、崩落が著しい。カマド以外の付属施設は見つからなかった。

堆積状況:礫を多量に混入する黒色土が堆積している。人頭大、こぶし大の自然礫は住居跡廃棄時に投げ込まれたものと考えられる。**遺物出土状況:**全域から破片が少量出土している。

時期:平安時代

16号竪穴住居跡(SB16)(第17図、PL3) **位置:**2区、II-Q-12.13グリッド

形状:方形 **規模:**340×330cm、深さ26cm、床面積9.67 m²、**主軸方位:**N50° E

調査の経緯:4層でSB19.20と重複して検出した。当初、SB16とSB19は1軒と考えていたが、検出物を精査したところ、平安時代の土器と古墳時代後期の土器が出土していること、平面プランがやや歪なこ

とから重複と判断した。トレンチで壁と思われる立上りを確認し、プランを確定した。遺構の重複：覆土の色調の違いと、壁の立ち上がりの存在から本跡がSB19を切ると判断した。

住居内施設：床面は5a層中で全面硬化していた。貼床は認められない。壁は垂直気味に立ち上がる。柱穴、周溝は認められない。カマドは、北東コーナーの北壁に築かれているが、遺存状況は悪い。左袖は地山を掘り残して基部とし、芯材と思われる円礫のみが残っていた。上部の構造は崩落のため不明であった。右袖は崩落が著しく不明である。火床部の被熱痕跡は明瞭であったが、支脚は認められない。煙道は北壁外へ7cmほど掘りくぼめていたが、煤などの付着はみられない。

堆積状況：カマド周辺の覆土には、焼土やカマド構築材と考えられる粘土粒子が多量に混入していることから、カマドの廃棄行為が行われた可能性がある。覆土にはφ10cm前後の礫が多量に混入している。**遺物出土状況：**やや南東に偏って出土し、遺物の量も多い。

時期：平安時代

17号竪穴住居跡 (SB17) (第17図、PL3) 位置：2区、II-Q-19.20.24.25グリッド

形状：方形 **規模：**427×378cm、深さ28cm、床面積14.21㎡、**主軸方位：**N28°W

調査の経緯：4a層に構築されていた。4a層に比べしまりがなく礫が多量に混入していたことで平面プランを確定した。**遺構の重複：**なし

住居内施設：4a層に構築されており、人為的な硬化面や貼床も認められない。壁は明確であるが、壁面には若干の凹凸が認められる。壁面を形成する段階で地山中の礫を抜き取る、あるいは残した結果の凹凸と考えられる。柱穴、周溝は認められない。カマドは、北壁のやや西寄り中央に設けられていた。残存率は悪く、火床を想定できる位置に焼土がみられるが、火床面としては軟弱であり硬化は見られない。焼土周辺に袖石に使われたと見られる礫が出土しているが、原位置をとどめていない。壁外の煙道は検出されなかった。また、カマド以外の付属施設はみられない。

堆積状況：人頭大やこぶし大の礫が砂礫とともに多量に混入している。**遺物出土状況：**カマド周辺の火床部主体に少量出土している。

時期：平安時代

18号竪穴住居跡 (SB18) (第18図、PL3) 位置：2区、II-Q-07.08、グリッド

形状：西コーナーの張出す隅丸方形 **規模：**400×328cm、深さ15cm、床面積11.23㎡、**主軸方位：**N65°E

調査の経緯：SB39調査中に中央部からカマドの袖石が検出されたため、本跡が入子状に重複していることが明らかとなった。東壁、南壁と西壁の一部はSB39掘下げ時に削ってしまったため、壁面は消失している。ただし、本跡の床面レベルの方がSB39より深いため、立ち上がり部は検出できた。壁面検出中に、覆土と地山の差異がほとんどなく、西側コーナー外側に張出した形状となったが、他の遺構との重複の可能性はある。**遺構の重複：**SB39を切る。

住居内施設：4層に構築された床面は不明瞭で、貼床は認められない。カマドの焚口手前の床面上に焼土が散在していることから、床面をとらえた。壁はほぼ垂直に立ちあがる。柱穴・周溝は検出されなかった。カマドは石組みと考えられるが崩落が著しく明確ではない。火床は被熱による硬化が認められる。両袖部の先端と考えられる位置に礫が埋設された状態で検出された。その奥壁側には礫を抜き取ったと考えられる痕跡(ビット)が2ヶ所で検出された。礫を芯材として用いて粘土などで構築したものと考えられるが、痕跡をとどめていない。カマド以外の付属施設はみつからなかった

堆積状況：SB39との差異がほとんどない黒褐色土の単層であったため、SB39掘下げ中に覆土のほとんどを失ってしまった。**遺物出土状況：**カマド周辺の東側に偏って多量の破片が出土している。(第53図3・

5・7、PL14)は床面上から出土している。

時期：平安時代

23号竪穴住居跡(SB23)(第22図、PL4) 位置：3区、II-K-14グリッド

形状：不整な方形(東側は一部調査区外になる) 規模：350×387cm、深さ13cm、床面積(11.26)㎡、
主軸方位：N38°W

調査の経緯：4層で検出した。基本土層と覆土に差がなく、検出段階で確認できたカマド礫のある北西壁のみ平面検出した。他の壁についてはトレンチで、壁と床面を検出しプランを確定した。壁の下部は明瞭に確認できたが、検出面では比較的不明瞭であった。遺構の重複：なし

住居内施設：床面は4層中に構築され、若干の硬化が認められた。住居中央部・壁寄りでは硬化は認められず、貼床も認められなかった。壁は緩やかに傾斜している。柱穴・周溝は検出されなかった。カマドの残存状況は悪く、燃焼部と思われる位置に若干の焼土を伴う火床を検出した。住居跡覆土には構築材として使われたと考えられる礫が床面直上で散在していた。また、南コーナー寄りの床面上には焼土粒子が散在していた。カマド以外の付属施設はみつからなかった。

堆積状況：覆土の残存が少なく不明である。床面上にカマドの構築材とみられる礫が散在している。遺物出土状況：ほぼ全域から破片が少量出土している。

時期：平安時代

24号竪穴住居跡(SB24)(第22図) 位置：3区、II-K-08,09,13,14グリッド

形状：方形(南側はカクランにより推定) 規模：384×(260残存長)cm、深さ6cm、床面積(9.53)㎡、
主軸方位：不明

調査の経緯：4層で検出した。覆土と地山の差異がほとんどなく、トレンチにより壁面と床を検出し平面プランを確定した。遺構の重複：なし

住居内施設：4層中に構築された床面には、やや凹凸が認められる。ほぼ全面が硬化しており、貼床は認められない。柱穴、周溝は検出されなかった。残存壁面にカマドは設置されていなかった。南西壁はカクランにより壊されているが、南西壁寄りに焼土が散見されることから、南西壁にカマドがあった可能性がある。

堆積状況：黒褐色土の単層で、床面までの深さが6cmと浅いため、埋没状況は不明である。遺物出土状況：ほぼ全域から破片が少量出土している。

時期：平安時代

25号竪穴住居跡(SB25)(第23図、PL4) 位置：3区、II-K-24、P-04グリッド

形状：方形(南側は調査区外のため推定) 規模：400×(250残存長)cm、深さ28cm、床面積(9.39)㎡、
主軸方位：N38°E

調査の経緯：4層で検出した。検出時にカマドの礫が確認されたことから北東壁にカマドが設置された住居跡と判断した。覆土は地山に比べて色調が暗く、焼土粒子が少量混入することから、プランを確定した。覆土中にはカマドの構築材とみられる粘土ブロックや焼土ブロック、10～30cm大の礫が多量に混在していた。遺構の重複：なし

住居内施設：4層中に構築された床面には、粘質土による貼床がなされ、硬化も認められた。ただし、壁近くでは硬化の度合いは低いものであった。壁はほぼ直角に立ち上がる。柱穴、周溝は認められない。カマドは、天井部・天井石は崩落しているが、袖の礫は一部原位置をとどめていた。袖の構造は礫を芯材として粘土を用いて構築したものと考えられる。火床と考えられる位置に焼土は認められたが、被熱による硬化は認められない。また、支脚は検出されなかった。住居跡覆土内には自然礫とともに被熱した礫が散

見されたことから、住居廃絶時にカマドの破壊が行われたものと思われる。カマド以外の付属施設はみられなかった。

堆積状況：多量の礫と伴に、カマド構築材の粘土粒子や焼土粒子が認められた。**遺物出土状況**：東側に偏って破片が少量出土している。

時期：平安時代

26号竪穴住居跡 (SB26) (第24図、PL4) **位置**：4区、II-W-18,23 グリッド

形状：隅丸方形？(南西側は調査区外、北コーナーはカクランにより不明) **規模**：(122 残存長) × 280cm、深さ 10cm、床面積 (3.01) m² **長軸方位**：N50° E

調査の経緯：4層上面で、色調が暗いことを根拠にプランを確定した。**遺構の重複**：なし

住居内施設：5層に構築された床面は、カマド周辺で若干の硬化が認められた。壁近くでは軟弱であった。貼床は認められない。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。カマドの残存状況は不良で被熱部などは認められなかったが、袖石が左右に2個残存していた。火床と考えられる焼土粒子が袖石の間に少量認められた。カマド以外の付属施設はみつからなかった

堆積状況：単層の暗褐色が認められた。**遺物出土状況**：カマド周辺から破片が少量出土している。

時期：平安時代

27号竪穴住居跡 (SB27) (第24図) **位置**：3区、I-O-12 グリッド

形状：(ほとんどが調査区外のため不明) **規模**：(330 × 74 残存長) cm、深さ 30cm、床面積 (1.17) m²、**主軸方位**：N64° E

調査の経緯：基本土層4層でSB14の検出中に調査区壁際で検出した。地山の色調の差でプランを確定したが、住居跡のほとんどは調査区外におよんでいるため詳細は不明である。検出できたのはカマド部分であったため、カマドを中心に調査を進め、広げる形をとった。**遺構の重複**：SB14を切る。

住居内施設：床面は5層中に構築されている。大半が調査区外のため詳細は不明である。壁は垂直気味に立ち上がる。柱穴・周溝などについても不明である。カマドは、東壁を外側に掘り込んでおり、竪穴部からカマドだけ突出している。カマド部分には多量の礫が残されていたことから、礫を芯材とし粘土で天井・袖部を構築したものと考えられる。礫は被熱しているが、袖部先端の袖石以外は原位置をとどめていない。住居廃絶時に壊されているものと思われる。

堆積状況：カマド付近の検出のため詳細は不明である。**遺物出土状況**：カマドの周辺から破片が少量出土している。

時期：平安時代

39号竪穴住居跡 (SB39) (第32図、PL6) **位置**：2区、II-Q-07,08,12,13 グリッド

形状：隅丸方形 **規模**：552 × 576cm、深さ 17cm 床面積 28.78 m²、**主軸方位**：N54° E

調査の経緯：4層中で検出した。当初、東壁と思われる側にカマドが検出されたため住居跡と考えた。4層と覆土の差はほとんどなかったが、北壁・南壁については、しまり・粘性が地山より劣っていることから判断した。西壁側はトレンチにより壁の立ち上がりを確認した。カマドの崩落が著しく、礫や焼土の広がり床面中央付近まで至った。これらの広がりから火床が2箇所存在することが明らかとなり、本跡にもう1軒の入れ子状の住居跡SB18があることが判明した。SB18・SK32との新旧関係は、SB18が本跡の床面を掘り込み、カマドが設けられていることから、SB18が新しい。SK32は本跡の床面を切っていると判断した。**遺構の重複**：SB18に切れ、SK32を切る。

住居内施設：4層に構築された床面は、カマド手前の焚き口周辺を除き硬化が認められなかった。貼床も認められない。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。周溝は認められない。柱穴は3基確認され、深さはP

1が26cm、P2は21cm、P3は37cmを測る。カマドは、袖部に3個の礫が残っているが、他の礫は原位置をとどめていない。礫を芯材として用いて粘土で築いたものと考えられるが、粘土は破壊され残っていない。カマド以外の付属施設はみつからなかった。

堆積状況:黒褐色土の単層である。**遺物出土状況:**SB18によって中央部を切られているため全貌は不明である。カマド周辺の北東壁寄りの床面上から、ほぼ完形の環・皿を5点(第65図1~5、PL18)出土している
時期:平安時代

(2) 掘立柱建物跡 (ST)

1号掘立柱建物跡(ST01)(第40図、PL7) **位置:**1区、II-W-07.12.13に位置する。

形状:側柱建物と想定されるが、北西部は削平により不明である。**規模:**残存部で4間×1間で、750×390cmを測る。柱間内面積は29.25㎡(推定)に達すると見られる。**長軸方位:**N109°W
調査の経緯:4層上面で等間隔に並ぶ柱穴を検出し、掘立柱建物跡と認定した。

建物内施設:柱間内に硬化面や焼土跡はみつからなかった。柱は、ほぼ直線に並ぶ。柱間は等間隔ではなく、北列と南列の対応関係にもずれが認められる。各柱穴30cm以下の小規模なものである。柱痕が検出されたのはP2のみである。**遺物出土状況:**遺物の出土はない。

時期:遺物などがなく時期不明であるが、柱穴の状況から平安時代以降の可能性がある。

ピット	P1	P2	P3	P4
長×短×深 cm	27×25×21	25×22×31	30×28×29	32×28×25.5
	P5	P6	P7	
	25×23×17	30×24×40	28×26×14	

第4表 1号掘立柱建物跡柱穴一覧表

(3) 溝跡 (SD)

1号溝跡(SD01)(第33図、PL7) **位置:**1区、II-W-01.06、V-05.10に位置する。

形状:北西部と南西部は調査区外におよんでいるため全貌は不明であるが、残存箇所から円形の溝になるものと考えられる。**規模:**全長13m20cm、幅300~224cm、深さ38~46cmを測る。

調査の経緯:4層上面で平面形が円形の黒褐色土の落込みを検出し、トレンチにより底面が桶状の溝と判断した。**遺構の重複:**なし

遺物出土状況:土師器が1点(第66図1)出土している。

時期:出土した土師器から平安時代と考えられる。

(4) 土坑 (SK)

古墳時代後期~平安時代の土坑は21基検出したが、その分布は1区西側のSD01の周辺と、3区東側のST02・03周辺に分かれるが主に3区東側に集中している。

1号土坑(SK01)(第36図、PL9) **位置:**1区のII-W-07グリッドに位置する。

検出面:4層上面。**構造:**123×112cmの円形を呈し、壁はほぼ直角に立ち上がる。底面はほぼ平坦で深さは30cmを測る。**堆積状況:**ローム混じりの暗褐色土が堆積した後、黒褐色土が堆積している。**遺物出土状況:**遺物の出土は見られない。**所見ほか:**遺構の形状や覆土が人為的に埋め戻されたと考えられたことから、墓坑の可能性が考えられたため遺構内土壌のリン酸・カルシウム分析を委託により実施した。(第5章参照)

10号土坑(SK10)(第37図、PL9) **位置:**3区、II-Q-01に位置する。

検出面:4層上面。**構造:**(52)×44cmの楕円形を呈し、壁は垂直気味に立ち上がっている。深さ56cmを測る。**堆積状況:**4層が水平に堆積している。**遺物出土状況:**遺物の出土はない。

11号土坑 (SK11) (第37図) 位置: 3区、II-L-21に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 50×42cmの楕円形を呈し、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。深さ33cmを測る。堆積状況: 柱の抜き取り痕のような状況がみられる。遺物出土状況: 遺物なし。

12号土坑 (SK12) (第37図) 位置: 3区、II-L-21に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 41×39cmの円形を呈し、壁は垂直気味に立ち上がる。深さ22cmを測る。堆積状況: 堆積状況から柱の抜き取り痕のような状況がみられる。遺物出土状況: 遺物なし。

13号土坑 (SK13) (第37図) 位置: 3区、II-L-21に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 35×28cmの楕円形を呈し、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。深さ18cmを測る。堆積状況: レンズ状の堆積をしている。遺物出土状況: 遺物なし。

14号土坑 (SK14) (第37図) 位置: 3区、II-L-21に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 44×39cmの円形を呈し、フラスコ状の底部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。深さ23cmを測る。堆積状況: レンズ状の堆積をしている。遺物出土状況: 遺物なし。

15号土坑 (SK15) (第37図) 位置: 3区、II-L-21に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 27×26cmの円形を呈し、底部は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。深さ32cmを測る。堆積状況: 2層に分かれる。遺物出土状況: 遺物なし。

16号土坑 (SK16) (第37図) 位置: 3区、II-L-21に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 30×25cmの楕円形を呈し、底部はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。深さ25cmを測る。堆積状況: シルト質の黒色土の堆積の後、黒褐色土がレンズ状に堆積している。遺物出土状況: 遺物なし。

17号土坑 (SK17) (第37図) 位置: 3区、II-P-05に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 70×58cmの楕円形を呈し、底部は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。深さ36cmを測る。堆積状況: 柱の抜き取り痕のような状況がみられる。遺物出土状況: 遺物なし。

18号土坑 (SK18) (第37図) 位置: 3区、II-P-05に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 74×62cmの楕円形を呈し、底部は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。深さ36cmを測る。堆積状況: 覆土2層は水平な堆積を見せることから、一期に埋めもどされたものと考えられる。遺物出土状況: 遺物の出土はない。

19号土坑 (SK19) (第37図) 位置: 3区、II-P-05に位置する。検出面: 4層上面で検出した。構造: 60×58cmの円形を呈し、底部は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。深さ18cmを測る。堆積状況: 覆土2層は水平な堆積を見せる。遺物出土状況: 遺物なし。

20号土坑 (SK20) (第38図) 位置: 3区、II-P-05に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 54×54cmの円形を呈し、平坦な底部から傾斜しながら立ち上がる。深さ31cmを測る。堆積状況: 覆土2層は水平な堆積を見せることから、一期に埋めもどされたものと考えられる。遺物出土状況: 遺物の出土はない。

26号土坑 (SK26) (第38図) 位置: 3区、II-K-20に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 55×55cmの円形を呈し、底部は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。ほぼ深さ28cmを測る。堆積状況: 覆土2層は水平な堆積を見せる。遺物出土状況: 遺物出土なし。

27号土坑 (SK27) (第38図) 位置: 3区、II-K-20に位置する。

検出面: 4層上面で検出した。構造: 78×60cmの楕円形を呈し、底部は平坦で、壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。深さ56cmを測る。堆積状況: 黒色土主体で差異の少ない3層に分けた。遺物出土状況:

況：遺物の出土はない。

28号土坑（SK28）（第38図） 位置：3区、II-K-20に位置する。

検出面：4層上面で検出した。構造：60×40cmの楕円形を呈し、底部は平坦で、壁はやや傾斜して立ち上がる。深さ31cmを測る。堆積状況：分層した3層がレンズ状の堆積をしている。遺物出土状況：遺物なし。

29号土坑（SK29）（第38図） 位置：3区、II-K-19に位置する。

検出面：4層上面で検出した。構造：60×50cmの楕円形を呈し、底部は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。深さ35cmを測る。堆積状況：レンズ状の堆積をしていることから、自然埋没と考えられる。遺物出土状況：遺物なし。

30号土坑（SK30）（第38図） 位置：3区、II-K-20に位置する。

検出面：4層上面で検出した。構造：60×58cmの円形を呈し、底部は平坦で、壁は西側では垂直気味に、東側では傾斜しながら立ち上がる。深さ22cmを測る。堆積状況：覆土2層は水平な堆積を見せる。遺物出土状況：遺物の出土はない

31号土坑（SK31）（第38図） 位置：3区、II-K-25に位置する。

検出面：4層上面で検出した。構造：52×45cmの楕円形を呈し、底部は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。深さ19cmを測る。堆積状況：黒褐色土の流れ込み。遺物出土状況：遺物なし。

35号土坑（SK35）（第39図） 位置：5区、VII-D-19に位置する。

検出面：4層上面で検出した。構造：(160)×(52)cmの円形（推定）を呈し、壁はフラスコ状の底部から緩やかに立ち上がる。深さ22cmを測る。堆積状況：黒褐色土の単層であることから、一期に埋め戻されたものと考えられる。遺物出土状況：遺物なし。

36号土坑（SK36）（第39図） 位置：3区、I-O-15に位置する。

検出面：5層上面で検出した。構造：80×78cmの円形を呈し、ほぼ平坦な底部から、壁は緩やかに立ち上がる。深さ25cmを測る。堆積状況：炭化物層（2層）の上部はロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。遺物出土状況：遺物なし。

37号土坑（SK37）（第39図） 位置：4区、II-W-25に位置する。

検出面：29号竪穴住居跡掘下げ中に、4層上面から29号竪穴住居跡の床を切って掘り込んでいる本跡を検出した。構造：158×122cmの円形を呈し、平坦な底部から、壁はほぼ緩やかな傾斜立ち上がる。深さ35cmを測る。堆積状況：覆土は黒色土の単層である。遺物出土状況：遺物なし。

第5節 中世の遺構

1 概要

竪穴建物跡1軒と、土坑2基が確認された。3号竪穴住居跡、3号・4号土坑はI-O-08・07グリット、3区の西側に位置している。集落の中心部は、調査区より西に展開するものと推定される。時期は出土遺物から16世紀半ば以降と考えられる。

2 中世の遺構

(1) 竪穴建物跡 (SB)

3号竪穴建物跡 (SB03) (第9図、PL1) 位置: 3区、I-O-08 グリッド

形状: 長方形 規模: 260 × 196cm、深さ 45cm、床面積 2,623 m² 主軸方位: N38° E

調査の経緯: 4a層で検出中に礫が直線的に並んでいることから、精査し再検出したところ長方形の平面プランを確認することができた。4a層中の礫と人為的な礫を選別し、掘下げた結果、方形プランの内側に明瞭な石積みが確認された。土層観察のベルトを残して掘下げたところ、覆土中にはφ10～30cm大の礫とともに、土器片が散在しているのが認められた。遺構の重複: なし

住居内施設: 床面に貼床は認められず、地山の4a層を水平に掘下げたもので、全体的にやや硬化していた。壁面は内面が平らな石壁になるよう意識して、礫の平坦面が内側に向けられ垂直に石積されている。石を積むための掘方は壁面よりも70～34cmほど掘り広げられており、裏込めには砂利などはみられず黒褐色土を用いている。柱穴・周溝は検出されていない。

堆積状況: 2層に分かれるが、差異の少ない黒褐色土を基調としている。

遺物出土状況: 覆土中位・下位から内耳鍋の破片が出土している。金属製品 (第83図2・3、PL20) が覆土中より出土している。

時期: 16世紀半ば以降

(2) 土坑 (SK)

3号土坑 (SK03) (第36図、PL8) 位置: 3区、I-O-08 に位置する。

検出面: 5a層上面で検出した。SK04と覆土の差はほとんどないが、SK04の方が若干黒みを帯びるため分離した。構造: 190 × 140cmの不整形を呈し、深さ32cmを測る。堆積状況: しまりの弱い黒色土で構成される。遺物出土状況: 銭貨 (第83図9～12、PL20)、土器が出土している。時期: 16世紀半ば以降

4号土坑 (SK04) (第36図、PL9) 位置: 3区、I-O-07.08 に位置する。

検出面: 5a層上面で検出し、SK03と重複する。構造: 350 × 150cmの不整形を呈し、深さ23cmを測る。堆積状況: しまりの弱い黒色土で構成される。遺物出土状況: 内耳鍋の小破片が少量出土している。時期: 16世紀半ば以降

第4章 遺物

第1節 概要

今回の調査で出土した遺物の総量は、プラスチックケース132箱におよぶ。時期別に見ると、縄文時代早期末～前期の土器12箱(8%)、縄文時代中期の土器2箱(2%弱)、弥生時代後期の土器28箱(21%)、古墳時代後期の土器等24箱(18%)、平安時代の土器等62箱(43%)、中世の土器・陶磁器類が3箱(2%)である。検出された遺構数と比較すると、平安時代の土器量が主体的な傾向を示す。石器・石製品は20箱で、縄文時代が主体である。弥生時代以降は各時代一桁の出土で、器種は磨石・石包丁など様々である。金属製品は、中世の遺構から出土したものが多く、古墳時代後期、平安時代に比定されるものが各1点、弥生時代に比定できる資料は出土していない。

遺物図の掲載は、出土した遺構を基本としており、時期に関係なくSB番号順に掲載してある。本章では、時代ごとの内容をまとめるため、時代順に記述を行う。

第2節 縄文時代の遺物

1 縄文時代早期末～前期の土器

(1) 概要

この時期に比定される土器は、竪穴住居跡7軒と包含層から12箱(8%)が出土している。まとまった数の土器を出土した遺構は少なく、図面上で復元可能な土器を出土したのは21号・30号・38号竪穴住居跡のみである。細別時期では、前期前葉が大半を占め、遺構内からわずかながら早期末～前期初頭の土器片が出土している。また、前期前葉の土器は、器形・文様の特徴から、中越式のごく限られた期間に限定される。

(2) 分類

分類は、時期によって大区分し、早期末～前期初頭をI群、前期前葉をII群とした。次に、地域的な特徴を考慮して、在地系土器とした土器をA類、器肉が薄い東海系に比定される資料をB類、繊維を含む結末縄文の施文された関東系とされる資料をC類に中区分した。ただし、早期末～前期初頭については、資料が数点であるため中区分を示していない。さらに、文様や施文手法の特徴によって細分した。各分類の概要は以下のとおりである。

I群：早期末葉から前期初頭

- 1：結節羽状縄文・単節羽状縄文(LR+RL)の施文がみられるもの。繊維を含むものと含まないものがある。

2：回転燃糸文が施文されたもの。

II群：前期前葉

A類：在地系土器

器肉は、いわゆる中厚手といわれ、厚みは4～6mm前後を測る。基本的には繊維を含まない。ただし、繊維を含む例が少数みられる。指頭圧痕による器面調整がなされる。器形は、頸部が括れ、口縁部が外反する。地文と文様によって、平行沈線による斜行子目文が施文されたもの、口縁直下の頸部に横位の刺突を施したものの、口縁部に垂下する粘土紐が施文されるものと、縄文が施こされたもの、および無文に分けられる。

- 1：斜行子目文が施文されるもの。
- 2：縄文が施文されるもの。3種に細分できる
 - a：結束羽状縄文(L+R)が施文されるもの。
 - b：無節羽状縄文(L+R)が施されたもの。
 - c：単節羽状縄文(LR+RL)が施されたもの。
- 3：頸部に横位の刺突が施されるもの。
- 4：口縁部に垂下する粘土紐が施文されたもの。
- 5：無文のもの

B類：東海系土器

A類に比べ器肉が薄く、胎土のきめが細かく繊維を含まない。器形はA類と同様頸部が括れ、口縁部が外反する。地文に縄文は施されず、櫛歯状工具による斜行子目文が施文されるもの。

C類：関東系土器

A類に比べ器肉が厚く、胎土には繊維を含む。器面調整には丁寧なナデが施される。器形は客体的なため不明である。結束羽状縄文が施されたもの。

(3) 遺構出土の土器

21号竪穴住居跡 (SB21) (第56図、PL15)

1・2・5・13はII群A類5で、2は1に比べ外反の度合いが弱い。斜行子目文が施された3・4・10・11のうち、1・11は在地系のII群A類、4・10はII群B類である。5・6・7はII群A類2bで、わずかに繊維を含んでいる。14・15は底部片で、胎土はII群A類とみられるが、胴部下半には文様を施さないことが多く細分できない。

28号竪穴住居跡 (SB28) (第58図、PL15)

1・2は無文で、1はII群B類、2はII群A類5に分類される。3は繊維を含まないII群A類2aである。4は胎土からII群A類の底部片である。

30号竪穴住居跡 (SB30) (第59図、PL16)

1・5はII群A類1で、1は口唇部に刻みを持ち、器形は括れるだけでなく胴部に張りがある。3はII群A類2aの口縁部片である。4はII群C類で繊維が多く単節羽状縄文(LR+RL)が施文される。6・7はII群A類5である。8はII群A類2cで繊維を多く含む。

31号竪穴住居跡 (SB31) (第60図、PL16)

1・8・9・10はII群A類1で、8・10は施文工具が他のII群A類とは異なり、斜行子目文が篋条の工具で施文されている。2・3・4・6・7・11はII群B類で、2・3には口唇部に刻み目を持つ。4はやや括れた頸部に横位の刺突が施されている。6・7は口縁部が折り返され段を有し、7には段の端部に横

位の刺突が施されている。11は横位の粘土紐が貼り付けられ、その上に刺突を施している。5・12・13はⅡ群A類5で、5はそのミニチュア土器である。14・15・16はⅠ群1で、14は繊維を含み、15・16は繊維を含まない。17はⅠ群2で、本遺跡ではこの1点のみである。18は無文で、Ⅱ群A類以上の細分はできない。

34号竪穴住居跡 (SB34) (第64図)

1はⅡ群B類で口縁部に刻み目を持つ。2・4・5はⅡ群A類5で、2はやや外反する刻み目のある口縁部片である。3はⅡ群A類1bで、繊維を含む。6はⅡ群A類1である。7はⅡ群C類でわずかに繊維を含む。8はⅡ群A類2cで多量の繊維を混入する。9はⅡ群A類3で垂下する粘土紐がわずかに残っている。

35号竪穴住居跡 (SB35) (第64図)

1・2はⅡ群A類1で、1には口唇部に刻み目が施されている。3は器面が荒れているが、施文時の単節羽状縄文の結節部が認められる。

38号竪穴住居跡 (SB38) (第65図, PL17)

1・2・3はⅡ群A類5で、1の口縁部は小さく摘み上げられ、小波頂部を形成している。小波頂は4単位になるものと考えられる。頸部の括れと胴部の張り出しが1・2・3で認められる。5・6はⅡ群B類で、5は無文、6は斜行子目文がみられる。4は器面があれているが、わずかに条痕が認められる。

(4) 時期の概観

今回の出土資料の主体をなすⅡ群の時期は、渋谷昌彦氏の中越式土器編年の第Ⅱ式段階(渋谷1991)、費田明氏のⅣ段階(費田2007)に比定される。本書Ⅱ群A類(中越式)の段階区分は、器形の変遷にあるといわれている(渋谷1991)。それは、渋谷氏のⅠ式段階ではやや寸胴な砲弾型の尖底で、Ⅱ式段階になると頸部が括れ、口縁部が外反する器形、Ⅲ式段階では括れが消える。また、それに伴って、口縁部の文様帯も変遷する。Ⅱ式段階ではⅠ式段階でみられた粘土紐や有段化の位置の文様が横位の刺突へとなり、Ⅲ式段階では横位刺突が消滅する。これらのことから、出土した土器は頸部の括れや頸部への横位刺突の特徴から、渋谷氏のⅡ式段階に限定される。また、Ⅱ群B類は木島式に、C類は間山式に比定される。

7軒の竪穴住居跡から出土した土器のほとんどは、ほぼ同時期と考えられる。その中で、31号竪穴住居跡からは、古い特徴を持つ土器(第60図8・10)が出土している。これらは、Ⅱ群A類1に分類されるが、斜行子目文の施文に篋条の工具を使用している点で他と異なっている。篋状工具は前段階に特徴的な技法であり、他のⅡ群A類1では櫛歯状工具や半葎竹管などの比較的細い工具が用いられている。一方、作出した(第60図9)は頸部の括れがⅡ群の特徴を示しており、住居跡の廃絶時期はさほど古くならないと考えられる。

2 縄文時代中期の土器

(1) 概要

この時期に比定される土器は、竪穴住居跡2軒(39軒中)と包含層からプラスチックケースで3箱(2%)にとどまる。しかも、図化できたのは14号竪穴住居跡出土資料のみである。そのため、ここでは分類を行わなかった。時期は、中期後葉2期である。

(2) 遺構出土の土器

1号竪穴住居跡 (SB01)

覆土から1点小破片が出土したが、文様が無く器形も不明であったため、図化できなかった。

14号竪穴住居跡 (SB14) (第50図)

1は鉢で、内外面にナデ調整が認められる。2は褶曲文の施された小型の深鉢である。3は刻み目のある隆帯が横位に巡らせている。4・9・12・14は沈線上に隆帯を貼り付けている。5はキャリバー形の口縁部で、横位隆帯の上下に縦方向の短い沈線を施文している。6・8は縦位の沈線上に粘土紐貼付け波状文を描いている。10は斜行する沈線が突起上にも施され、沈線上に粘土紐が横位に貼付けられている。11・13には縦位の沈線文が施されている。

3 縄文時代の石器

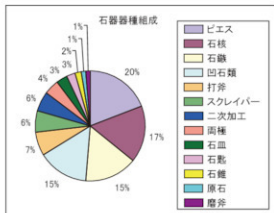
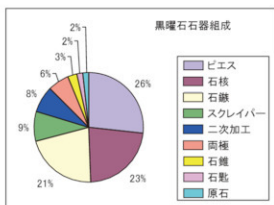
(1) 概要

縄文時代の石器は、総数1,513点である。石器の器種は石鏃、スクレイパー、石匙、石錐、両極石器、ピエス・エスキュー、二次加工剥片、打製石斧、磨製石斧、凹石、磨石、敲石、石皿が136点、この他、石器素材や製作後の残片と見られるものに、原石、石核、剥片・破片がある。

時期は、出土した遺構・包含層で伴出した土器から前期と中期とみられる。表土層などから出土した資料については、形態的に縄文時代の石器と認定できたものだけここに含めた。また、縄文時代中期の遺構に伴う石器は17点と少なく、定型石器もないため、ここでは前期の石器を中心に記載する。

(2) 縄文時代の石器組成

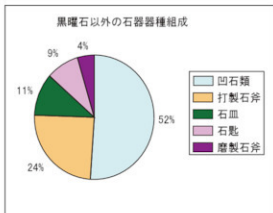
総数1,513点を石材別にみると、前期では黒曜石1,437点(96.6%)、それ以外51点(3.4%)である。黒曜石のうち、剥片が1,334点(92.8%)で、石器と原石・石核は113点(7.8%)である。石器などの器種は石鏃が24点、石錐3点、スクレイパー10点、石匙2点、両極石器7点、ピエス・エスキュー29点、石核26点、二次加工剥片9点、原石2点である。ただし、ピエス、石鏃、二次加工剥片の破片資料については、剥片に含めてしまった可能性があり、数量の増加が予想される。石匙は黒曜石製が2点で、この他、無斑品質安山岩・凝灰岩のものが各1点出土している。



黒曜石以外の石材は、51点で(3.4%)であった。剥片を除いた黒曜石製石器113点と比較すると、黒曜石が69%、他石材は31%である。後者の器種と点数は、打製石斧11点、磨製石斧2点、凹石類23点、石皿5点、石匙4点であった。

黒曜石以外の石器器種組成の円グラフは、以下の通りです。

器種	割合
凹石類	52%
打製石斧	24%
石皿	9%
石匙	4%
磨製石斧	4%



第5表 石器組成グラフ

(3) 器種別の概要

石鏃 (第69図、PL21)

26点出土した。そのうち20点を掲載した。基部の形態は全て凹基である。凹部の抉りが深いものと浅いものが存在し、割合は同程度である。石材は18のチャートが1点で、他は全て黒曜石である。5・7・14・17の4点は欠損品である。その他に、未完成品が1点出土している。

石錐 (第69図、PL21)

3点出土し、全て掲載した。石材は全て黒曜石である。21は錐部に剥離加工が見られ、やや幅のある摘み部では剥離加工が粗くなっている。22は錐部と思われる剥離が両端に認められるが、錐部以外に加工の痕は見られない。23は剥離の加工は錐部と側縁部の一部に見られるだけである。

スクレイパー (第69.70図、PL21)

10点出土し、そのうち9点掲載した。石材は全て黒曜石である。24～26・29～32は片側に刃部を持っている。その中で、24～26・31の刃部の調整は急角度である。27は両側縁部に刃部を持っている。28は両側縁部に刃部が見られるが、片側の刃部はやや粗いものである。27・28は削器的要素が強い石器といえる。

石匙 (第70.72図、PL22)

出土した4点、全て掲載した。石材は黒曜石が33・34の2点、無斑晶質安山岩が50・51の2点である。33は刃部を両側から調整している。刃部の一部は欠落している。摘み部の片側は明瞭であったが、もう一方は作り出されていたものか、欠損したのか判断としない。34は摘み部のみ残り、刃部は欠損している。

両極石器 (第70.71図、PL22)

出土した6点、全て掲載した。石材は全て黒曜石である。両極打法のみられるもので、平面の形状は、長方形を基本とするが、台形状のものもある。厚みは0.6～1.4cmである。36～40は両極打法により上下、あるいは直行方向からの打撃が認められたものである。35は両極の打撃後に側縁部の一部に剥離が認められていることから、石鏃などの未完成品の可能性がある。

ピエス・エスキーユ (第71図、PL21)

29点出土し、そのうち6点掲載した。石材は全て黒曜石である。両極打法による剥離が石器の長辺に對峙する二辺にみられるものである。ピエス・エスキーユは両極石器に比べて比較的小さく敲打痕が石器の長軸に残るのに対して、両極石器は短軸に敲打痕をもつ。形状は長方形、あるいは方形を基本とする。断面は板状・台形を呈する。41～43は長方形、44は方形、45・46台形を呈し上下に敲打痕が認められる。

二次加工剥片 (第72図、PL22)

10点出土し、そのうち1点掲載した。石材は細粒砂岩が1点、他は全て黒曜石である。一定の形状が認められず、一側縁部に微細な剥離をもつ剥片である。52はほぼ直線的な一側縁に調整を施している。52と同様な刃部を施すものは10点中8点である。他の2点は弓状に内湾した側縁部に調整のみられるものである。

原石

黒曜石の原石が、未掲載だが2点出土している。1点(管理番号NO.193)は1区耕作土から、2点目は3号土坑覆土から出土している。

石核 (第71図、PL22)

26点出土し、そのうち3点掲載した。石材は全て黒曜石である。打面を2面以上持つものが多く、自然面を残す2面以上残すものはみられない。27点の重さは4.36～48.57gで、15～30gのものが主体を占めている。

打製石斧（第72.73.74図、PL23）

出土した11点中、9点を掲載した。56・58は刃部が欠損している。他は完形である。53・55・60・62は撥形。他は長方形を基調とするが、刃部の幅がやや広い短冊形である。また、断面が湾曲するものは見られない。石材は53・54・58・60が凝灰岩、54・57・62が砂岩、56が凝灰質砂岩、59・61が細粒砂岩である。

磨製石斧（第74図、PL22）

出土した2点を掲載した。63の平面形は円状で、断面には膨らみがある。64は基端部が欠損し、刃縁部には剥離が認められる。形状は短冊状で、両側縁部は磨かれ稜がみられる。石材は63が緑色チャート、64は凝灰岩である。

凹石類（第75～82図、PL23.24）

23点出土し、22点掲載した。凹石、磨石、敲石、それぞれ単一の機能に使用されたものもあるが、それぞれの機能が複合して使用されたものが多いため、凹石類としてまとめた。石材は安山岩が17点、輝石安山岩が4点、斜方輝石安山岩が2点、ひん岩が1点である。平面の形状は、楕円形・円形・隅丸方形・台形・棒状形と多様である。

単一の機能をもっていた石器は、65～73・90が凹石、74・78・83が磨石、87・92は敲石と考えられる。複数の使用痕が認められるものでは、85が凹石と磨石の機能をもったもの、89・93は凹石と敲石の機能をもったもの、79・80・88は磨石と敲石の機能をもったものと考えられる。75～77・84・91は凹石・磨石・敲石の3種の使用痕跡をもっている。特に75～77は、形状と使用痕跡の状況に共通項が多いことから、何らかの特定の機能をもった道具であったことが推測される。

石皿（第82.83図、PL25）

5点出土し、全て掲載した。平面形は楕円形で、断面形状は比較的平坦なものと同円を持つものがある。石材は安山岩が3点、斜方輝石安山岩・輝石安山岩がそれぞれ1点である。重さは1.29～18.9kgと幅が大きい。

94～97・101は平面形が楕円形である。断面形は機能面がほぼ平坦なもの94・96・97、使用のため若干凹んだもの95、中央部の磨面が大きく凹んだもの101の3種ある。101の機能面は敲く・磨るの2つの機能をもっていたと思われるが、他の楕円形状の石皿は、磨る機能に使われたものと考えられる。

（4）縄文時代中期の石器

2軒の竪穴住居跡から出土したものの17点で、すべて黒曜石製である。石核、ピエス・エスキュー、石鏃未成品が各1点、剥片14点である。

第3節 弥生時代の遺物

1 弥生時代後期の土器

（1）概要

弥生時代後期の土器は、竪穴住居跡5軒と包含層から28箱出土している。遺物総量の約21%を占める。まとまった資料は32号・33号竪穴住居跡で、他の遺構での出土量は多くない。

時期はすべて弥生時代後期で、特に後期中葉の短期間に限定される可能性が高い。そのため、後期中葉の土器様相を把握するには良好な資料と考えられる。

(2) 分類

弥生時代に比定される5軒の竪穴住居跡のうち、遺物の出土量が比較的多かった32・33号竪穴住居跡に視準を置いて分類を試みた。

土器はすべて弥生時代後期に比定され、中期に遡る資料は見つかっていない。また、弥生時代後期後半の遺跡でみられる、内外面に刷目調整を残す東海系とされる甕・台付甕はみられない。このことから、後期の後半～末葉に土器は含まれないものと考えられる。

器種は、壺・甕・高坏・台坏甕に分かれる。その分類基準は、壺は胴部最大径が中位より下にあるもので、櫛描による頸部文様帯をもつもの、口縁部を折り返すものと折り返さないものがある。甕は頸部には櫛描による文様が施され、胴部より口縁部径が大きいもの、口縁部より胴部が張るもの、口縁部径に対して器高が高いものなどがある。高坏は赤彩の施されたものが1点出土している。台付甕は赤彩された脚部が1点出土している。量的には甕が最も多く、次いで壺が少量みられ、高坏・台付甕などは散見されるのみである。このことから土器分類は甕を中心に行った。

甕の分類 甕は、胴部から口縁部にかけての形態、波状文と簾状文の施される個体と刷毛目の施された個体の違いを基準とした。

甕A：最大径が口縁部と胴部で同じもの

- 1：頸部のくびれは弱いもの
- 2：頸部のくびれが曲線的な弓状のもの

甕B：最大径が胴部より口縁部にあるもの。頸部のくびれは弱く、口縁部が広がった深鉢状を呈するもの

甕C：最大径が口縁部より胴部にあるもの

- 1：胴部から口縁部の外反が曲線的なもの
- 2：胴部から口縁部の外反が「く」の字状を呈し、直線的に立ち上がるもの

壺の分類 壺では個体数が少なく、完形あるいは、全貌の把握できるものがないため口縁部の形態から大分類し、文様の有無によって細分した。口縁部形態には2種が認められ、茅野市・家下遺跡や岡谷市・橋原遺跡など、他の遺跡で見られるような複合口縁は出土していない。

壺A：口縁部を折り返さないもの。

- 1：口縁部が無文のもの
- 2：口縁部に波状文・縄目が施されるもの

壺B：口縁部折り返すもの。

- 1：口縁部が無文のもの
- 2：口縁部に波状文・縄目が施されるもの

(3) 遺構出土の土器

28号竪穴住居跡（SB28）（第58図、PL15）

1・2は甕の頸部で、1には、この時期特有の装飾が認められる。すなわち、横位の波状文と、その下に等間隔止めの簾状文である。3・4・5は壺B2。折返しの形状は、3・4は角状に、4は短く折りたたんで先端部を尖らせている。6・7はT字状文を持つ壺である。

1に見られる等間隔止めの簾状文は、後期中葉のやや古い要素を示していると考えられる。

29号竪穴住居跡 (SB29) (第58図)

1は鉢の口縁部で、内外面磨きの後、外面の口縁端部に細かな波状文が施されている。2は甕の頸部から胴部にかけての破片で、等間隔止め櫛描波状文が施されている。3は壺の波状文が施された胴部片である。

少ない土器片から時期を導き出すことは不可能であるが、後期中葉でも等間隔止めの櫛描文が見られるなど、総合的には古い要素を示しているといえる。

32号竪穴住居跡 (SB32) (第60～63図、PL16.17)

甕では、1は甕C1。残存部から考えて胴部最大径は口縁部径より張出し、やや球形の胴部を持つものと考えられる。口縁部と胴部に描かれる櫛描波状文は櫛描櫛文の上下に乱雑に施されている。2は甕A2。頸部のくびれが比較的強い。文様は1と同様にやや雑な印象を受ける。3は甕C2。頸部のくびれが強く内外面に稜が認められる。胴部は張りがありやや球形を呈している。4・5・14・15・19は甕A1。4・5の口唇部には刷毛目状工具による刻み目があり、14・15には刻み目はみられない。6と16は口唇部がやや内湾するタイプであるが、口縁部破片のため器形は不明である。口縁部の立ち上がる様子から6はA2。16はA1の可能性が考えられる。9・17・18・20は甕B。甕Bは小振りなものが多く傾向にある。20には刷け調整の上に、櫛描の斜行する短線文が施文されている。8は大型甕と考えられるが口縁部破片のため器形は不明である。刷毛目調整の方向に直交して櫛描斜行短線文が施されている。24は刷毛甕で、内外面に刷毛目が施されているが、刷毛目調整の後にミガキが施されている。周辺の遺跡で散見される内外面刷け調整の甕の中には東海系のS字甕や台付甕が見られる。しかし、24は東海系に比べ器肉が薄く、刷毛目の後にミガキ調整が行われるなど相違点が多く、東海系とは認められない。30・33・34・35・36・40は甕の口縁部破片で、全体の器形は不明である。口唇部に櫛状工具による刻み目を持つタイプで、33の施文具は磨耗により不明である。40は櫛状工具による羽状の施文が施されており、千曲川水系の影響を受けたものであろうか。

壺では、10・11・13は内外面ミガキ調整された壺の底部である。12は内面に刷毛目調整されている。22・28は壺B2で折返し部が短い。22は口唇部に波状文が施され、28は縄を転がしている。23・31は壺B1で、22の折返し部は短く、31の折返し部は薄く幅が広い。29・32は壺A1である。39は「J」あるいは「U」字状文の内側に刺突が施されている。刺突が施された個体は今回の調査ではこの1点のみである。21は口縁部・底部を欠く個体で、文様は頸部に2単位の櫛状工具による「T」字状文が施されている。

甕、壺以外では片口・高坏・台付甕が出土している。25は片口鉢であるが赤彩は施されていない。26は台付甕の脚部であるが、上部端部(口唇部)に意図的な磨耗が見られることから、2次利用されているものと考えられる。27は台付甕の脚部で外面は丁寧なミガキの後、赤彩されている。

出土土器全体の様相は、甕の形態や文様の構成から弥生時代後期中葉と考えられる。

33号竪穴住居跡 (SB33) (第63図、PL17)

甕では、1が甕A2で、頸部に櫛描波状文が充填されている。今回の出土で、櫛描櫛文が施されていない甕A2はこの1点のみである。2は甕Bで、32号竪穴住居跡の例に比べて大型で、口唇部が内湾気味に立ち上がる。櫛描櫛文は等間隔止めから不揃いな多連止めに変化する中間ともいべき止め方で、3回の短い等間隔止めを9～10単位(頸部の残存状況が1/3のため単位の詳細は不明)が繰り返して施されている。

壺では、3は壺A1。頸部には2～3本の篋状工具によるT字状文が施されている。6は壺B2で口唇部には櫛描による波状文が見られる。

文様の点で、本住居跡の甕の波状文は、32号竪穴住居跡の例に比べて丁寧である。甕B2の大きさの違い、

裏A 2 1にみられる簾状文の等間隔止めから多連止めへと移行する施文方法は時期差からくものと考えられる。また、壺の3にみられる篋状工具による「T」字状文は、32号竪穴住居跡のそれより古い手法と考えられる。このように、本跡には、32号竪穴住居跡より古い要素をもつ土器が含まれているといえる。

36号竪穴住居跡 (SB36) (第64図)

1はやや大型の甕胴部破片である。胴部の張りが強いことから裏Cないしは裏C 2と考えられる。2は櫛状工具による「T」字状文が施された壺の胴部破片である。器面は光沢を放つほどミガキが施されている。2点のみでは時期の判断は難しいが、32号竪穴住居跡と近似する時期と考えられる。

37号竪穴住居跡 (SB37) (第64図、PL17)

1は裏A 1で、口縁部にわずかに櫛状工具による刻み目が残る。頸部の櫛描簾状文は、やや不揃いではあるが間隔の狭い多連止めである。3は胴部破片であるが、頸部のくびれが弱いことから裏A 1と考えられる。1・3に施された櫛描波状文は、やや雑な印象が残る。2は小型の壺で、上部端に櫛描波状文が施され、施文部以外には赤彩が施されている。胴部最大径の内面には指頭圧痕の成形痕が観察される。4は大型の赤彩された高環で、環部の口縁部は水平に屈曲させている。本調査での赤彩土器の数は32号竪穴住居跡の27、と本住居跡の4の2点だけである。千曲川水系との繋がりを示す数少ない資料といえよう。

少ない遺物から時期を決定すること難しいが、1の多連止め櫛描簾状文を施された裏や1・3の波状文の施文方法から、32号竪穴住居跡に近接する時期ととらえたい。

4号溝跡 (SD04) (第66図、PL19)

1は壺で、頸部に「T」字状文が施されているが、描かれている櫛状の平行な条線の太さが不揃いで、篋条の工具で施文したように見える。胴部外面にはタール状の煤が付着している。2は裏B。口唇部に篋状工具による刻みが施され、頸部にはやや間隔の広い多連止めの簾状文が施され、その上下に波状文がみられる。器面が粗れているが、やや雑な印象を受ける施文である。

2点のみでは時期の判断は難しいが、32号竪穴住居跡と近似する時期と考えられる

5号溝跡 (SD05) (第67図、PL19)

1は壺B 2で、全体に器表面の剝離が著しい。頸部には等間隔止め(等間隔が乱れる箇所があるが)を基本とする櫛描簾状文が2段で施文されている。折返し部は短く断面は方形を呈する。2は裏というよりは鉢に近い器形と考えられ、内外面とも磨耗により調整痕がほとんど認められない。色調は灰黒色で、東海系土器に散見する細かい白色粒子を多量に含んだ(泥状)粘土のようである。3は裏の頸部から胴部片で、頸部に波状文が認められる。胴部の最大径は頸部直下にある。胴部には丁寧な縦方向のミガキが施されている。4は強い刷毛目調整の後に、使用痕と考えられる籠目の残る壺である。

時期は、1の頸部の等間隔と考えられる簾状文と、3の裏の胴部最大径の位置から、32号竪穴住居跡より若干古い要素が認められる。

(4) 遺構外出土の土器 (第68図、PL20)

遺構外から出土した遺物は少量にとどまる。3区II-K-14グリッド(SB23周辺)出土土器を掲載する。ここでは、遺構こそみられなかったが、検出面で1~3がまとまって出土したため一括があると判断した。

1は裏C 1で胴部の膨らみは中位に最大径を持つ球形に近い形状である。文様は櫛描簾状文が等間隔止めで施され、丁寧な波状文が4段認められる。2は櫛状工具による「J」字文が施文された壺である。3は頸部の外反から裏A 2ないしは裏C 1と思われる。胴部にやや張りのある膨らみを有し、等間隔の櫛描簾状文とその下位には4段の波状文が認められる。

1・3は等間隔止めで施文された櫛描簾状文が見られ、時期的にも近似している。32号竪穴住居跡に

みられる甕の多連止め櫛描線状文より古い傾向を示している。

2 弥生時代の石器

竪穴住居跡から計7点出土している。1点は石包丁で、1点は凹石、5点は磨石である。

石包丁（第83図、PL22）

102で、石材は泥岩である。半分以上欠損しているため、形状は判断しづらいが半月形と考えられる。背部の穿孔は欠損のため不明である。

凹石（第76図、PL23）

71は、1面に凹をもっている。

磨石（第78,79,80図、PL24）

78・80～83・85で、78は表裏2面に機能面が認められる。82・83・85は1面に機能面が認められる。81は断面が台形で全面に使用の痕跡が認められる。80は表裏面に機能面が見られるが、一部に敲打痕が認められる。

第4節 古墳時代～平安時代の遺物

1 古墳時代後期の土器

(1) 概要

この時期に比定される遺物量はプラスチックケース132箱中24箱（18%）である。この時期に比定される6軒（39軒中）の竪穴住居跡を中心に出土したが、まとまった数を出土したのは19号竪穴住居跡のみである。環の形態的な特徴から、7世紀代に比定される。

出土点数が少なかったため分類は行っていない。各遺構の説明文中で、器種・器形・調整方法について記述した。

(2) 遺構出土の土器

5号竪穴住居跡（SB05）（第44図、PL10）

1・2は環で、内外面ともに密なミガキが施されている。外面は篋削りの後にミガキが施されているが、丁寧なミガキのため篋削りの単位は不明瞭である。3は碗で、内湾気味に立ち上がり、内外面とも密なミガキが施されている。4・5は外面を篋削りした甕で、4は上部の篋削りはナデにより消されている。

9号竪穴住居跡（SB09）（第47図、PL11）

1は口縁部と底部の境に稜を持つ環で、内面はミガキが施されているが、底部外面は篋削りが残る。2は灰釉陶器で混入品である。3は高環で、環部は内外面とも密なミガキが施されている。4は縦方向に刷毛目が残る甕である。

10号竪穴住居跡（SB10）（第48図、PL11）

1～3・6は口縁部と底部の境に稜を持つ環で、1は内外面ともミガキが認められず、底部外面は篋削り、内面にはナデが残る。2は底部外面の篋削りの後、内面はナデの後まばらなミガキが施されている。3・6はやや大きめの環で、3の内面と6の内外面にまばらなミガキが施されている。4は外面に篋削り後ナデ

が施された甌である。5は胴の張った甕の底部と考えられる。7は須恵器の壺の胴部で降灰が認められる。

19号竪穴住居跡 (SB19) (第54.55図、PL15)

1～4は口縁部と底部の境に稜を持つ環であるが、内外面にミガキが施されるものは2のみで、1は内面のみ、3は内面と口縁部外面に粗いミガキが施されている。4・5・7・9底部からやや内湾気味に口縁部へ立ち上がる環で、7・9はやや大型の杯である。ミガキは5・9は内外面施されるが、4・7は粗いミガキである。8・10は器形の全貌が不明だが、深さのある大型の鉢と考えられる。8は外面が篋削りで、内面ナデ、9は内外面にミガキが施されている。6・9は須恵器で6は環、9はハソウの口縁部である。12・21・22は篋削りの施された甕の底部で、木葉痕が残されている。14・15は胴部外面に篋削りを施した長胴甕で、14は外面の篋削り後弱い刷毛目が残されている。15の内面は横方向の刷毛目で調整されている。13は小型の壺で、外面には篋削りが施されている。16・17は胴部が球形になる胴張り甕で、16は外面胴部と内面の口縁部・胴部に主に横方向のミガキが施されている。17は外面の調整は剝離が著しく不明だが、内面にはミガキがみられる。18は内外面丁寧なミガキの施された甌である。19・22・23は胴部が張り、口縁部が開き気味の甕であるが、器面が荒れており調整が不明瞭ではあるが、19は外面ナデで、内面に一部刷毛目のみみられる。22は外面ナデで、底部付近に刷毛目が残る。23は外面に部分的にミガキの痕跡が認められた。19と22は同一個体と考えられたが、胴部径が一致しない。

22号竪穴住居跡 (SB22) (第56図)

1・2は口縁部を欠く口縁部と底部の境に稜を持つ環であるが、稜が不明瞭となり丸味を失っている。1の底部には篋削りが施されているが、2はナデのため篋削りは消されている。両者とも内面にはミガキが施される。3は胴部篋削りの長胴甕である。4・5は小型甕で、4はナデ、5は弱い篋削りが認められる。

(3) 時期の概観

出土した土器は限られた遺構からのもので、時期を決めるのには限界があるが、土師器の環からほぼ6世紀後半～7世紀の範疇で考えることができるが、ミガキの施し方の違いから5号竪穴住居跡がやや古手の傾向を示しているものと考えられる。5号竪穴住居跡以外では、ミガキが粗いものや篋削りのままのものが見受けられる。しかし、19号竪穴住居跡以外の出土量は少ないため、時期の細分は不可能と考えられる。

2 古墳時代後期の石器

古墳時代後期に帰属すると認定できたものは、敲石 (第81図88、PL24) 1点のみである。やや細長い楕円形で、敲打部1ヶ所と磨面を1面の2つの機能をもっている。石材は安山岩である。

3 平安時代の土器

(1) 概要

平安時代の竪穴住居跡の数は、39軒中18軒と全体の約4割を占め、土器出土量もプラスチックケースで141箱中62箱と、全体の43%を占める。しかし、遺構の残存状況は良好とはいえ、まとまった数の土器を出土した遺構は6号・7号・16・18号住居跡の4軒にとどまる。

出土土器の全般的な傾向をみると、須恵器と灰釉陶器が少なく土師器と内黒土器がかなりの量にのぼること、土師器と内黒土器の形態に変化が少ないこと、奈良時代特有の底部に篋削りされた環Aがみられないこと、灰釉陶器の出土量が少なく羽釜が出現していないこと、などが認められた。このことから、きわめて短い時期にまとまることが判明した。

(2) 分類

当該時期の諏訪地域を対象とした土器分類・編年研究には、十二ノ后遺跡での笹沢浩氏（長野県教委ほか1976）の考察がある。また、松本平では中央道の総論編の中でおこなった小平和夫氏（長野県埋蔵文化財センターほか1990）の成果がある。今回は、近年の研究動向では、中央道の膨大な資料から分析を行った小平氏の分類を基準に、笹沢氏の研究を参考として分類をおこなった。

まず、土器製作技術の違いと材質から、土師器・須恵器・灰釉陶器に分けた。土師器は、酸化焙焼成された土器で、供膳具ではロクロ整形されたもの、煮炊具ではロクロ整形と非ロクロ整形のものがある。黒色土器は、ロクロ整形の酸化焙焼成の土器で、炭素を吸着させ、内面に篋ミガキを施したもの。須恵器は、ロクロ整形で、還元焙焼成された土器である。軟質須恵器は、須恵器の1種で、胎土が粗く黒斑があり全体が灰白色の土器である。灰釉陶器は、灰釉を掛け還元焙焼成された土器である。

次に、土器は生活の道具であるという観点から、食器としての供膳具、鍋としての煮炊具、貯蔵・保存の道具としての貯蔵具に器種分類した。さらに、供膳具は環・埴・皿・鉢に、煮炊具は甗・小型甗に細分した。貯蔵具としては壺のみ出土している。

各器種は、小平・笹沢両氏の分類を参考として、以下のように細分した。

供膳具

土師器

環：ロクロ整形で体部が直線的に開くもの。器形からA～Cに細別でき、環Bは出土していない。

環A：ロクロ整形で、体部の立上りは直線的に開く。内面にはミガキが施される。底部には糸切り痕を残す。黒色土器の環A、軟質須恵器A、須恵器Aも器形の形状は同じである。

環C：ロクロ整形で、外面中位から底部は篋削り、内面には放射状の暗文を施すもの。胎土はきめ細かく、赤褐色・黄褐色を呈する。いわゆる、甲斐型環である。

埴：ロクロ整形で、高台が付き、体部は内湾気味に立上がり、底部に糸切り痕を残す。内面には部分的なミガキが施される。

皿：直線的に伸びる体部で、高台の付いたもの。内面にはミガキが施される。皿A・Bは出土していない。

皿C：ロクロ整形で、底面は篋削り、内面には放射状の暗文を施すものがある。胎土はきめ細かく、赤褐色・黄褐色を呈する。いわゆる、甲斐型の皿である。

黒色土器

環・埴・皿の分類は土師器と同様で、環では環Aのみが存在する。あらたに、鉢が加わる。

鉢：環Aの相似形を基本とするが、口径18cm以上の大形のもの。片口になるもの、口縁部付近で内側に屈曲し内外面黒色処理されたもの、などバラエティがある。内面はミガキが施される。

須恵器

器種分類は、土師器と同様で、環Aのみが出土し、環Bは出土していない。

環A：ロクロ整形で、体部の立上りは直線的に開く。底部には糸切り痕を残す。

軟質須恵器

環A：須恵器環Aと形状は同じであるが、内面の調整があまく底部内面から体部に掛けての立ち上がりは緩やかで、焼成は軟質で黒斑が残る。

灰釉陶器

埴：ロクロ整形で、梯形の高台が付き、体部は内湾気味に立上がる。

皿：調整・形態などは？ 三日月高台はくずれ、梯形の高台が付く。

煮炊具

土師器

甕：2種類の刷毛目甕と篋削りが施された甕、篋ミガキが施される甕の4種類に分けた。

甕A1：外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目で調整された長胴甕で、口縁部は急角度で直線的に外反し、口唇部は面取り、あるいは面取りされたように角張るものが多い。底部は台状で木葉痕が残る。また、口縁部が肥厚するものがある。胎土には雲母が含まれ全体の粒子は粗く、暗赤褐色・暗茶褐色を呈する。いわゆる甲斐型甕に類似するもの。本跡の甕の主体をなす。

甕A2：調整は甕A1と同じで、外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目で調整された長胴甕。甕A1より器肉は薄手で、甕A1ほど口縁部の屈曲は強くない。胎土は暗黄褐色・暗褐色で、きめが細かい。

甕B：胴部外面は篋削りが施され、器肉は薄く仕上げられている。胎土は赤褐色・暗褐色を呈する。いわゆる武蔵甕である。

甕C：球形の胴部の甕で、胴部には篋削りの後、篋ミガキが施される。

小型甕：器高が20cm以下を小型甕とする。分類の視点は甕と同じである。小型甕Cはみつかつていない。小型甕A1には底部が台状に張出すタイプと、張出さずに底部から直線的に立ち上がるタイプがある。

小型甕A1：調整・胎土が甕Aに共通する。

小型甕A2：調整・胎土が甕A2に共通する。

小型甕B：調整・胎土が甕Bに共通する。

小型甕D：口クロ整形の小型甕で、胴部に明瞭な水平方向のカキ目を残す。底部には糸切り痕が残る。

貯蔵具

須恵器

長頸壺：高台が付く胴部が球形の壺。本跡から出土した個体は、いずれも口縁部・頸部を欠く。

凸帯付四耳壺：平底で肩部に凸帯が廻り、耳状の突起を持つもの。

(3) 遺構出土の土器

2号竪穴住居跡 (SB02) (第42図、PL10)

環Aが6点出土し、1～3は内黒、6は須恵器、4は軟質須恵器である。灰釉陶器の高台のある底部片が2点出土し、5は小振りな碗、15はやや大型の碗とみられる。土師器の甕は5点出土している。8は甕A1、9・12は甕A2、11は小型甕Dである。12は底部のみであるが、胎土が甕A1に比べきめが細かいことから甕A2とした。13は外面にタタキ目を残す須恵器の甕片である。10の甕、14の高環は混入品である。

4号竪穴住居跡 (SB04) (第43,44図)

環Aは5点出土している。そのうち、1～3は須恵器、4・5は内黒である。5はやや大型の杯であるが口縁部が欠落するため、大きさは不明であるが、底径と器肉の薄さから大型の鉢とは考えられず環Aとした。土師器の甕は5点出土している。6・11は甕A1、8・9は小型甕Dである。10は胴部外面にナデによる刷毛目が見られないものの、口縁部の内外面に横方向の刷毛目を残し、胎土が小型甕Dに似ることから、小型甕Dの範疇に入るものと考えられる。ただし、本例1点だけであるため分類していない。須恵器では7の甕の口縁部と長頸壺の胴部が出土している。

6号竪穴住居跡 (SB06) (第44,45,46図、PL10)

杯Aは6点出土している。そのうち、1・2・4～6は内黒、3は須恵器である。8は内黒の塊。7は土師器の皿である。4・5・6・の内黒杯Aと8の内黒塊の体部外面には墨書が記されている。土師器の甕は10点出土している。9～11・16～18は甕A1である。16は他の甕A1に比べて口縁断面の形が丸みを帯びているが、胎土が甕A1の特色を備えていることから甕A1ととらえた。12・13・15は小型甕Dである。12の外周調整は横方向の刷毛目の後、ナデが施されている。14は小型甕Bである。

7号竪穴住居跡 (SB07) (第46.47図、PL11)

杯Aは7点出土している。そのうち、1・2は内黒、3～7は須恵器である。土師器の甕は6点出土している。8・10は甕A1である。10の口唇先端部には1条の沈線状の窪みが廻っている。本例はこの1点のみである。9・11は甕A2である。12は甕B、13は小型甕Bで両者とも口縁部の断面形が「コ」の字状を呈し始めている時期のものである。須恵器では14の長頸壺、15の四耳壺の胴部が出土している。

11号竪穴住居跡 (SB11) (第48図、PL12)

杯Aは、1の土師器1点である。土師器の甕は3点で、2・4は甕A1である。3は小型甕A1で、底部が台状に張出す形状を示し、底面に木葉痕を明瞭に残している。

12号竪穴住居跡 (SB12) (第48図、PL12)

杯Aは、1の内黒1点である。体部外面には墨書が記されている。土師器の甕は2の1点で、甕A1の底部である。外面の刷毛目は弱いが、胎土から甕A1に分類した。

13号竪穴住居跡 (SB13) (第49図、PL12)

杯Aは10点出土している。そのうち、1・2・5・10は土師器で、3・4・6～9は内黒である。土師器の甕は4点である。11・12は甕A1である。この2個体は、甕A1の中でも口縁部が短く、肥厚している。11の口唇先端部は面取りにより断面形は角張り、12では折り返された口縁部が頸部にナデ付けられ、沈線状の窪みが頸部に廻っている。13は甕Cで、やや丸みを持った胴部には削り後に縦方向のミガキが施されている。14は小型甕Dである。須恵器では15の長頸壺が1点出土している。

15号竪穴住居跡 (SB15) (第50図、PL13)

土師器の甕は、1の甕Bが1点出土している。

16号竪穴住居跡 (SB16) (第51.52図、PL13.14)

杯Aは9点出土している。4は土師器で、7・9～13・16・18は内黒である。12は口径が10.8cmと小振りである。それに対して16・18は口径が15cmを超えるやや大きめのものである。1・2・5・6は杯Cで、甲斐型杯の特徴の一つである明瞭な放射状の暗文が施されている。3・8は皿Cで、杯Cと同じ甲斐地方由来の皿である。14・15は内黒の皿である。17は内黒の塊である。19～22は鉢で、19・21は口径20cmを越える大型のものであるが、底部を欠くため器高・底部の形状は不明である。両者とも内外面黒色処理され、ミガキが内外面丁寧に施されている。20・22は内黒で、糸切りされた底部からほぼ直線的に立ち上がる形状である。土師器の甕は3点が出土している。23は甕B、24は甕A2、25は小型甕Bである。23・25の口縁部にみられる「コ」の字状は明瞭になりつつある。

17号竪穴住居跡 (SB17) (第51.52図、PL15)

杯Aは内黒の2・4の2点、皿は内黒の1が1点出土している。3は塊の底部片である。土師器の甕は、点出土している。5・7・8は甕A1である。7の底部には木葉痕が残されている。

18号竪穴住居跡 (SB18) (第53図、PL14.15)

杯Aは10点出土している。そのうち、11以外の1～6・8～10は内黒がしめている。11は杯Cである。7は皿で高台部を欠いている。土師器の甕は4点出土している。12・14は甕A1である。12の口縁部は短く、肥厚している。13は小型甕A2、14は小型甕A2である。須恵器では17の長頸壺の底部片がある。

また、灰軸陶器では16の長頸壺胴部が出土している。

23号竪穴住居跡 (SB23) (第57図)

1・2の環Cが2点出土している。土師器の甕は3・4の2点出土し、甕A1である。4は胴断片であり、口縁部・底部の形態や調整が不明であるが、胎土中に雲母の混入が顕著なことから甕A1と判断した。

24号竪穴住居跡 (SB24) (第57図、PL15)

環Aは8点出土している。1は土師器で、2～8は内黒である。7は、口径16.6cmに対し、器高が7.3cmで、外傾指数₀は58.9、径高指数₀43.9と口径に対して深さがある個体である。9・10は塊で、体部は底部から直線的に立上っている。土師器の甕は、2点が出土している。11・12は甕Dである。12は胴部外面に横方向の刷毛目が施されていないものの、胴部下位のため刷毛目がナデ消されたと考えられること、胎土や内面のロクロ整形の状況が甕Dと同じであることから、甕Dに含めた。

25号竪穴住居跡 (SB25) (第58図)

環Aは2点出土している。2は土師器で、1は内黒である。1の口径は10.0cmと小振りな個体である。塊は3点出土している。3・4は内黒で、3は高台部は欠いているが内湾しながら立上がるものと考えられる。5は灰軸陶器の高台部である。土師器の甕は、7の甕A2が1点出土している。

26号竪穴住居跡 (SB26) (第58図)

環Aは1～3で内黒の3点が出土している。2・3は口径が17cmを超える大型の環である。

27号竪穴住居跡 (SB27) (第58図)

土師器の甕は、1の甕A1が1点出土している。

39号竪穴住居跡 (SB39) (第65図、PL18)

環Aは4点出土している。1～4は内黒である。5は皿である。

須恵器では、6の甕底部片が出土している。

(4) 時期の概観

以上、住居跡出土資料を、小平・笹沢両氏の成果を参考に分類した。

平安時代の資料については、短期間に限定できる土器のように個々の資料で時期が特定できる場合、組成比などによって時期の概要をつかむ方法がある。今回は、軟質須恵器や灰軸碗、須恵器環Aの存在や消滅、更に甕の口縁部形態など変化から判断した。なお、遺構の重複関係もみられたが、出土土器に差がほとんど認められず、同時期としてあつかった。

各竪穴住居跡出土遺物を比較すると、1段階では、軟質須恵器環Aの出現、灰軸碗・須恵器環Aの消滅などであり、2段階では、施軸陶器模倣の土師器皿の出現や土師環A・内黒環Aの増加により主体的なるのこなどを根拠に、大きく2段階にわたる可能性が強い。

1段階の竪穴住居跡は、2号・4号・7号・13号竪穴住居跡があげられる

供膳具では土師器・黒色土器(内黒)・須恵器の環Aがある。また、このほかに軟質須恵器の環A、灰軸陶器の塊が小片ではあるが認められる。短期間存在した軟質須恵器が特徴といえる。煮炊具では、土師器の甕A1・甕A2・甕B・甕Cと小型甕A2・小型甕B・小型甕Dがある。甕Cの存在や甕Bの口縁部形態が弱い「コ」の字になりつつある。貯蔵具では、須恵器の長頸壺、四耳壺が出土している。13号竪穴住居跡では、須恵器がみられず内黒の環Aと土師器の環Aがほぼ半数出土している点で、やや新しい傾向を示している。

2段階の竪穴住居跡は、6号・16号・17号・18号・24号・25号・39号竪穴住居跡があげられる。

供膳具では須恵器の環Aは消滅し、土師器の環A、内黒の環Aが主体となり、土師器環Aは口径が大き

なものが見られるようになる。また、土師器のCがみられる。新たに土師器・内黒の埴や施軸陶器模倣の土師器・内黒の皿が出現する。鉢は出土数が少ないが、やや大型のものがみられる。煮炊具では甕A1・甕A2・甕B・甕Cと小型甕A2・小型甕B・小型甕Dがあり、新たに小型甕A1が加わる。甕A1の口縁部の折返し部分は短くなるものが混ざり、甕Bの口縁部形態の「コ」の字状の屈曲は明瞭となる。貯蔵具はいつでも全貌がわかる個体ではないが、灰軸陶器の長頸壺や1段階でもみられた須恵器の四耳壺がある。

小平氏の分類によると、1段階は9世紀半ば～後半の6・7段階、2段階は9世紀末～10世紀初頭の8・9段階に相当するものと考えられる。

$$\text{※外傾指数} = \frac{(\text{口径} - \text{底径})}{2} \div \text{器高} \times 100, \quad \text{径高指数} = \text{器高} / \text{口径} \times 100$$

4 平安時代の石器

竪穴住居跡から4点出土している。1点は石製模造品で、3点は石皿である。

石製模造品 (第83図、PL22)

103の1点出土している。石材は滑石片岩である。表裏面に擦痕が残るが両側縁部は剝離が著しい。基部と中層部に2基の穿孔が施されている。

石皿・台石 (第83図、PL25)

台石は98・100で、石皿は99である。台石は平面形・断面形が長方形で、石皿は欠損しているが平面形と断面形が楕円であることから区分した。また、機能面の違いが認められた。台石は而全体を機能面として使うのに対して、石皿は楕円の縁辺部は使用せず、中央部を機能面としていることである。石材は98が砂岩、99・100が安山岩である。

第5節 中世の遺物

1 中世の焼物

(1) 概要

遺物量は、竪穴状遺構1基と土坑から出土したもので、プラスチックケース2箱のみであった。遺物の種類は内耳土器がほとんどで、他は図示不可能な小破片のみである。

時期は出土した内耳土器から16世紀後半と考えられるが、数が少ないため、分類はおこなわず遺構ごとに個別に列挙する。

(2) 遺構出土の焼物

3号竪穴状住居跡 (SB03) (第43図、PL10)

1は底部からやや外傾しながら立ち上がっている。口縁部の屈曲は強く、口唇部は面取りされている。2は口縁部の屈曲の内面に耳を施している。頸部はくの字に屈曲した後、直立する。3は内弯気味に立ち上がる口縁部で、内面には調整時の窪みが見られる。4・5は垂直気味に立ち上がる底部片である。

4号土坑 (SK04) (第68図、PL20)

1・2は底部片であるが、1はやや外傾気味に立ち上がるのに対して、2は内弯気味に立ち上がっている。

る。3は内耳を欠くが口縁部で屈曲し、口唇部にかけて内湾する。口唇部は面取りされている。4の内耳部分の口縁部屈曲は緩やかで、口唇部は幅が狭いが面取りされている。

2 古墳時代後期～中世の金属製品

(1) 金属製品 (第83図、PL20)

金属製品は11点出土した。4点を掲載し、他は腐食により形状が不明であった。1は、古墳時代後期の33号土坑から、4は平安時代の2号竪穴住居跡から出土し、他2点は中世の3号竪穴状遺構から出土している。

1は刀子で、茎の部分に木質部が付着している。木質部が鞘の可能性も考えられる。2も刀子で、先端部と茎部位付近を欠いている。3は不明金属製品である。鉄の板を薄い銅版で覆っている。4は釘と考えられる。断面は方形を呈している。

(2) 銭貨 (第83図、PL20)

9点出土し、8点掲載した。5～11は銭文の判読が可能で、渡来銭であった。12は判読できはなかった。未掲載の銭貨は欠損し、計測や銭文の判読は不明である。5はグリッドから、6～8は3号竪穴住居跡、9～12は3号土坑から出土している。

5は朝鮮通貨である。銭文の書体は楷書で、銭種は朝鮮銭である。6は元豊通貨である。銭文の書体は篆書で、銭種は北宋銭である。7は熙寧元寶である。銭文の書体は真書で、銭種は北宋銭である。8は元豊通貨である。銭文の書体は篆書で、銭種は北宋銭である。9は淳化元豊である。銭文の書体は真書で、銭種は北宋銭である。10は元祐通貨である。銭文の書体は行書である。11は皇宋通貨である。銭文の書体は真書で、銭種は北宋銭である。12は判読不能である。

図版番号	No	品名	材質	実測番号	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
1	11	刀子	鉄	13	SK33 覆土	5.2	1.3	1.0	4.4	
2	9	刀子	鉄	10	S803 No8	11.3	1.1	0.6	13.2	
3	12	銅製品	銅	18	S803 No12	5.8	1.4	0.6	12.1	
4	10	釘	鉄	12	S802 覆土	5.1	0.4	0.3	3.6	

図版番号	No	品名	材質	実測番号	出土位置	最大長 (外径 cm)	最大長 (内径 cm)	最大厚 (mm)	重さ (g)	備考
5	1	古銭	銅	1	3区O-8グリッド	2.35	1.95	1.6	3.4	朝鮮通貨
6	2	古銭	銅	2	S803 No26	2.40	1.73	1.2	1.6	元豊通貨
7	3	古銭	銅	3	S803 No27	※ 2.44	※ 2.00	1.2	3.2	熙寧元寶
8	4	古銭	銅	4	S803 No28	※ 2.45	※ 1.96	1.0	2.0	元豊通貨
9	5	古銭	銅	5	SK03 鉄1	2.46	1.80	1.0	2.0	淳化元豊
10	6	古銭	銅	6	SK03 鉄2	2.41	1.98	1.0	2.1	元祐通貨
11	7	古銭	銅	7	SK03 鉄3	2.40	1.90	0.9	1.7	皇宋通貨
12	8	古銭	銅	8	SK03 鉄4	2.31	1.90	1.0	2.3	不明

古銭の※は、履輪の計測値、他は横輪

第6表 金属製品・銭貨一覧表

第5章 科学分析

第1節 科学分析の目的

今回、科学分析を委託した項目は、以下の通りである。

① ^{14}C 年代測定	縄文時代前期前葉	実年代推定の把握、データ蓄積
②炭化種実同定	縄文から平安時代	植生復元と利用植物などの傾向を把握
③炭化樹種同定	縄文から平安時代	植生復元と利用材の傾向を把握
④黒曜石の産地同定	縄文時代前期前葉	原産地の傾向を把握、データ蓄積
⑤土坑内土壌のリン酸・カルシウム分析	平安時代	墓か否か、土坑の性格を把握

実年代を把握することは、列島史、あるいは世界史の中での位置づけを知る上で重要である。しかし、縄文時代に関しては、これまで実年代を推定する材料に乏しかった。 ^{14}C 値による年代測定は、AMSの導入により精度が飛躍的に高まってきた。近年、これを利用して縄文時代の年代観の見直すために資料の蓄積が進められている。その中において、長野県地域の資料は不足気味であることは否めない。縄文時代前期前葉の中越式に関しては、当センターが調査した駒形遺跡で土器に付着した炭化物の年代測定をおこなっている（長野埋文センター2007）。今回は、本遺跡の年代値を推定するとともに、対比資料の蓄積も兼ねて分析を実施した。

各時代の生産活動を推定するには、出土した加工品の分析とともに、各時代の植生を復元することと、利用動・植物を明らかにする必要がある。ただし、低湿地遺跡と異なり、火山性土壌の遺跡では動・植物遺体の残存率はひじょうに低い。そのため、竪穴住居跡の C ・カマドなどの堆積土中に少量認められる炭化樹種と種実を極力採取（水洗篩別）し、同定を委託した。

複数の黒曜石原産地を東方に持つ本遺跡では、利用された黒曜石がどの原産地のものであるかを示すことが、当時の流通関係などを明らかにする上で重要である。今回、霧ヶ峰原産地群の直下にある駒形遺跡と同時代の試料を分析することができ、縄文時代前期前葉に最も利用された原産地の特定、あるいは流通ルートなどのデータを蓄積することができた。

土坑内土壌の蛍光X線によるリン酸・カルシウム分析は、墓の可能性が考えられるが、火山性土壌のため人骨が残存せず、性格を確定できない土坑に対して実施した。

本章では、それぞれの分析の概要を記し、詳細な報告については添付したCDに掲載した。

第2節 AMS放射性炭素 ^{14}C 年代測定

縄文時代前期前葉の中越式期の年代推定と、データの蓄積のため、竪穴住居跡から検出された炭化材を用いて、科学分析を委託し年代測定を行った。試料採取にあつたは、他の遺構と重複やカクランなどに

よる影響がないこと、試料の出土層位が確かなこと、まとまった試料が採取できることなどであった。そのため、採取できたのは次の5点にとどまった。30号竪穴住居跡からは、床面上出土の炭化材と、床面直上の層位から出土した炭化物。34号竪穴住居跡からは周溝内と床面から採取した炭化物を使った。

分析は(株)加速器分析研究所に委託した。詳細な報告は添付C Dに掲載してある。

その結果によると、30号竪穴住居跡では、IAAA-52323が $5,990 \pm 40\text{yrBP}$ 、IAAA-52324が $6,040 \pm 50\text{yrBP}$ の数値を得た。概ね6,000年前後という結果である。31号竪穴住居跡ではIAAA-52325が $5,950 \pm 50\text{yrBP}$ 、IAAA-52326が $5,850 \pm 50\text{yrBP}$ 、IAAA-52327が $5,930 \pm 50\text{yrBP}$ の数値を得た。100年の差が示されたが、概ね5,900年前後という結果になった。

測定結果には若干のバラツキが見られる。試料に起因する場合、住居内出土の炭化物であるため、住居使用時に伐採された材の場合と、住居周辺からの流れ込んだ炭化物の差。あるいは、伐採した材の外皮側と芯部分の差などが想定されよう。一方、測定誤差の範囲内とみることでもできよう。いずれの竪穴住居跡も中越式土器を主体とする遺構であり、縄文時代前期前葉のおおよその年代値が得られたと言えよう。ただし、同時期の土器に付着した炭化物を測定した胸形遺跡では、5,800年前後の年代値が示されており、今後、この差の原因がどこにあるのか、データを蓄積させる中で考えて行く必要がある。

第3節 炭化種実の同定分析

炭化種実分析の目的は、第一に当時の食料事情を推定することである。さらに、遺跡周辺の耕地・植生の傾向を推定する手がかりを得ることも可能となろう。遺構中に残る焼土、あるいは灰に混ざって被熱・炭化した動・植物の遺体が残ることが多い。また、焼土などの被熱を受けている試料を選別した場合、ネズミやモグラといった外部から動植物を地中に持ち込むバイアス行為の影響を受けにくい、といった観点から有効と考え、カマドや炉跡を主体に試料を採取した。実際の試料採取では、残存状況の良いカマドや炉跡の中から、さらに適正と判断した層位の土壌をサンプリングした。採取したサンプルは、室内で洗浄篩別を行った。選別された試料は、炭化物、動物骨、魚骨に分けて取り出し、サンプル瓶に保存し、分析委託業者へ同定を依頼した。

分析は(株)パレオ・ラボ(担当:新山雅広)に委託し、詳細な報告は添付C Dに掲載した。

分析の結果、縄文時代前期(SB30、SB34)では、ブドウ属(SB30)とマメ科(SB34)が認められた。いずれも、食用をはじめ、何らかの形で利用された可能性がある。弥生時代(SB29、SB32)からは、オオムギ(SB32)とタデ科(SB29)が出土した。前者は、食用であるとともに段丘上に立地する遺跡の耕地をすいていすの一助となろう。古墳時代(SB19)では、分析を実施したものの、炭化種実の確認できなかった。平安時代(SB06、SB16、SB18、SB25)では、イネがわずかながらも複数の住居跡(SB16、SB18、SB25)から出土し、マメ科も2つの住居跡(SB18、SB25)から出土している。縄文時代前期のマメ科とは異なる栽培ダイズの可能性が考えられるとされている。

炉・カマド内から出土する炭化種実類は、残存状況が悪く、量も少ない場合が多い。しかし、わずかながらでも、資料を蓄積した行くことが重要であろう。

第4節 炭化材の樹種同定分析

縄文時代～平安時代の木材利用と、遺跡周辺の植生復元を推定する手がかりとして、炭化材の同定分析を行った。試料の採取は、前項の炭化種実と同じ方法を用いた。ただし、選別は洗浄前に行い、洗浄後、サンプル瓶かプラスチック容器に保存し、分析委託業者へ同定を依頼した。

分析は(株)パレオ・ラボ(担当:植田弥生)に委託し、詳細な分析報告は添付C Dに掲載してある。

分析の結果、縄文時代前期前葉の住居跡(SB30・34)から出土した炭化材8点は、すべてクリであった。

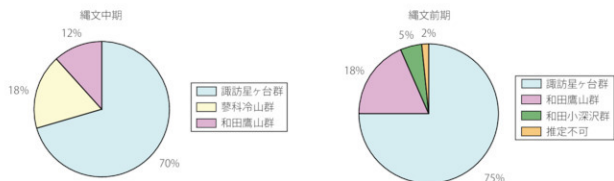
弥生時代の住居跡からは(SB29・32)ほかから出土した7点からは、コナラ節(4点)・クリ(1点)・カエデ属(1点)と、クリの炭化子葉と思われる破片(1点)が検出された。古墳時代の住居跡(SB19)のカマドから出土した4点は、すべてニレ属であった。平安時代の住居跡(SB06・16・18・25)の火床やカマドから出土した16点からは、クリ(9点)・バラ属?(2点)・サクラ属?(2点)・ウコギ属(1点)・トネリコ属(1点)・スギ(1点)、合計6分類群が検出された。

クリは縄文時代前期・弥生・平安の各時期から検出され、全体の半数弱を占め、多く利用されていたことが判った。特に縄文時代前期の試料はすべてクリであり、広く知られている縄文時代の植物利用傾向を強く反映していた。弥生時代はコナラ節が多く、平安時代では再びクリが多くみられるが、針葉樹のスギ、落葉広葉樹のバラ属?・サクラ属?・ウコギ属・トネリコ属が検出され、樹種利用の多様化が見られた。

第5節 黒曜石産地同定分析

遺跡から出土した黒曜石の総数は1,454点にのぼる。この黒曜石の産地を推定することを目的に、前期前葉の遺構から出土したものの60点、縄文時代中期後半の遺構から出土したものの17点の合計77点を抽出した。分析は、蛍光X線分析とし、国立沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に委託した。詳細な分析結果報告は添付C Dに掲載した。

分析の結果、前期前葉では諏訪星ヶ台群が45点、和田鷹山群が11点、和田小深沢群が3点、推定不可が1点となった。縄文時代中期後半では12点が諏訪星ヶ台群、3点が蓼科冷山群、2点が和田鷹山群。



第7表 黒曜石産地別グラフ

2 時期とも諏訪星ヶ台産が多く、中期で 70%、前期は 75% を占めている。しかし、2 番目に多いのは中期では蓼科冷山群の 18% で 3 番目が和田鷹山群の 12% となるが、前期では和田エリヤ (WD) の鷹山群と小深沢群の合わせて 23% で、冷山群はみられなかった。

同じ茅野市の前期前葉の遺跡として、本遺跡より上川上流に位置し、黒曜石原産地に近い駒形遺跡 (長野県埋文センター 2007) がある。諏訪星ヶ台群の比率は 74.46%、和田エリヤ (WD) の鷹山群と小深沢群は 14.98%、蓼科冷山群は 3.35% という結果が出ている。

縄文時代中期と前期における、冷山群の有無の差はどこにあるのかこれからの検討が必要であるが、駒形遺跡では前期初頭～前期前葉の時期に冷山産が 3.35% であったことからすると、本遺跡でも認められる可能性がある。しかし、検出されなかったのは中期の試料の少なさに起因する可能性は高いといえる。前期前葉の駒形遺跡とは諏訪星ヶ台群の比率はほぼ同じであるが、和田群の比率の差は試料数の少なさだけではないと考えられる。原産地に近い駒形遺跡の比率、今回の同定の結果得られた比率の違いは単なる数量の問題か、原産地との距離の違いか、更なる類例の増加によって判明してくると考えられる。

第6節 リン酸・カルシウム分析

1 区で検出された古代、古墳時代後期の土坑が検出され、その形状や規模から墓坑の可能性が考えられたため、骨の代表的な成分であるリン酸・カルシウム分析を委託した。土壌採取にあたっては、1 号土坑は遺構内覆土は遺構の中心部で縦位に 6ヶ所採取し、リン酸・カルシウムの浸透を考慮して同じ地点のさらに下、底部を掘下げた黄褐色の地山の土壌を 3ヶ所、遺構周囲の土壌も遺構から東と西へ 50cm 離れた地点でそれぞれ 3ヶ所採取した。33 号土坑は覆土内に礫が充填されていたため、遺構中心部で縦位に 2ヶ所採取した。

分析は蛍光 X 線分析とし、(株)パレオ・ラボ (担当: 藤根久) に委託した。詳細な分析結果報告は添付 CD に掲載した。

分析の結果、1 号土坑では、土坑内土壌より土坑周囲・底部下の地山にリン酸およびカルシウムの含有量が高く、覆土内では下位の土壌より上位の含有率の方が高いという結果となった。33 号土坑は、1 号土坑よりさらに低い値を示した。1 号土坑は、遺物はないものの規模や形状から墓坑の可能性を考えていた。しかし、分析の結果は墓坑の可能性が低い数値であった。一方、33 号土坑は規模や形状に加え、土坑内に礫が人為的に配置され、滑石製の石製模造品がしており、墓坑の可能性は 1 号以上に強いと捉えていた。しかし、こちらも、リン酸カルシウムの数値では否定的な結果となった。今後、他遺跡の類例など比較資料をもとに、33 号土坑のような遺構の性格をさらに詰めていくことが課題であろう。

第6章 総括

遺跡の立地環境と地理的な位置について 構井・阿弥陀堂遺跡は茅野市の中心市街地付近に位置しており、すでにさまざまな開発がおよんでいた。そのため、遺跡の全貌や旧地形などを把握しづらい状況にあった。こうした中、当初、構井遺跡と阿弥陀堂遺跡の2遺跡として調査が開始され、その後、茅野市教育委員会の5次にわたる調査（茅野市教育委員会 1983、1990から1992、1994）の結果、同一遺跡と考えられるようになった。

今回の発掘調査は、県道大年線建設に伴って実施された。そのため、調査区は道路幅の17～13m、延長約280mの範囲に限定された。しかし、遺跡の実態が不明確な構井・阿弥陀堂遺跡において、北西～南東方向にトレンチを設定するような形となり、一定の成果を得ることができた。

その一つに、旧地形と遺構の関係がある。調査地区は、永明寺山南麓の末端部であると同時に、上川の河岸段丘上にあたる。そのため、本来、複雑な起伏が存在していたとみられる。しかし、宅地と耕地の広がる現地表面はほぼ平坦に見えていた。調査の結果、南東側の35号竪穴住居跡周辺の検出面が概ね785mと一番高く、北西側の21号竪穴住居跡周辺の検出面で約782mである。旧地形では、約3mの高低差があることが判明した。

一方、遺構検出面では、礫混じりの黄褐色土と、きめの細かい黒色土が平面的に交互に現れた。地層の形成された年代は不明であるが、礫混じりの黄褐色は永明寺山麓から尾根状に延びる基盤層で、黒色土はその凹地に堆積したものとみられる。このように、縄文前期以前には、調査区を南北方向に横断する高まりが、永明寺山麓から上川に向かって幾筋も延びていたことが推測される。そして、凹地がある程度埋没した後の縄文前期前葉や弥生時代後期においても、これらの微地形が住居の立地に影響を与えていることが判明した。

もう一点、この地区の特性に、交通の要所にあたる点をあげておく必要がある。現在の調査地区は、山梨方面と諏訪・松本方面を結ぶ国道20号線（甲州街道）とJR中央線に挟まれた場所に位置している。さらに、伊那方面に至る杖突街道、佐久・上田方面に至るメルヘン街道が交差する地区にもあたっている。周辺地域との交流関係については、縄文時代前期以降の各時代の出土遺物にもみることができた。

今回の調査では、縄文時代前期前葉・中期後半、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代、中世と約4,500年におよぶ長期間の人々の生活痕跡を調査し、様々な資料を得た。以下、時代を追って、成果と課題をあげ発掘調査の総括とする。

縄文時代前期前葉の集落跡と出土遺物について これまで、永明寺山南麓における縄文時代前期前葉の調査状況は、山裾の遺跡などで土器破片が採取だけにとどまっていた。よって、今回発掘された7軒の竪穴住居跡は、この地区では初めての成果となる。

住居跡は、A・Bの大きく2グループに分かれて検出された。Aグループは、東側の標高の高い地点に5軒が集中する。Bグループは、西端部に位置する2軒である。いずれも遺構分布は、調査区外に展開しているとみられ、集落の全貌は不明である。

出土土器の時期をみると、31号竪穴住居跡の土器に古い傾向を示す土器が含まれているものの、全体的には大きな時期差はない。そのため、現状では2グループが同時併存していた可能性が考えられる。今後の周辺地域の調査によって、この2グループが同一集落を形成するのか、隣接する2集落であるのか、などの点については今後の課題となる。

出土した土器は、在地の中越式を主体とし、東海地方の木島式土器・関東地方の関山式に比定される土器が客体的に認められた。30号住居跡以外では、木島式土器に比定したⅡ群B類が出土しており、在地土器との伴出関係や交流関係を知る良好な資料である。

石器に関しては、黒曜石77点を対象に蛍光X線による原産地分析を実施した。その結果、諏訪星ヶ台群産が75%、和田エリヤ（鷹山群・小深沢）が23%、推定不可が2%の比率であった。同時代の資料と比較すると、本遺跡から7kmほど離れ、霧ヶ峰の原産地遺跡群の直下に位置する駒形遺跡とほぼ同じ比率であることがわかった。駒形遺跡の黒曜石同定分析数が8,195点に対し、構井・阿弥陀堂遺跡が77点という開きはあるものの、星ヶ台群産が7割を超える比率は共通しており、当時の黒曜石の流通についてあるていどの傾向をとらえることは可能であろう。

中期後葉の集落跡について 茅野市教育委員会によるV次の調査では、中期後半の竪穴住居跡11軒が発見されている。その遺構分布は、1次調査区の北東部（第6図）を中心に、標高786～787mに集中している。上川の河岸段丘縁辺部からは、永明寺山麓側へ300mほど入った地点である。V次調査では、土坑群（第6図）が発見されており、この付近が集落の中心であった可能性が高い。

これに対し、段丘崖により近い今回の調査区では、3区北西端部・1区北東部の計2軒（第6図）だけが確認された。前述の住居跡群からは、直線距離で約150m離れており、同一集落であるかは不明である。検出された軒数もわずかであることから、前述の集落か別集落に属するとしても、集落の縁辺部に位置づけられよう。

弥生時代後期の集落跡について 弥生時代後期の竪穴住居跡は5軒検出された。縄文時代前期前葉と同じようにAとB2つの分布域が認められる。Aグループは縄文前期前葉のAグループと同じ立地で、東側の標高の高い小尾根上の高まりに竪穴住居跡3軒と2条の溝状遺構が集中している。溝状遺構は方形周溝墓の可能性が高く、茅野市内では2例目となる。一方、Bグループは、3区のやや東寄りで1軒のみ検出された。いずれも調査区外に遺構は広がるものと推測される。また、狭い調査区であったため、周溝墓などの墓域と居住域の関係は判然としなかった。

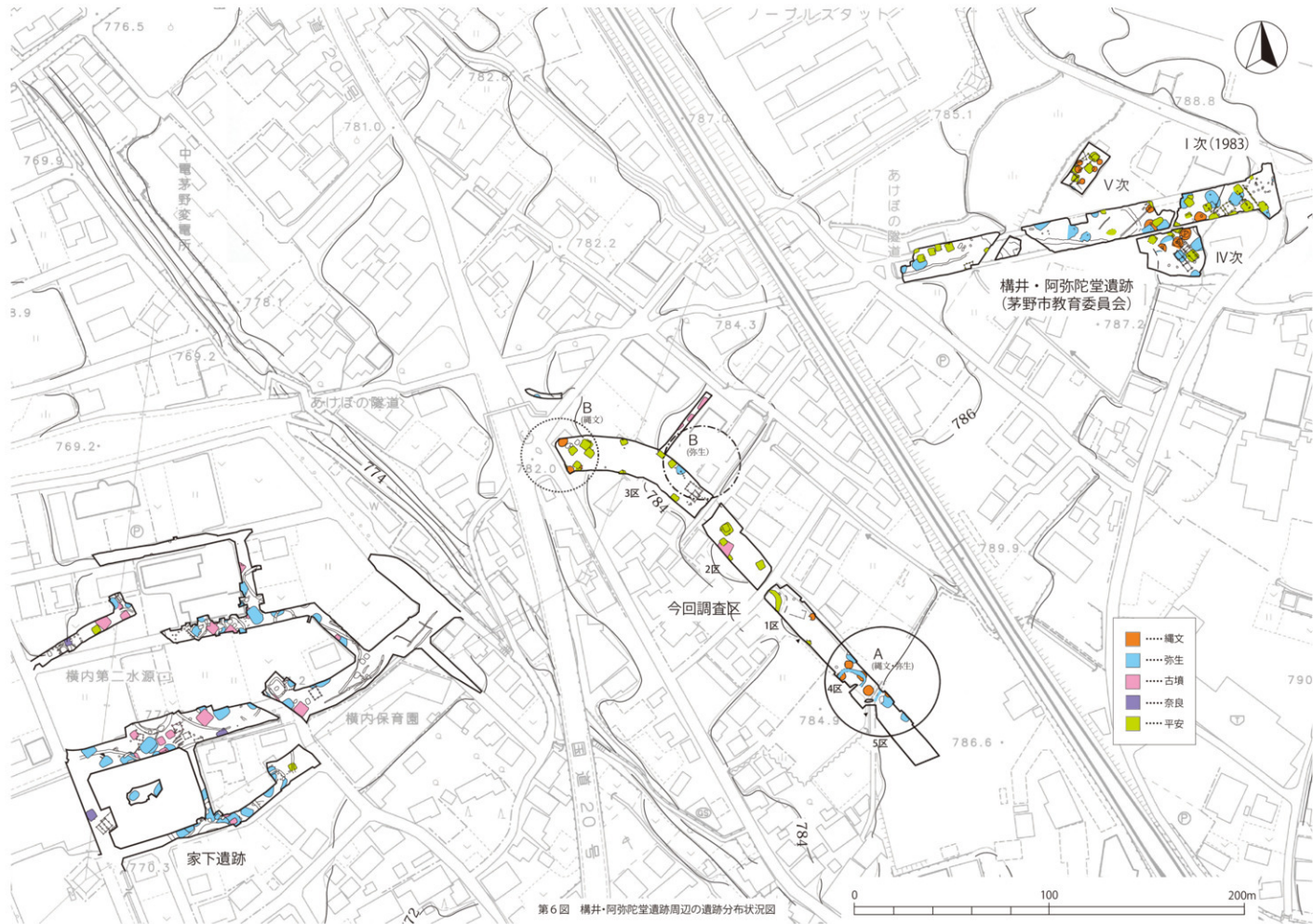
微地形の状況からすると、Aグループの立地する高まりが南北に伸びており、住居群は小尾根上を南北方向に展開していく可能性が高い。小尾根上の標高の高い北側には、茅野市教委が調査した構井・阿弥陀堂遺跡が位置し、弥生時代後期の住居跡が20軒見つかった。弥生時代の集落構成についても、今後の課題となる点が多い。

竪穴住居跡は、伴出した土器から後期中葉の2時期に分けられる可能性がある。古段階は29・33号竪穴住居跡・5号溝跡（第6図）で、新段階は32・37号竪穴住居跡（第6図）である。4号溝跡（方形周溝墓）の時期は、後期という以外、細別できる資料が出土しなかった。この他、遺構外からの出土であるが、石包丁片が見つかったことは、この地における稲作を裏付ける資料の一つとなろう。

ここで、周辺地区を含めて比較的資料がまとまっている弥生時代遺跡の分布と土地利用についてみておこう。茅野市内の弥生時代の遺跡は希少で、特に北東部の山浦地区では極端に少なく、単発的・一時的に営まれた小規模な遺跡が多い。それに反して、永明寺山の南麓では弥生時代の遺物が採取されることなどから、集落が存在する可能性が指摘されていた。昭和57（1982）年の構井・阿弥陀堂遺跡の調査（茅野市教委1983）では、それを裏付けるように13軒の弥生時代の竪穴住居跡を検出された。

さらに、平成7・8年（1995・1996）には、今回の調査区の西側にあたる段丘崖下、上川の低地にある家下遺跡が調査された。ここでは、弥生時代中・後期の集落跡が検出された。茅野市内の他遺跡では見られないほどの遺物量も出土し、諏訪盆地に面した低地の弥生集落が目されるようになった。

家下遺跡では、段丘上で検出されなかった弥生時代中期の竪穴住居跡が7軒検出された。低地での弥生



第6図 構井・阿弥陀堂遺跡周辺の遺跡分布状況図

時代中期の集落跡の発見はもちろん初めてであった。遺跡周辺には水田耕作が可能な低地が広がっており、可耕地に最も近い微高地上を居住地に選んだ可能性が高い。さらに、後期になると調査区内の遺構数は5倍の35軒に増加し、遺構の分布は段丘の崖際を除いたほぼ全域に広がる。農業生産活動が安定したものと考えられる。

一方、後期の同じ時期に、隣接する段丘上の構井・阿弥陀堂遺跡では25軒の住居跡がみつまっている。低地に隣接する家下遺跡と、段丘上の構井・阿弥陀堂遺跡はどのような関係にあったのであろうか。生活・経済基盤が異なっていたのか、あるいは可耕地の開墾・水路の確保などで共同体制にあったのかなど、今後の課題といえよう。

古墳時代後期の集落跡 永明寺山南麓には古墳時代後期に比定される多くの古墳群が知られている。しかし、これまでその古墳数に対応する集落跡の発見はほとんどなく、竪穴住居跡がみつかったのも構井・阿弥陀堂遺跡(茅野市教委1983)のわずか1軒であった。今回、6軒もの住居跡が発見されたことは、永明寺山南麓の古墳時代後期集落を解明する上で、第1歩になる成果であったと言える。

まとまった土器を出土した竪穴住居跡は1軒で、6世紀後半の良好な資料となった。また、6軒の竪穴住居跡のうち2軒については一辺7mを超える大型の竪穴住居跡であった。今後、周辺地区の調査が進む中で、大型住居の性格も解明されていくであろう。

竪穴住居の分布は3区北東部と2区にあり、縄文時代や弥生時代の遺構が集中する地点とは異なってくる。3区東端部には掘立柱建物跡が2棟検出されている。遺構の広がりは、6世紀後半～7世紀という時間幅にも係わらず、3区・2区という限られた範囲の検出に留まった。南北方向、あるいは等高線に沿って、調査区外に集落は広がるものと考えられる。

平安時代の集落跡について 18軒の竪穴住居跡が検出された。出土した土器から9世紀中葉から10世紀初頭に営まれた2時期のムラの跡であることが判明した。

竪穴住居跡は、1区から西側に分布している。この分布域は、時期別に2つのグループ、AとBに分けることができる。AグループはI段階で、3区の東半分と2区に主に分布し、BグループはII段階で、3区の西側に分布する。

時期不明の住居跡もあるが、概ね平安時代(古墳時代後期も含めて古代か)の住居分布は、段丘上でもやや低い地点にあり、小高い箇所集中した縄文時代前期前葉や弥生時代後期とは大きく異なっている。また、2つのグループは明らかに時期がずれており、移動の可能性もある。調査区は狭いため、集落全体の動態が不明であるため、今後の課題としておきたい。

今回の調査では、甲斐型の土器が比較的多く出土した。特に、9世紀以降の口縁部が底部径より大きく開く環や高台を持たない篋削りの甲斐型の皿が出土した。16号竪穴住居跡では出土した環のほぼ半数が甲斐型環であり、客体的とは言えない量にのぼっている。これまで、茅野市周辺で甲斐型環が9世紀以降出土することは稀であった。今回の発見で9世紀半ば以降も8世紀代同様、甲斐とのつながりが推測される。

さらに、甕についても在地の甕に混ざって、甲斐型甕などが出土している。甲斐型甕は甲斐地域で主体的に出土し、甲斐の特定の場所で集中的に製作(製作場所は未特定)され、流通していたと考えられている(保坂康夫1989)。その観点に立てば、茅野市周辺から出土する甲斐型甕は甲斐から運ばれてきたことになる。一方、甲斐型甕のほか、在地甕といわれてきた甕がある。これらの中には、甲斐型甕と調整・器形が類似する例もみられる。胎土や胴部の張り具合に相違点を感じられるため、甲斐型甕とはしがたいが、中信地域の甕とは胎土・器肉の厚さなどの点で明らかに違う特徴を持っている。こうした点から、当地方特有の甕そのものも、甲斐地域との影響関係が深い傾向がうかがえる。この他、武蔵型甕が出土している。これらは北武蔵から北関東・東信地域で主体的に出土する甕で、茅野市周辺では9世紀初めごろか

ら散見されるようになる。

このように、土器からみると平安時代においては、各地の土器が流通する中で、特に甲斐地域との交流関係が盛んであったことがうかがえる。

周辺地区との関係を見ると、この時期、茅野市教委の調査した構井・阿弥陀堂遺跡では、36軒の竪穴住居跡が発見されており、8世紀末から12世紀までほぼ永続的に存続する。一方、今回の調査区では、9世紀半ば～10世紀前半と限られた時期の18軒が見つかっている。また、前者の地点では、八鏡鏡や鉄鏡がみられるなど、有力者層の存在が推定される。こうした点から、構井・阿弥陀堂遺跡の古代集落の中心地は、茅野市教委の調査した標高788m付近の永明寺山寄りにあり、その後、段丘崖に近い今回の調査区にも集落が展開していった可能性が想定される。

また、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて、集落が展開していた家下遺跡では奈良時代以降、遺構数が激減する。低地部の土地利用に変化が生じた可能性もあろう。

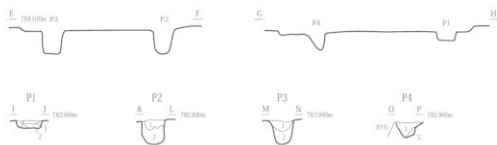
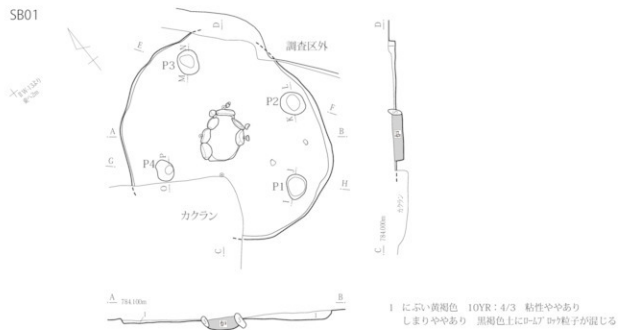
中世の竪穴建物跡 中世では1軒の竪穴状遺構を検出した。位置は3区の西端で、この遺構より東での分布は確認されていない。出土した内耳土器から16世紀中葉、上原城下町が発展した16世紀以降(柳川英司2005)の所産である。しかし、上原城下町の範囲が現在確定されておらず、上原城下町の一角であったかどうかは、今後の課題である。

おわりに 以上、今回の発掘調査によって、この場所が縄文時代～中世に断続的に集落に利用されてきたことが判明した。道路幅という狭い調査区であったため、集落の全貌や土地利用の変遷過程を明らかにするには、今後、周辺地区での調査が期待される。

参考文献

- | | | |
|--------------|--|---|
| 鶴岡幸雄 | 1986 『茅野市史 上巻』第3章 | 茅野市教育委員会 |
| 岡谷市教育委員会 | 1987 『横奈遺跡』 | |
| 功刀 司 | 1994 『阿弥陀堂遺跡Ⅴ』 | 茅野市教育委員会 |
| 小池岳史 | 1995 『家下遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| 小池岳史 | 1996 『家下遺跡Ⅱ』 | 茅野市教育委員会 |
| 小平和夫 | 1990 『総論編』 | 長野県埋蔵文化財センター |
| 小林深志 | 1993 『阿弥陀堂遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| 笹沢 浩 | 1976 「奈良・平安時代の土器について」 | 『長野県中央自動車道長野緑埋蔵文化財発掘調査報告書』
長野県教育委員会 |
| 渋谷昌彦 | 1991 「中越式土器の研究—中越遺跡、阿久道「縄文時代2」跡出土土器を中心として—」 | 縄文時代文化研究会 |
| 茅野市教育委員会 | 1986 『茅野市史 上巻』 | |
| 茅野市教育委員会 | 2005 『上原城下町遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| 茅野市教育委員会 | 2000 『茅野市遺跡台帳』 | 茅野市教育委員会 |
| 茅野市教育委員会 | 1986 『高風呂遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| 永井久美男 | 1994 『中世の出土土器』 | 兵庫埋蔵文化財センター |
| 長野県考古学会弥生部会 | 1999 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』 | 長野県考古学会平成10年度冬季大会 |
| 筒田 明 | 2007 『駒形遺跡』 | 長野県埋蔵文化財センター |
| 長野県埋蔵文化財センター | 2005 『三角原遺跡』 | 長野県埋蔵文化財センター |
| 馬場伸一郎・望月明彦 | 2006 中部高地の弥生時代を中心とした黒曜石「長野県考古学会誌115号」
組成とその推移について | 長野県考古学会 |
| 保坂康夫 | 1989 「古代の甲斐型土器をめぐって」 | 『甲斐の成立と地方的展開』
磯江正美先生喜寿記念論文
集刊行会編/角川書店 |
| 宮坂虎次・守矢昌文 | 1983 『構井・阿弥陀堂遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| 柳川英司 | 1994 『横田田口遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| 山梨県教育委員会 | 1987 『金の尾・無名墳(きつね塚)』 | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
第25集 |

SB01



P1 ~ 4

- | | | | |
|-----------------|--------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 10YR: 3/2 | 粘性ややあり | しまりややあり | 黒色土主体 |
| 2 暗褐色 10YR: 3/4 | 粘性やや弱い | しまりあり | 黒色土にP-6が混ざる |
| 3 黒褐色 10YR: 2/2 | 粘性ややあり | しまりやや弱い | 黒色土主体 かつか他のpitの?の可能性あり |

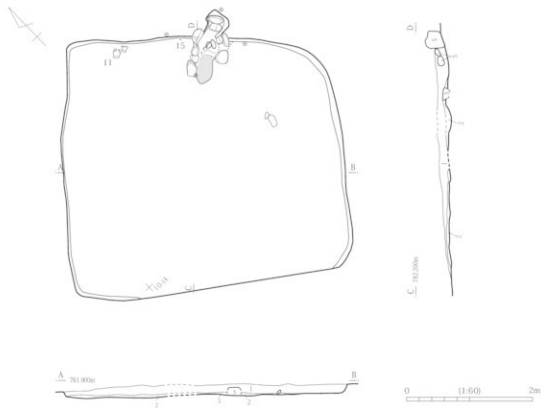
0 (1:600) 2m

炉



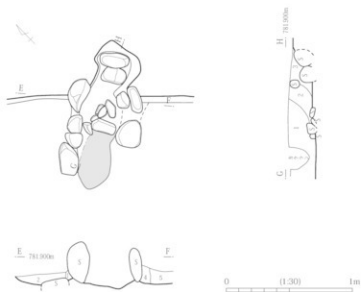
第7図 1号竪穴住居跡

SB02



- 1 暗褐色 7.5YR : 2/3 粘性弱い しまり弱い
- 2 暗褐色 7.5YR : 2/3 粘性弱い しまり有 特に中央部φ1mm程の黄色砂粒を混入する
- 3 暗褐色 7.5YR : 2/3 2層を基調とし、焼土粒子を混入する

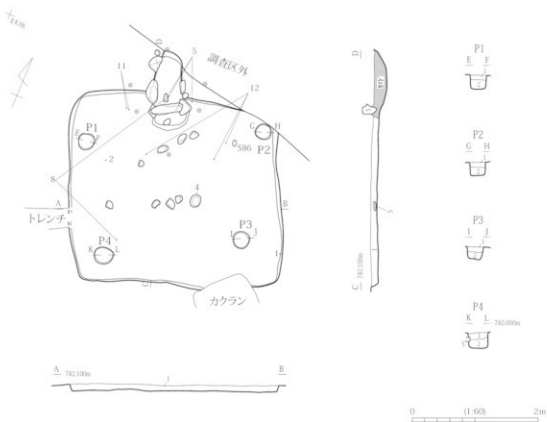
カマド



- カマド
- 1 暗褐色 7.5YR : 2/3 粘性弱い しまり弱い
 - 2 黒褐色 10YR : 2/2 1層+焼土粒と炭化物を少量
 - 3 黒褐色 10YR : 2/3 色調以外は1層と同じ
 - 4 褐色 10YR : 4/4 粘性やや弱い しまりやや強い 補油用粘土
 - 5 黒褐色 10YR : 3/1 粘性ややあり しまりややあり

第8図 2号竪穴住居跡

SB04



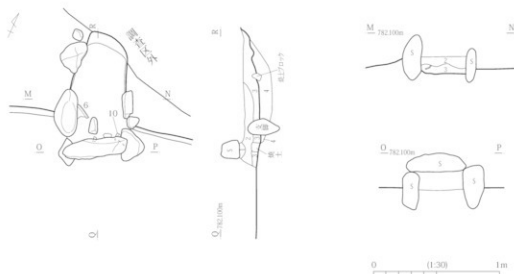
1 黒褐色 10YR: 3/1 粘性やや弱い、しまりややあり

P1~4

1 黒褐色 10YR: 3/2 粘性あり しまりやや弱い

2 黒褐色 10YR: 2/2 粘性ややあり しまりやや弱い、黒色土に黄褐色土と炭化物が微量混じる

カマド



カマド

1 暗褐色 10YR: 3/4 粘性やや弱い、しまり弱い

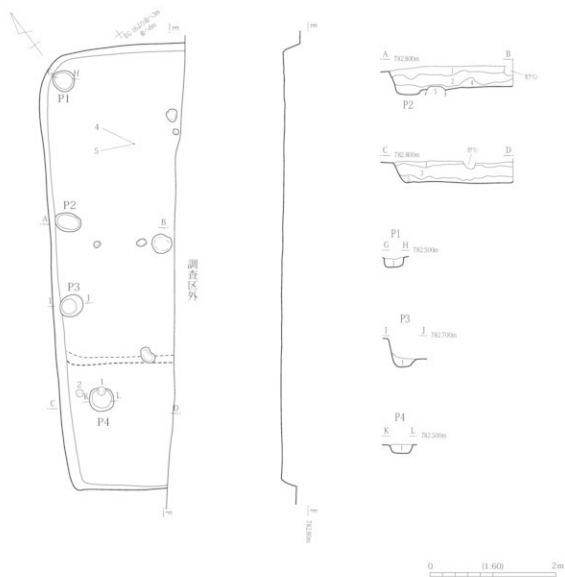
2 黒褐色 10YR: 3/2 粘性ややあり しまりややあり 焼土アロウわずかに含む

3 黒褐色 10YR: 2/2 粘性あり しまりややあり 焼土・炭化物を含む

4 黒褐色 10YR: 3/1 粘性ややあり しまりやや弱い、炭化物・灰が少量混じる

第10図 4号竪穴住居跡

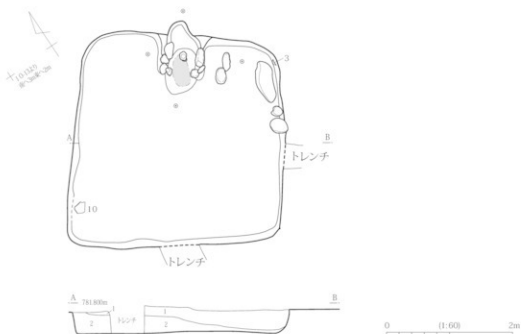
SB05



- 1 黒褐色 10YR : 3/2 粘性ややあり しまり弱い 黒色土主体
 2 黒褐色 10YR : 2/2 粘性ややあり しまりやや弱い 黒色土主体 黄褐色土少量混じる
 3 黒褐色 10YR : 3/1 粘性ややあり しまりやや弱い 黒色上に黄褐色土まだらに少量混じる
 4 暗褐色 10YR : 3/4 粘性やや弱い しまりあり 黄褐色土がやや多く混じる黒色土
 5 暗褐色 10YR : 3/3 粘性ややあり しまりややあり 黒色上に黄褐色土が少量混じる

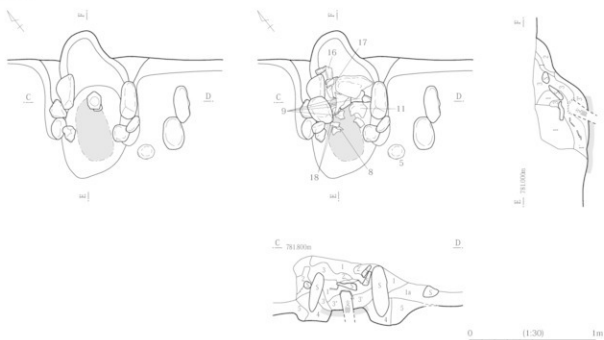
- P 1
 1 暗褐色 10YR : 3/3 粘性ややあり しまりややあり 黒色上にP-1が混じる
 P 3
 1 黒褐色 10YR : 3/2 粘性あり しまりややあり 黒色上にP-1が少量混じる
 P 4
 1 黒褐色 10YR : 2/2 粘性ややあり しまりややあり 黒色上にP-1混じる

第 11 図 5号竪穴住居跡



- 1 におい・黄褐色 10YR:4/3 粘性弱い しまり弱い ϕ 2~3mm 大の小石を含む
 2 におい・黄褐色 10YR:4/3 1層に比べしまりあり 黄色粒子を含む

カマド

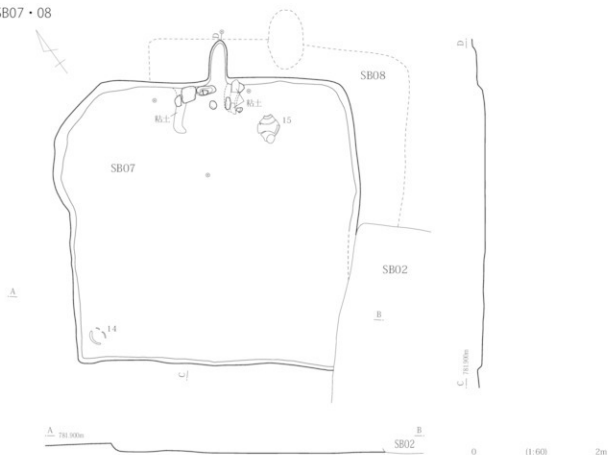


カマド

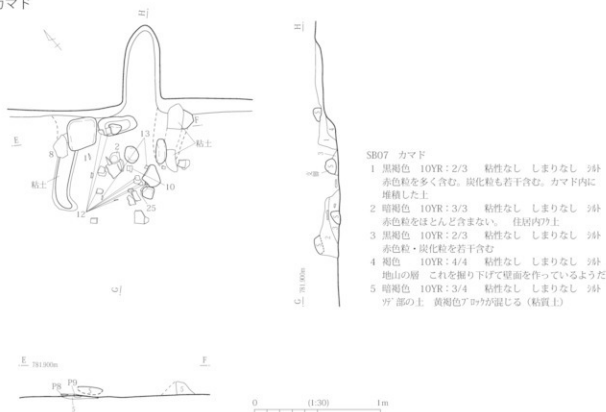
- 1 黒色 7.5YR:2/1 粘性強い しまり強い 黄色粒をアロウ状 (ϕ 1cm) 少量含む
 1' 黒色 7.5YR:2/1 粘性強い しまりなし 黄色土・焼土粒子を少量含む
 1a 黒色 7.5YR:2/1 粘性強い しまりやや強い 砂粒 ϕ 1~2mm 程の小礫を少量含む
 2 明黄褐色 10YR:7/6 粘性強い しまり強い 黄色土を主体とし、黒色土を少量散在させる
 2' 明黄褐色 10YR:7/6 粘性強い しまり弱い 黄色粒を多量混入
 3 黒褐色 10YR:2/2 粘性強い しまり強い 焼土をアロウ状に混入
 3' 暗褐色 10YR:3/3 粘性強い しまり強い 焼土粒子を全体に散在
 3'' 暗褐色 10YR:3/3 粘性強い しまりなし 3'層よりしまりがない
 4 褐色 10YR:4/4 粘性強い しまり弱い 石の補強土・焼土アロウ少量含む
 5 黒褐色 10YR:3/1 粘性強い しまり強い 黒色土に粘上・焼土・炭化物含む

第12図 6号竪穴住居跡

SB07・08



カマド

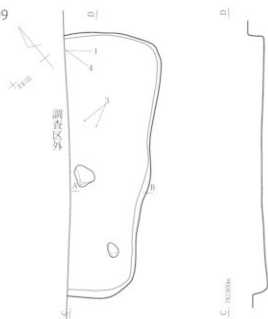


SB07 カマド

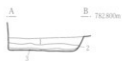
- 1 黒褐色 10YR:2/3 粘性なし しまりなし 34
赤色粒を多く含む。炭化粒も若干含む。カマド内に
増積した土
- 2 暗褐色 10YR:3/3 粘性なし しまりなし 34
赤色粒をほとんど含まない。住居内の上
- 3 黒褐色 10YR:2/3 粘性なし しまりなし 34
赤色粒・炭化粒を若干含む
- 4 褐色 10YR:4/4 粘性なし しまりなし 34
地山の層 これを掘り下げて壁面を作っているようだ
- 5 暗褐色 10YR:3/4 粘性なし しまりなし 34
9'部の上 黄褐色アロウが混じる(粘土上)

第13図 7・8号竪穴住居跡

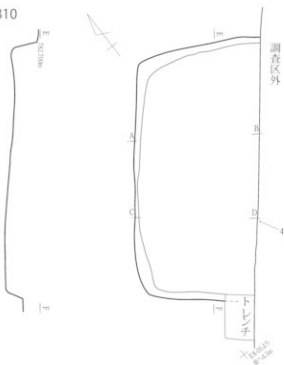
SB09



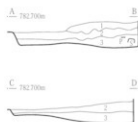
- 1 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり しまりややあり
黒色土主体
- 2 黒褐色 10YR:3/1 粘性あり しまりややあり
黒色土主体で1層より灰褐色
- 3 暗褐色 10YR:3/3 粘性ややあり しまりあり
黒色土主体で褐色土が少なく混じる



SB10

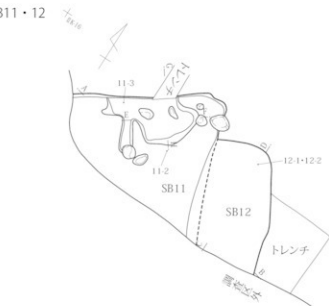


- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性あり しまりやや弱い
黒色土主体
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり しまりややあり
黒色土主体 1層より色調が暗い
- 3 暗褐色 10YR:3/4 粘性あり しまりあり
黒色上に褐色土がやや多く混入、炭化物粒子微量含む



第14図 9・10号竪穴住居跡

SB11・12



SB12
1 黒褐色 10YR:2/2 粘性あり しまりややあり
黒色土 炭化物微量



SB11 カマド

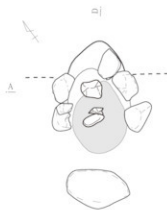
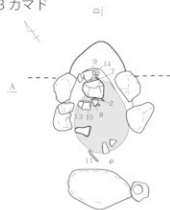
- 1 褐色 10YR:4/1 粘性やや弱い しまり弱い 黒褐色土主体
2 黄褐色 10YR:5/6 粘性あり しまりややあり 粘上、もしくはD-9か?



SB13

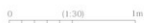


SB13 カマド



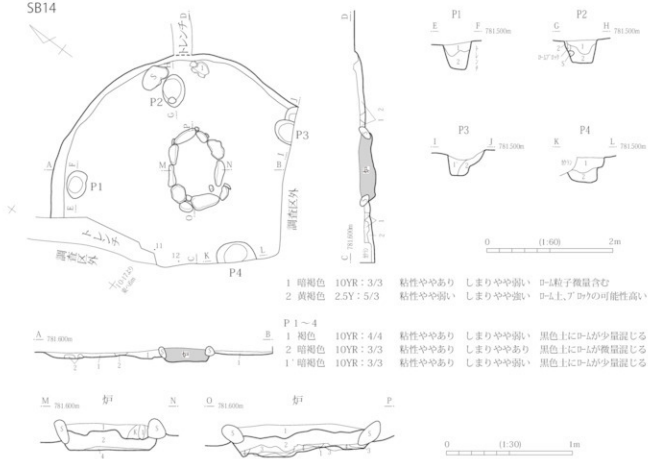
SB13 カマド

- 1 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり しまり弱い
φ1mm程の小石を含む
2 黒褐色 10YR:2/2 1層+焼土微細粒多量
3 にぶい赤褐色 5YR:4/4 粘性やや弱い しまりやや弱い
焼土層、黒色土を少量混ざる



第15図 11・12・13号竪穴住居跡

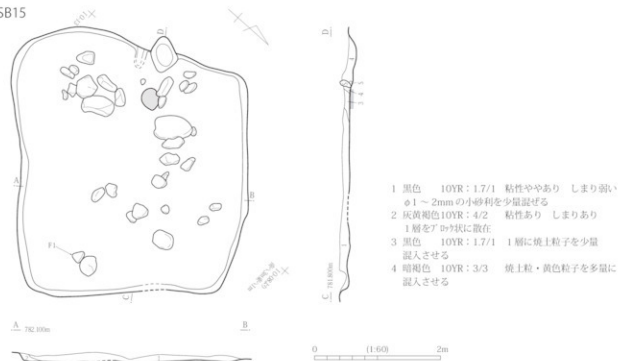
SB14



剖面

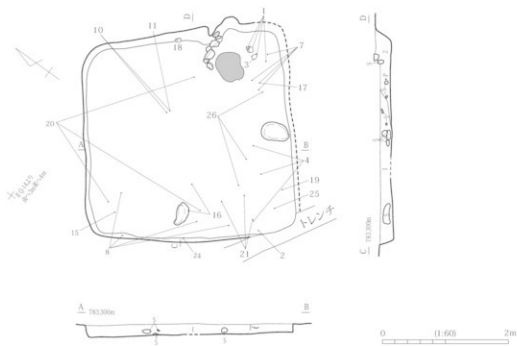
- 1 暗褐色 10YR: 3/3 粘性ややあり しまりやや弱い 黒色土、D-I粒子微量含む
 2 に近い黄褐色 10YR: 4/3 粘性あり しまりややあり 黒色土上で、D-I粒子少量 植土わずかに含む。
 3 黄褐色 10YR: 5/6 粘性あり しまりややあり 基本層 3aに相当 D-I上、2層との境は火を受けて焼土赤化
 4 暗褐色 10YR: 3/3 粘性ややあり しまりややあり 黒褐色土にD-I粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量含む

SB15



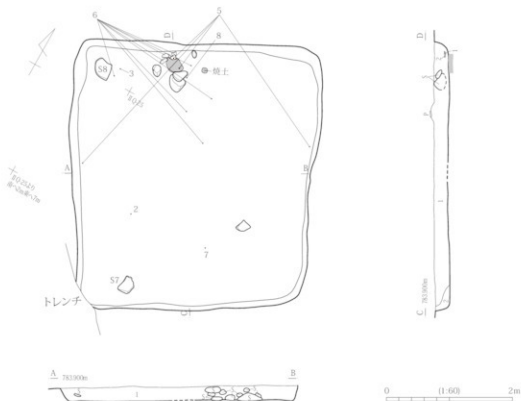
第16図 14・15号竪穴住居跡

SB16



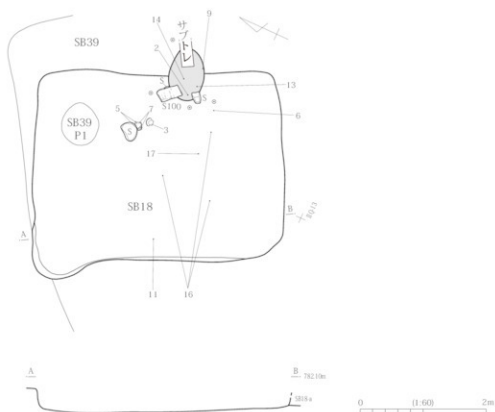
- 1 黒色 10YR: 1.7/1 粘性ややあり しまり弱い こぶし大の石を混入
 2 黒褐色 10YR: 3/1 粘性ややあり しまりあり 焼土粒・黄色土粒を多く含む

SB17

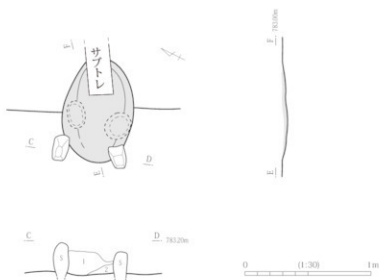


- 1 黒色 10YR: 1.7/1 粘性ややあり しまり弱い 人頭大・こぶし大の礫を多量に混入する
 2 黒色 10YR: 1.7/1 粘性なし しまり弱い 1層より粘性なく砂質

第17図 16・17号竪穴住居跡



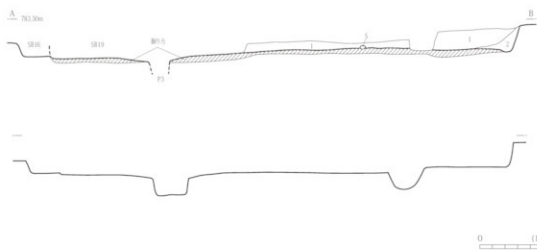
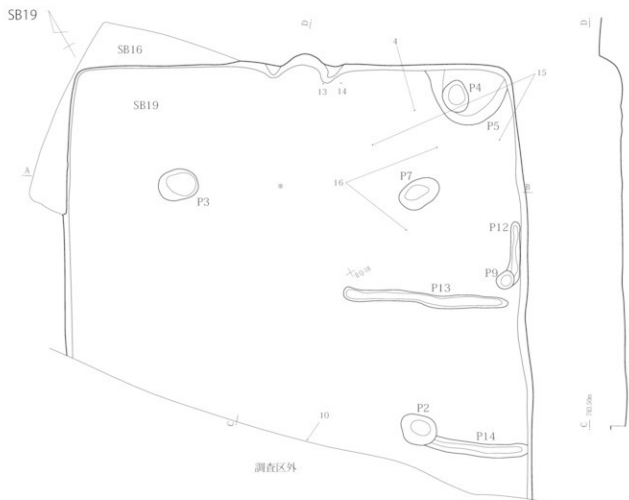
炉



SB18 カマド

- 1 暗褐色 10YR:3/4 粘性なし しまり弱い 36μ 白色粒含む 赤色粒若干含む
 2 にぶい黄褐色 10YR:4/3 粘性ややあり しまりややあり 丸床 焼土プロット(2.5YR:5/6) 混じる

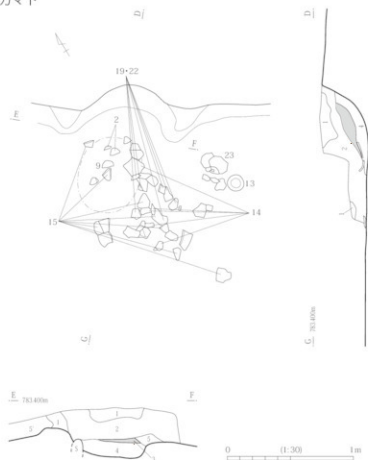
第18図 18号竪穴住居跡



- 1 黒色 10YR : 1.7/1 粘性ややあり しまり弱い こぶし大の礫を比較的多く(地山より少ない)混入
 2 黒色 10YR : 1.7/1 粘性あり しまり強い こぶし大の礫を少量混入する、1層より粘性あり、しまりに欠ける。

第19図 19号竪穴住居跡

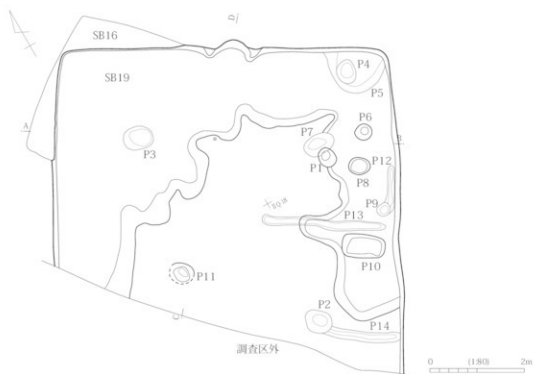
カマド



カマド

- 1 暗褐色粘質土 10YR:3/3 粘性ややあり
しまり弱い カマド構築材,アコウ状
- 2 黒褐色 10YR:2/3 粘性弱い しまり強い 5分
焼土アコウ0.1cmを含む 黄褐色アコウを少量含む
- 3 黒褐色 10YR:2/3 粘性弱い しまり強い 5分
焼土アコウ0.1cmを多量含む、焼土をアコウ状に混入
- 4 黒褐色 10YR:2/3 粘性弱い しまり強い
黄褐色アコウは含まない
- 5 黒褐色 10YR:2/3 粘性ややあり しまり強い
焼土アコウ、黄褐色アコウを含まない
- 5' に近い黄褐色 10YR:4/3 粘性なし しまり
やや弱い 地山に近似する。しまりが地山より弱い

掘り方

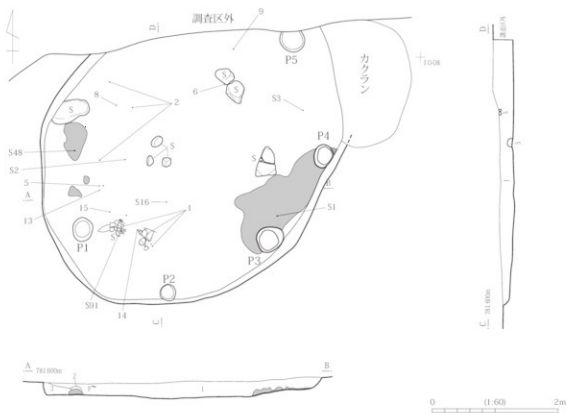


第20図 19号竪穴住居跡掘り方

SB20



SB21



- 1 黒色 10YR : 2/1 粘性なし しまりなし φ 1mm 程の白色粒を 20% 程含む 遺物を含む
 2 暗褐色 7.5YR : 2/3 粘性なし しまりなし アカボクに含まれる 3層中のアボクと基本的に同じ
 3 黒褐色 10YR : 2/3 粘性なし しまりなし φ 1mm 程の白色粒を 20% 程含む 黄褐色のアボク土が混ざる

第 21 図 20・21 号竪穴住居跡 掘り方

SB22 (カマド)

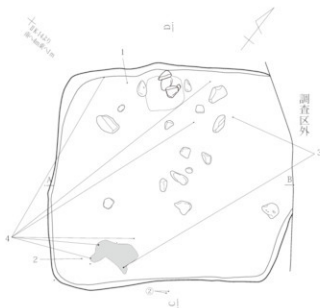


カマド

- 1 赤褐色 5YR:4/8 粘性なし、しまりあり
 焼上 被熱層で表面は被熱のため硬化している
 2 黒褐色 10YR:3/2 粘性弱、しまり弱
 黒褐色土 焼上アワビ・粒子を多く含む (掘り方)



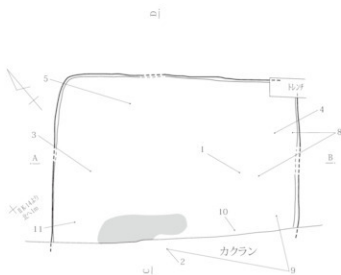
SB23



- 1 黒褐色 10YR:2/2
 粘性なし、しまりなし
 5分 焼上わずかに含む、
 7分
 2 黒褐色 10YR:2/2
 粘性なし、しまりややあり
 5分 焼上は1層よりも少
 ない、少量含む、1層より
 赤みが少ない。カマド煙道
 部までこの上が堆積する。



SB24

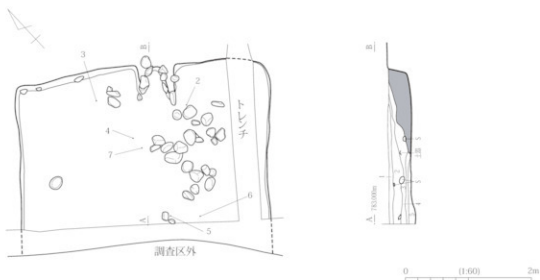


- 1 黒褐色 10YR:2/3
 粘性なし、しまりなし
 軟質、赤みが強く、
 焼上粒を含む



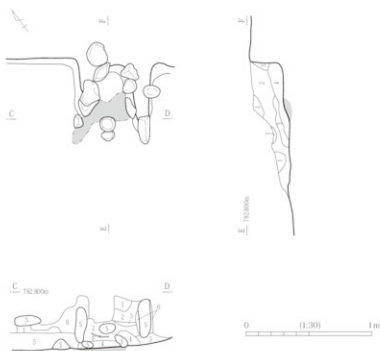
第 22 図 22・23・24号竪穴住居跡

SB25



- | | | | | |
|-------|-----------|--------|---------|------------|
| 1 黒褐色 | 10YR: 3/2 | 粘性ややあり | しまりやや弱い | 黒色土 |
| 2 黒褐色 | 10YR: 2/2 | 粘性ややあり | しまりやや弱い | 1層より黒が強い |
| 3 褐灰色 | 10YR: 4/1 | 粘性やや弱い | しまり強い | 粘土粒子少量混じる |
| 4 暗褐色 | 10YR: 3/4 | 粘性ややあり | しまり強い | 粘床を構成する粘土層 |
| 5 黒色 | 10YR: 2/1 | 粘性あり | しまり弱い | 床下 地山黒色土 |

カマド

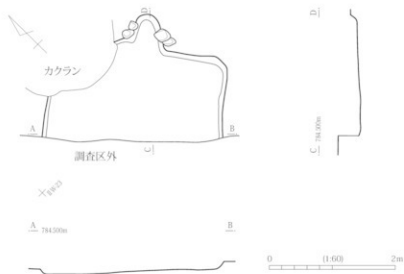


カマド

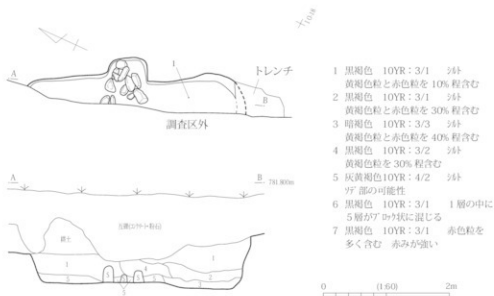
- | | | | | |
|--------|------------|--------|---------|-----------------|
| 1 黒褐色 | 10YR: 3/1 | 粘性ややあり | しまり弱い | 黒色土 |
| 2 暗褐色 | 10YR: 3/3 | 粘性やや弱い | しまりやや弱い | 粘土小アワ少量 |
| 3 明赤褐色 | 2.5YR: 5/6 | 粘性なし | しまりやや弱い | カマド天井の落ちたもの |
| 4 暗褐色 | 10YR: 3/3 | 粘性やや弱い | しまりやや弱い | 2層とはほぼ同じ、後上アワ微量 |
| 5 黒色 | 10YR: 2/1 | 粘性ややあり | しまりややあり | 地山 黒色土層 |
| 6 | 粘土層 | | | |

第 23 図 25 号竪穴住居跡

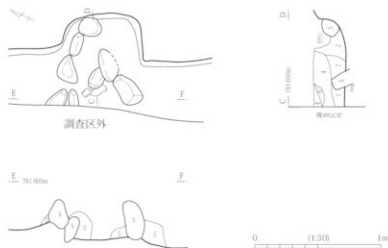
SB26



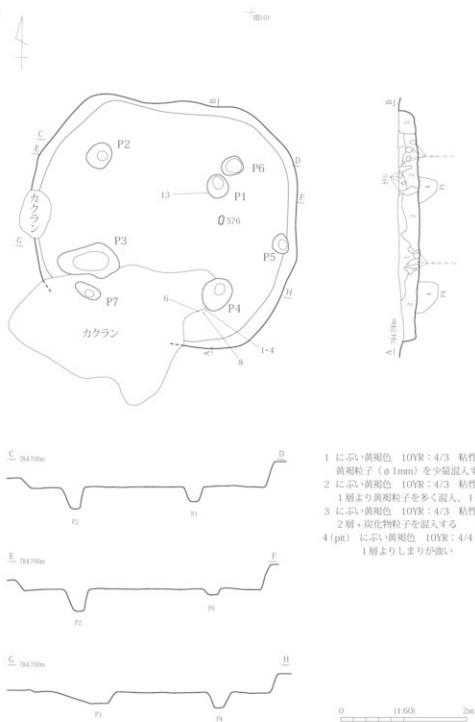
SB27



カマド

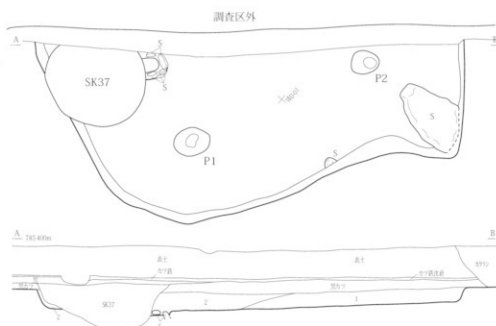


第24図 26・27号竪穴住居跡



第25図 28号壁穴住居跡

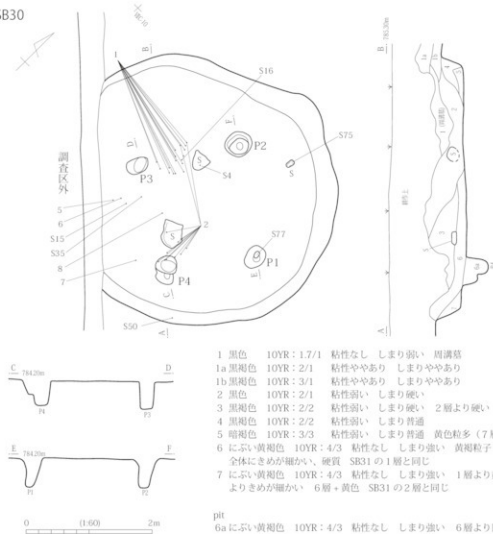
SB29



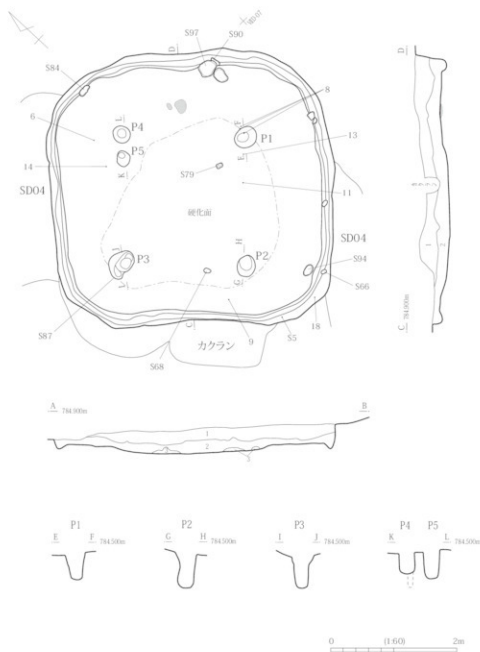
- 1 黒褐色 10YR: 3/1 粘性欠く しまりあり 黄褐色土を ϕ 1~2cmのアウワ状に多量混入
 2 黒褐色 10YR: 3/1 粘性欠く しまりあり 黄褐色土を粒状に少量混入

0 1.60 2m

SB30

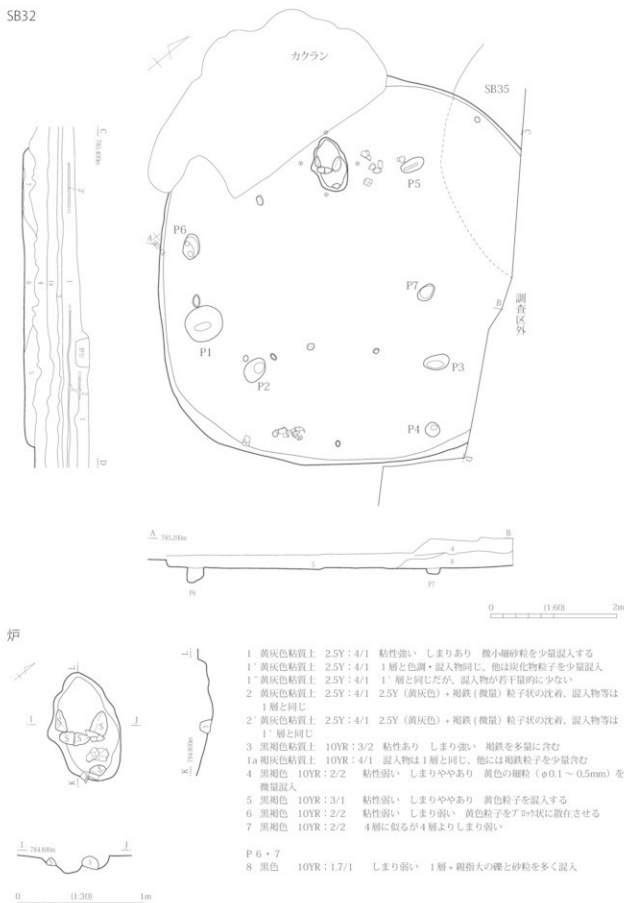


第26図 29・30号竪穴住居跡



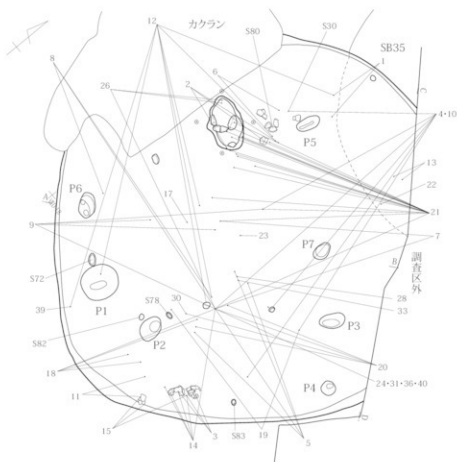
- 1 にふい黄褐色 10YR:4/3 粘性なし しまり強い 黄褐色粒子(φ1mm)を少量混入する。全体にきめが細かい
 2 にふい黄褐色 10YR:4/3 粘性なし しまり強い 1層より黄褐色粒子を多く混入、1層よりきめが細かい
 3 にふい黄褐色 10YR:4/3 粘性なし しまり強い 2層+炭化物粒子を混入する

第27図 31号竪穴住居跡

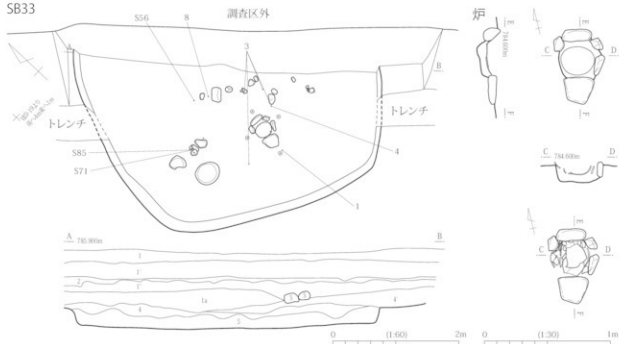


第28図 32号竪穴住居跡

(SB32)



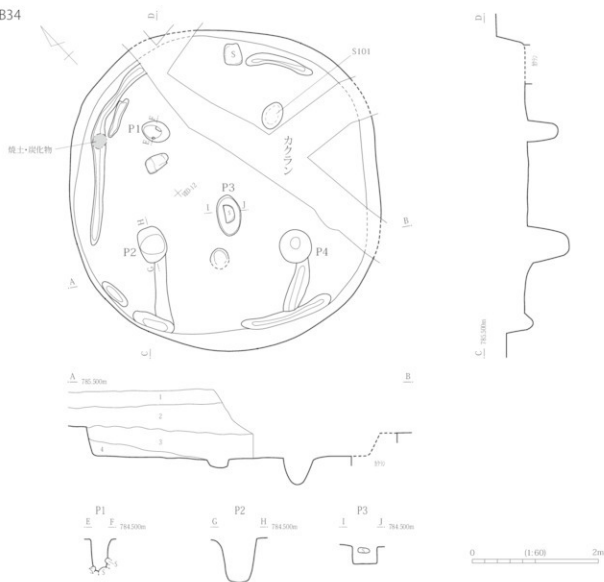
SB33



- 1 黄灰色粘質土 2.5Y: 4/1 粘性強い しまりあり 微小細砂粒を少量混入する
- 1' 黄灰色粘質土 2.5Y: 4/1 粘性強い しまりあり 1層と色調・混入物同じ、他は炭化物粒子(青灰か?)を少量混入
- 1'' 黄灰色粘質土 2.5Y: 4/1 粘性強い しまりあり 1'層と同じだが、混入物が若干量的に少ない
- 2 黄灰色粘質土 2.5Y: 4/1 粘性強い しまりややあり
- 1a 黄灰色粘質土 10YR: 4/1 混入物は1層と同じ、他には褐鉄粒子を少量含む
- 4 黒褐色上10YR: 2/2 粘性弱い しまりややあり 黄色の細粒(φ0.1~0.5mm)を微量混入
- 4' 黒褐色上10YR: 2/2 粘性弱い しまりややあり 4層に比べしまりあり
- 5 黒褐色上10YR: 3/1 粘性弱い しまりややあり 黄色粒子を混入する

第29図 32・33号竪穴住居跡

SB34



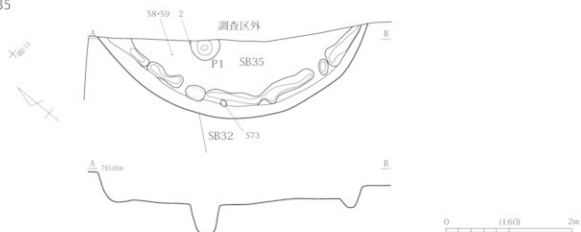
1 砂利 (N-3X)

2 耕作土 (黒: しまらず/サつく)

3 にぶい・黄褐色 10YR: 4/3 粘性なし しまり強い 黄褐色粒子 (φ1mm) を少量混入する。全体にきめが細かい。SB30・31と同じカ土

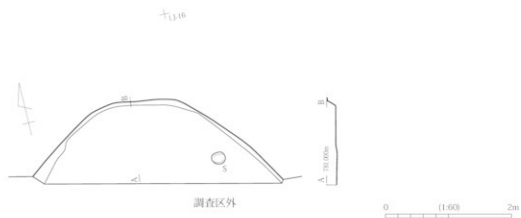
4 にぶい・黄褐色 10YR: 4/3 粘性なし しまり強い 1層より黄褐色粒子を多く混入。1層よりきめが細かい。SB30・31と同じカ土

SB35

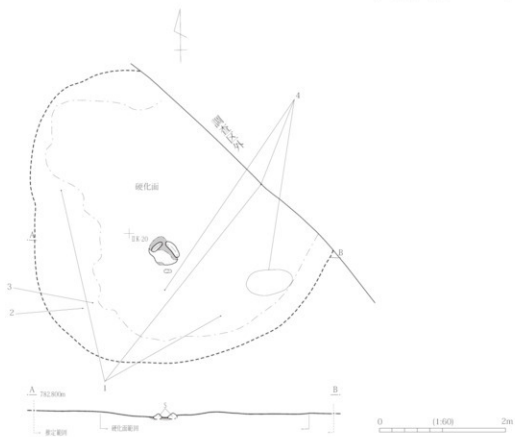


第30図 34・35号竪穴住居跡

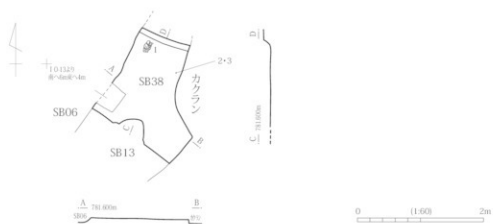
SB36



SB37

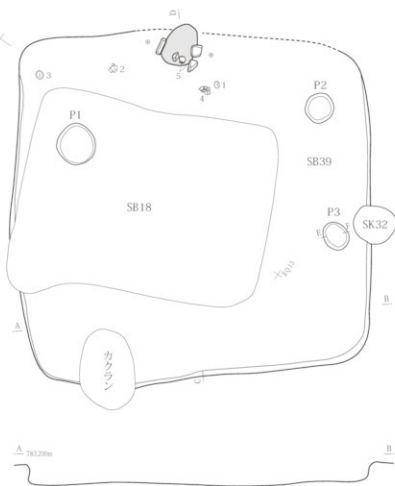


SB38

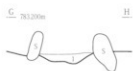
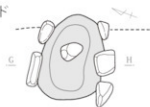


第31図 36・37・38号竪穴住居跡

SB39



カマド



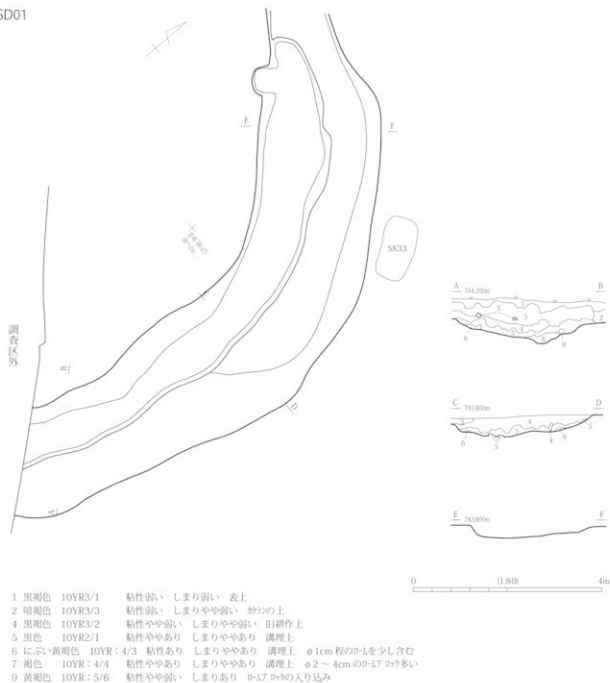
- 1 暗褐色 10YR:3/4 粘性なし しまり強い 灰 白色粒含む 赤色粒若干含む
 2 暗褐色 10YR:3/4 粘性ややあり しまりややあり 1層の上に黄褐色アワ、赤色粒を多く含む
 3 暗褐色 10YR:3/4 粘性ややあり しまりややあり 灰 焼土アワを多く含む 炭化物も多く含む

P3

- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり しまりやや弱い 黒色上に炭化物粒子微量混じる
 2 暗褐色 10YR:3/3 粘性ややあり しまりややあり 黒色上に炭化物粒子微量混じる
 カマド
 1 に近い黄褐色 10YR:4/3 粘性ややあり しまりややあり 灰床 焼土アワ(2.5YR:5/6)混じる

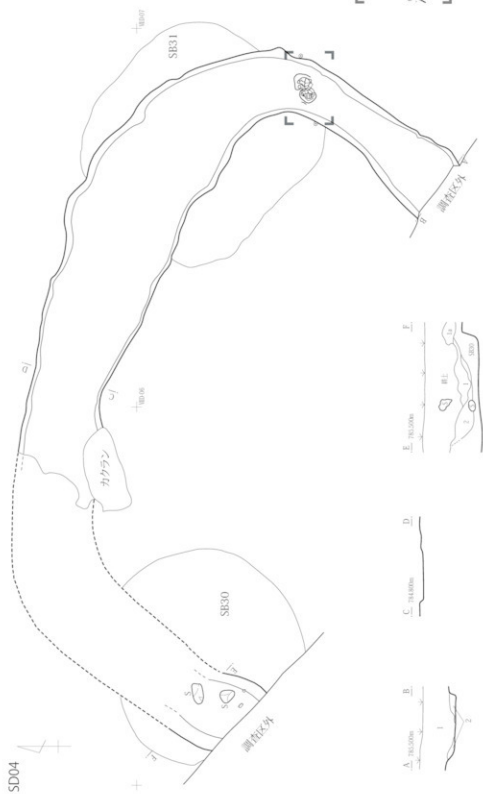
第32図 39号竪穴住居跡

SD01

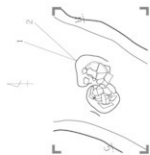


第33図 1号溝跡

SD04

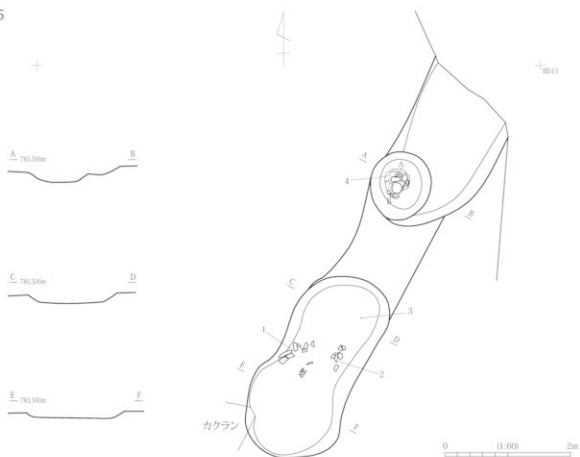


- 1 黒色 10YR : 1.7/1 粘質なし しまり強い 周溝墓 ザラツク
 2 黒色 10YR : 2/1 しまり強い



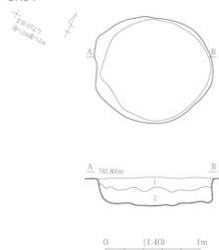
第34図 4号溝跡

SD05



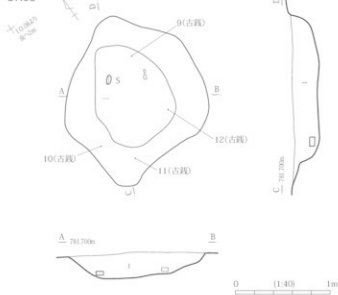
第 35 図 5号溝跡

SK01



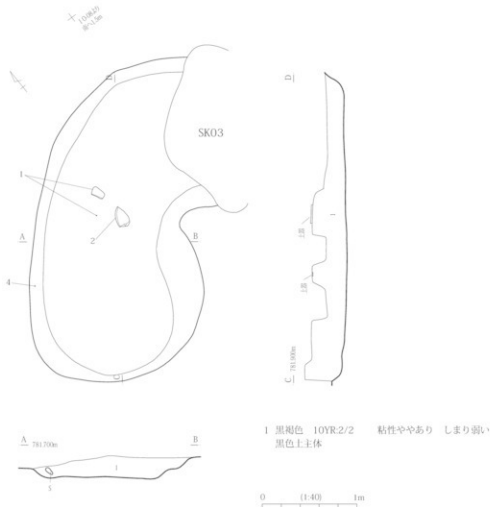
- 1 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり しまりあり
埋土 黒色土主体
- 2 暗褐色 10YR:3/3 粘性ややあり しまりややあり
埋土 黒色上にB-5混じる

SK03



- 1 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり しまり強い
黒色土主体

SK04



- 1 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり しまり強い
黒色土主体

第36図 1・3・4号土坑

SK10



A B 70.00m



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる
- 2' 黒色 10YR:2/1 粘性やや弱い
しまり弱い 黒色土の3/4層
- 2'' 黒色 10YR:1.7/1 粘性やや弱い
しまり弱い 黒色土の3/4層

SK11-12



A B 70.00m



SK11

- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK12

- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK13



A B 70.00m



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性
ややあり しまりやや弱い
黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性
ややあり しまりややあり
黒色土主体だが1層より
やや固くしまる

SK14



A B 70.00m



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK15



A B 70.00m



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK16



A B 70.00m



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる
- 2' 黒色 10YR:2/1 粘性やや弱い
しまり弱い 黒色土の3/4層

SK17

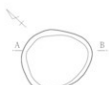


A B 70.00m



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK18



A B 70.00m



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK19



A B 70.00m

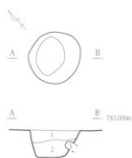


- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

0 (1:40) 1m

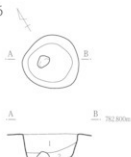
第37図 10～19号土坑

SK20



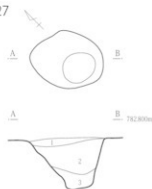
- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK26



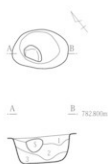
- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK27



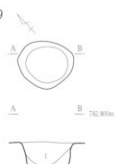
- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 2層より小石多い
- 2 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 3 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK28



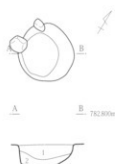
- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 2層より小石多い
- 2 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 3 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK29



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK30



- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK31



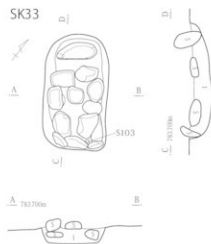
- 1 黒褐色 10YR:3/2 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
- 2 黒褐色 10YR:2/2 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土主体だが
1層よりやや固くしまる

SK32



- 1 暗褐色 10YR:3/4 粘性ややあり
しまりやや弱い 黒色土
小石17mmまでだらに入る
- 2 黒褐色 10YR:2/3 粘性ややあり
しまりややあり 黒色土に0.1mm粒子が
少量混じる
- 3 黄褐色 10YR:5/6 粘性やや弱い
しまりやや弱い 0.17mmか?柱穴直
ではなさそう

SK33

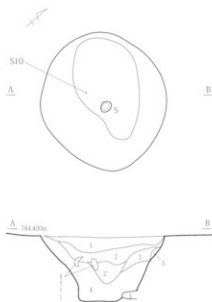


- 1 黒色 10YR:2/1 粘性ややあり
しまりややあり 溝埋土

0 (1:40) 1m

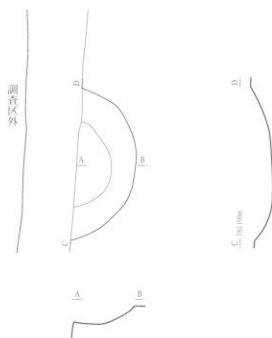
第 38 図 20、26～33 号土坑

SK34

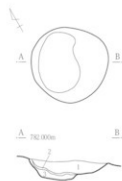


- 1 黒色 10YR: 1.7/1 粘性ややあり しまり弱い きめが細かい
- 2 黒色 10YR: 2/1 粘性弱い しまりあり やや砂質 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の黄色土粒を少量混入
- 2' 黒色 10YR: 2/1 粘性弱い しまりあり やや砂質 2層に比べ黄色土粒が多い
- 3 黒褐色 10YR: 2/2 粘性弱い しまりあり やや砂質 黄色土微細粒 $\phi 1\text{mm}$ を多く混入
- 4 黒褐色 10YR: 2/2 粘性弱い しまり強い 黄色土微細粒 $\phi 1\text{mm}$ と $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 大の黄色土粒を多く含む
- 5 灰黄褐色 10YR: 4/2 粘性弱い しまり弱い 黄色土 (地山の崩落土)

SK35

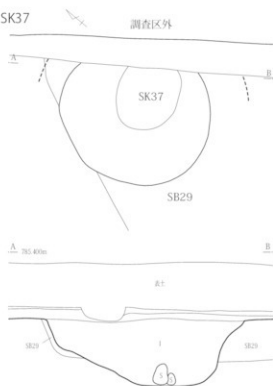


SK36



- 1 黒褐色 10YR: 3/2 粘性やや強い しまりやや弱い
黒色土主体だが斑状に $\phi \sim 1.7\text{mm}$ が混じる 一気に埋まった?
- 2 黒色 10YR: 1.7/1 粘性なし しまりなし 炭化物層
- 3 褐色 10YR: 4/6 粘性やや強い しまりやや弱い
 $\phi \sim 1\text{mm}$ 主体に黒色土が少量混入する

SK37

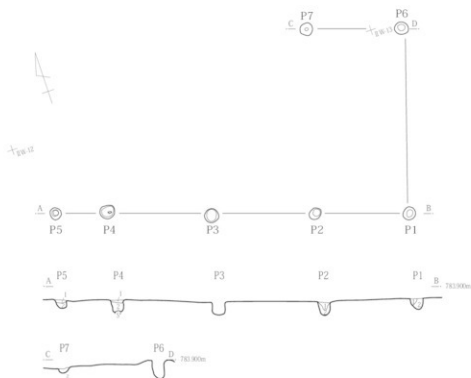


- 1 黒色 10YR: 2/1 しまり弱い 黄褐色土粒子を少量混入する

0 (1:40) 1m

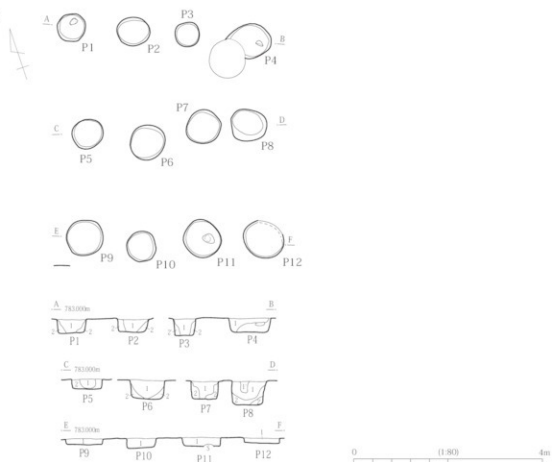
第39図 34～37号土坑

ST01



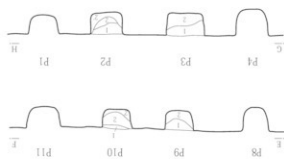
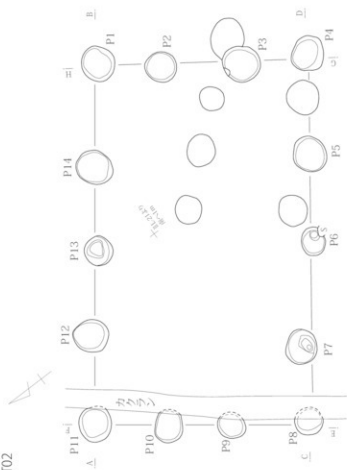
- 1 黒褐色 10YR:2/1 粘性やや弱い しまりやや弱い 理上 黒褐色土主体
- 2 にぶい黄褐色 10YR:4/3 粘性やや弱い しまりややあり 黒褐色土に0.1粒子和 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のブツを含む

ST03



第40図 1・3号掘立柱建物跡

ST02

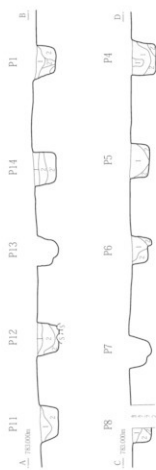


ST2, 04

1 断面図 10YR:2/2 粘性なし しまりなし 30° 地山より少ない白土粘若干含む

2 断面図 10YR:2/2 1層と同色・質も似るがやや1層より粘性・しまり強い、ハサハサしている

3 断面図 10YR:2/2 1層と同色・質も似るがやや1層より粘性・しまり強い、ハサハサしている



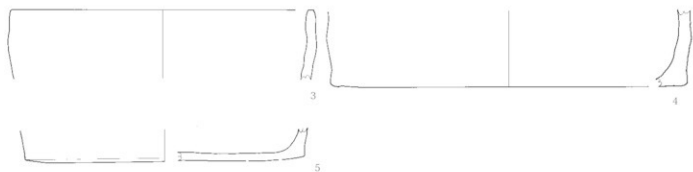
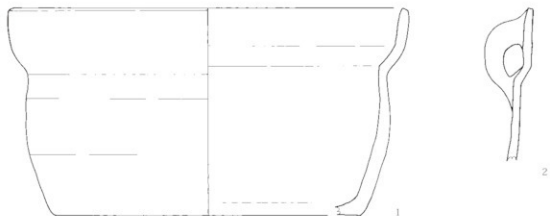
第41図 2号掘立柱建物跡

SB02

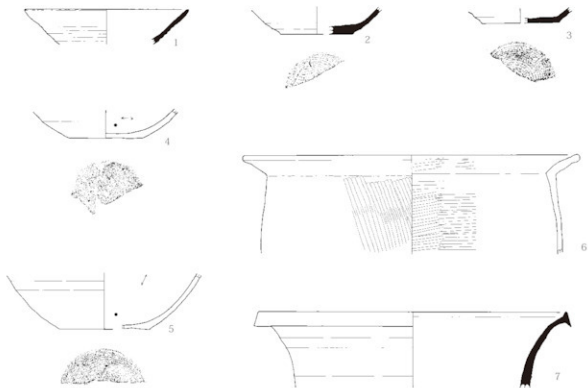


第 42 图 2 号竖穴住居跡出土土器

SB03



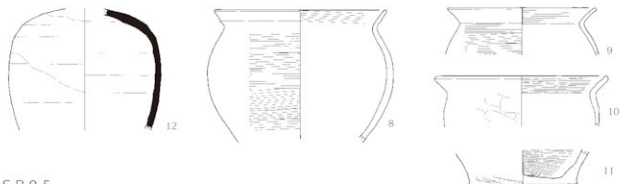
SB04-1



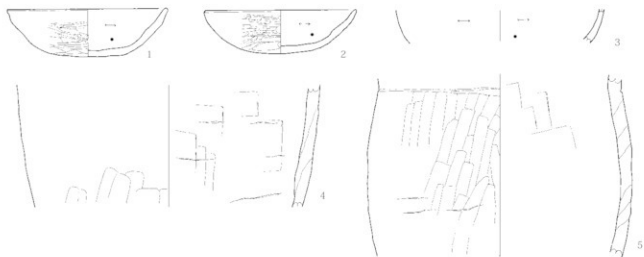
0 1:30 10cm

第43图 3~4号竖穴住居跡出土土器

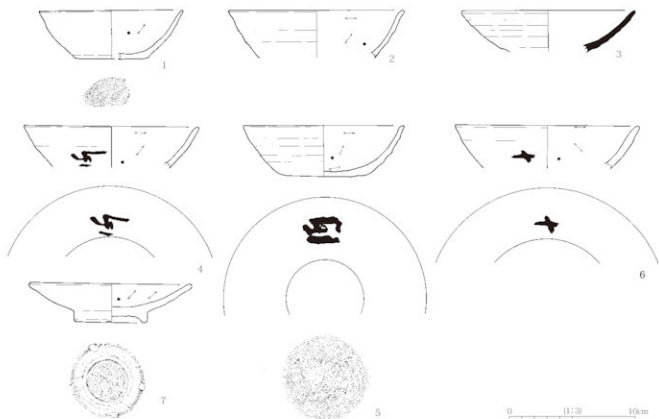
SB04-2



SB05

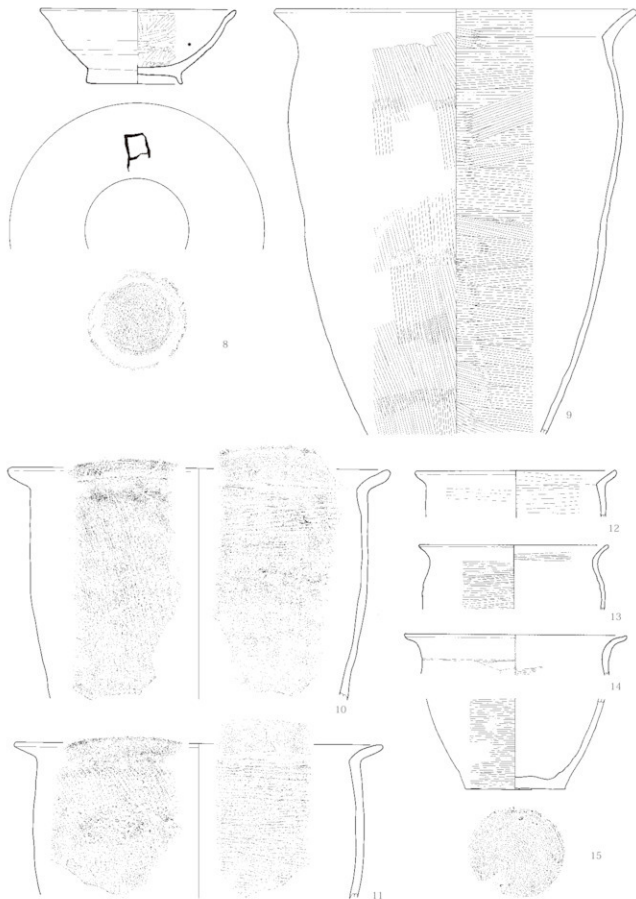


SB06-1



第44图 4·5·6号竖穴居出土土器

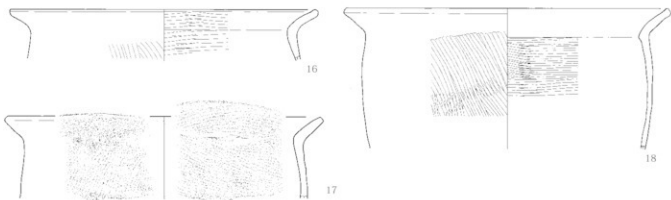
SB06-2



第45图 6号竖穴住居跡出土土器

0 1:3 10cm

SB06-3



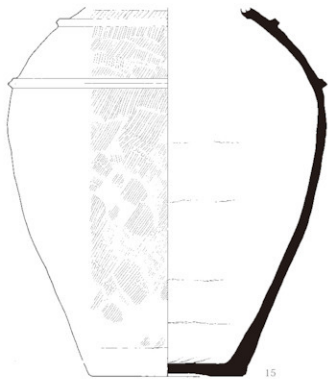
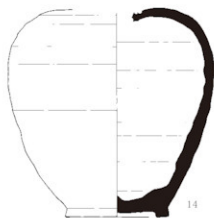
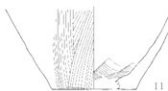
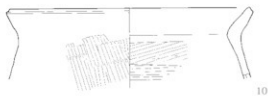
SB07-1



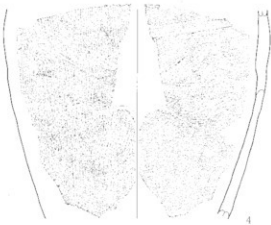
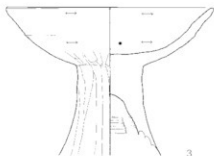
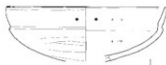
第46图 6·7号竖穴住居跡出土土器

0 (1:3) 10cm

SB07-2



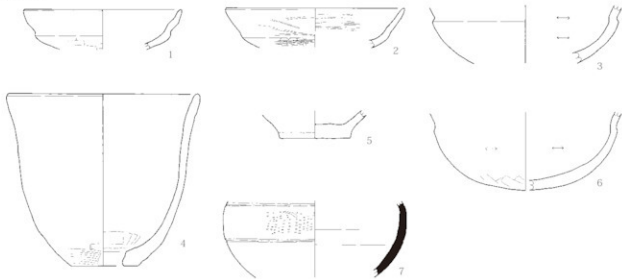
SB09



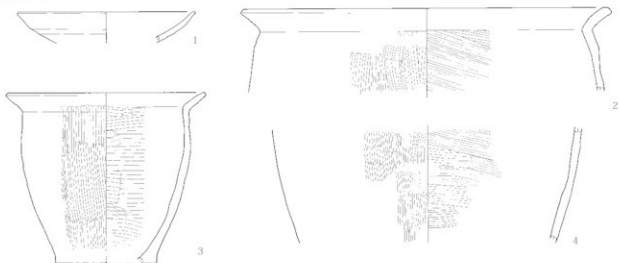
0 1:30 10cm

第47图 7·9号竖穴住居跡出土土器

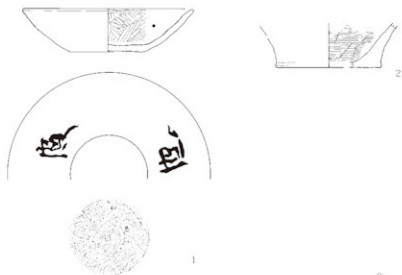
SB10



SB11



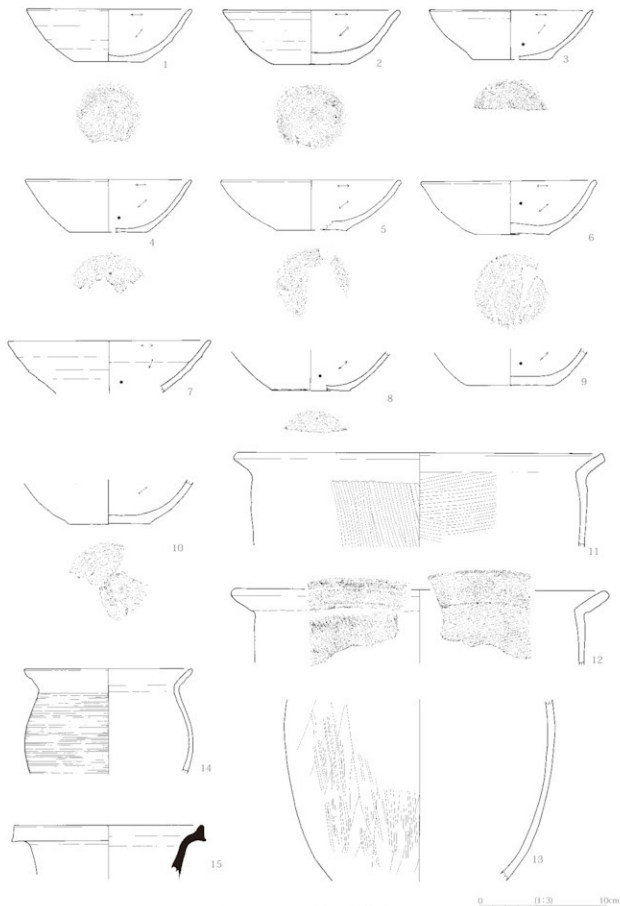
SB12



第48图 10·11·12号竖穴住居跡出土土器

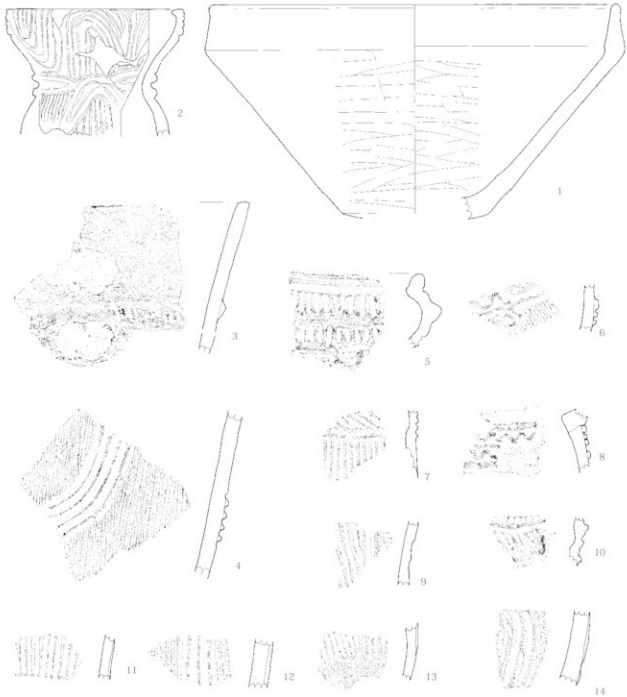
0 1:30 10cm

SB13



第 49 图 13 号竖穴住居跡出土土器

SB14

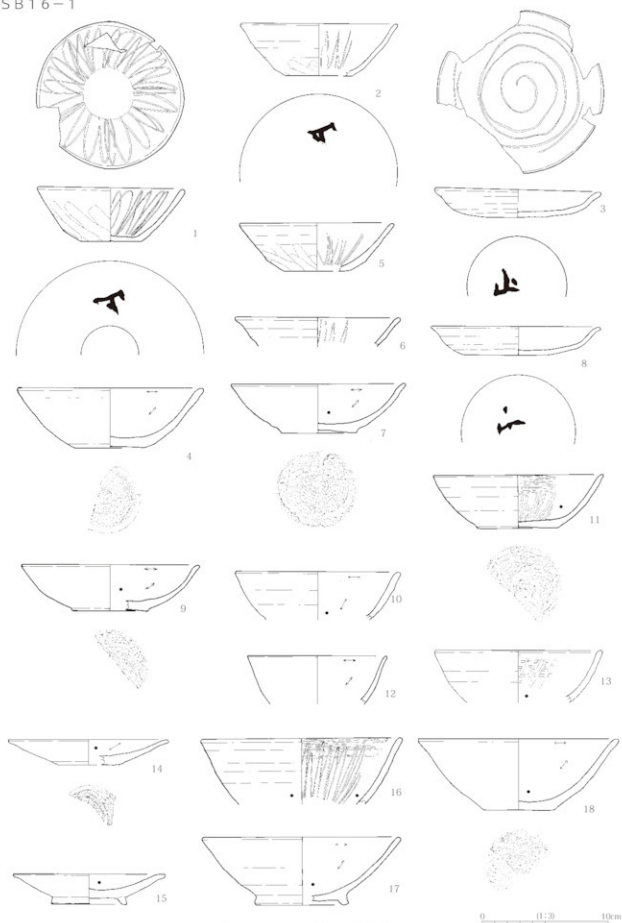


SB15



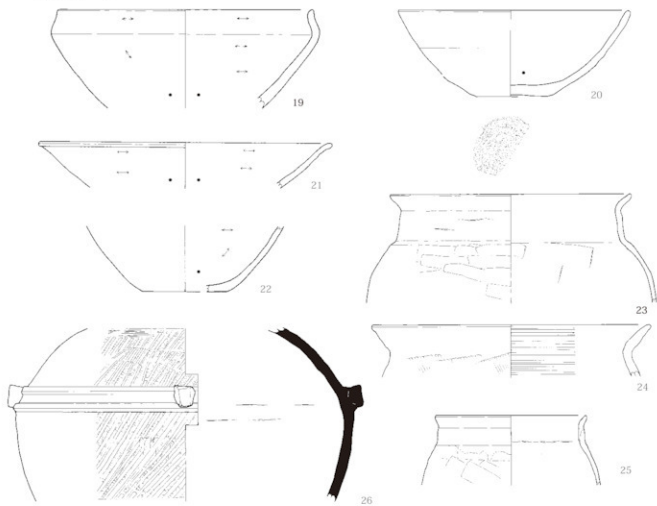
第50图 14·15号竖穴住居跡出土土器

0 1:20 10cm

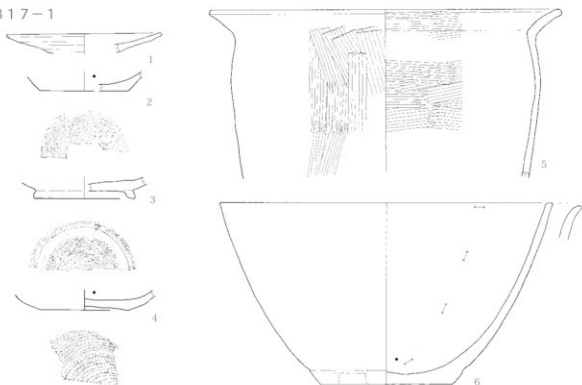


第 51 图 16 号竖穴住居跡出土土器

SB16-2



SB17-1



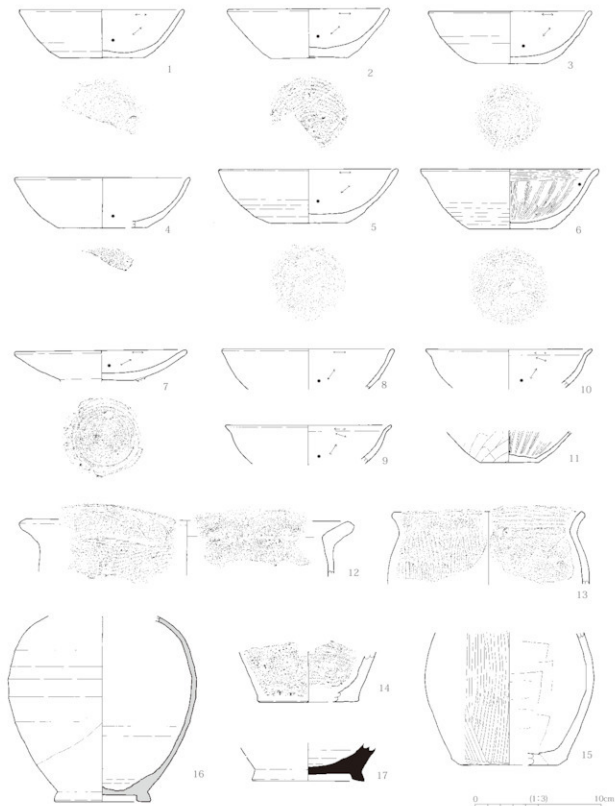
第52图 16·17号竖穴住居跡出土土器

0 1:3 10cm

SB17-2

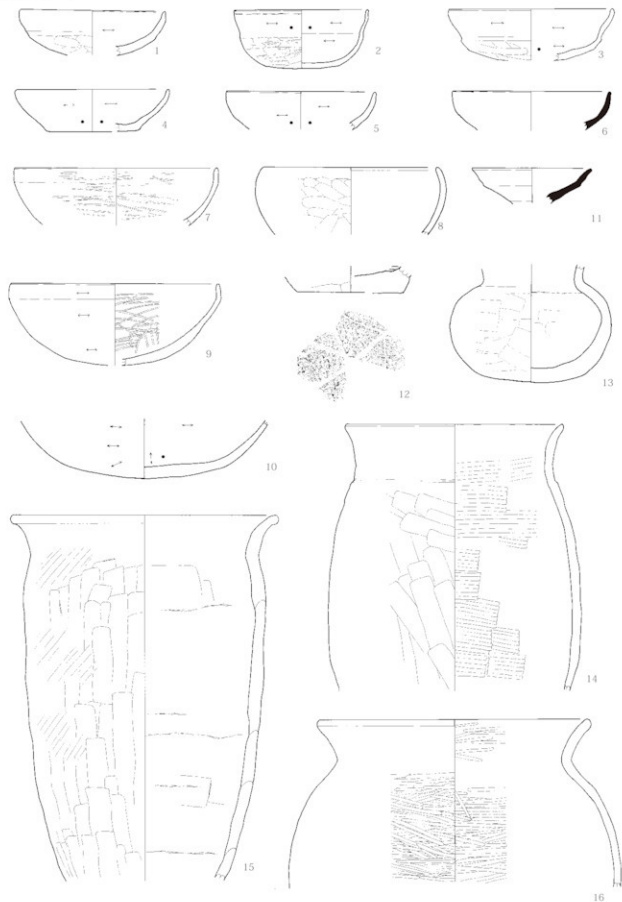


SB18



第53图 17·18号竖穴住居跡出土土器

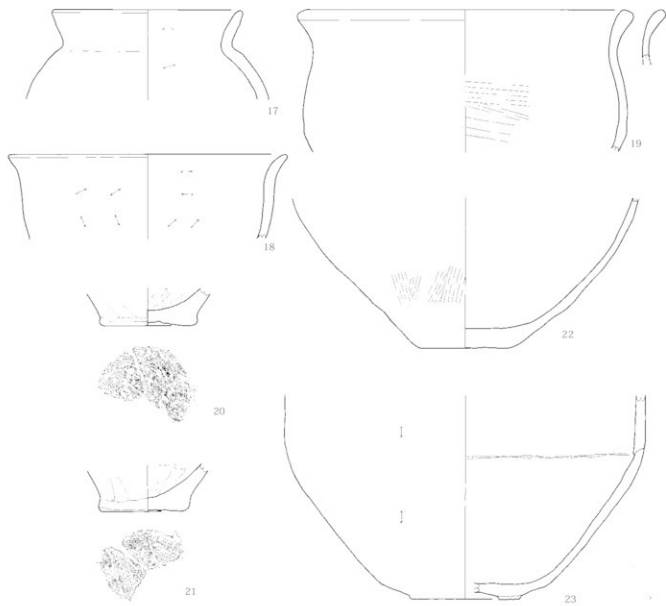
SB19-1



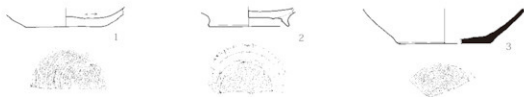
第54图 19号竖穴住居跡出土土器

0 1:3 10cm

SB19-2



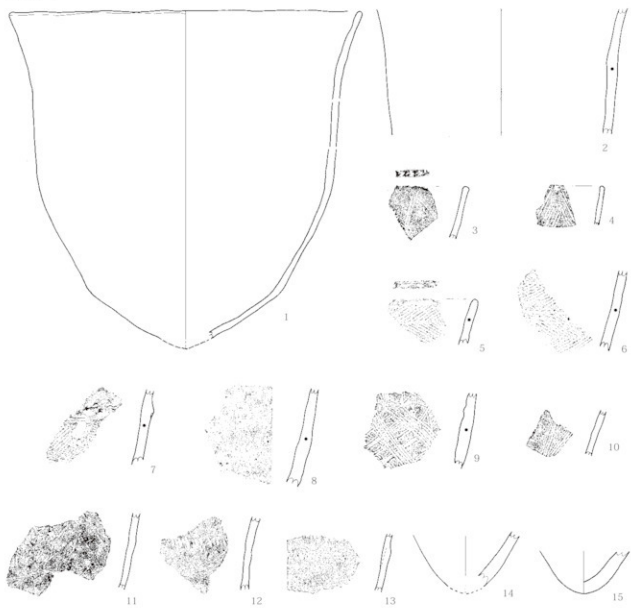
SB20



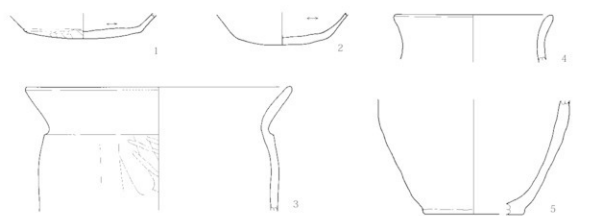
0 1:3 10cm

第55图 19·20号竖穴住居跡出土土器

SB 21



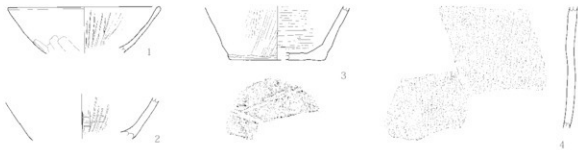
SB 22



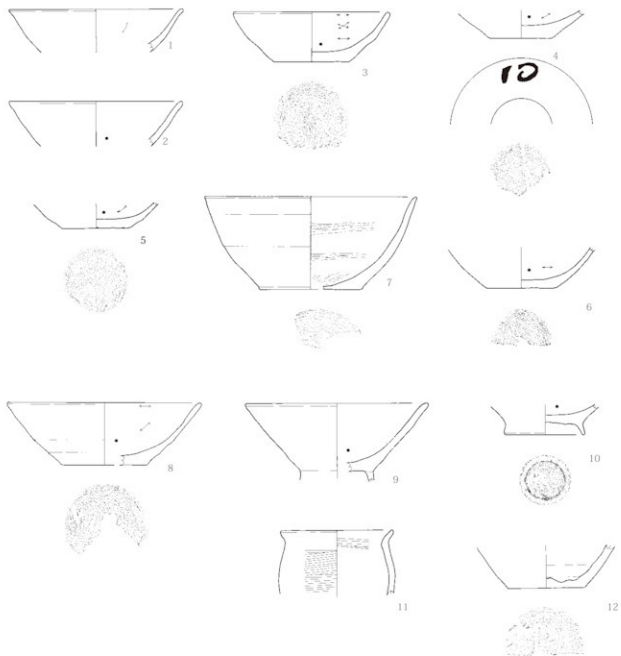
0 1:30 10cm

第 56 图 21·22 号竖穴住居跡出土土器

SB23

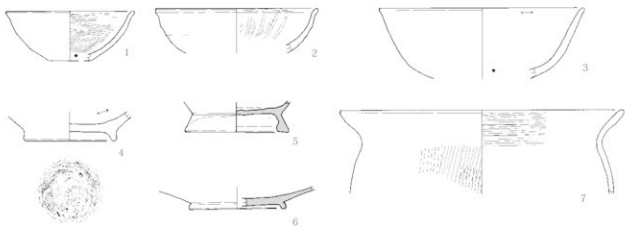


SB24

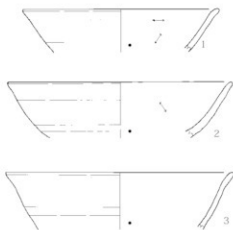


第 57 图 23·24 号竖穴住居跡出土土器

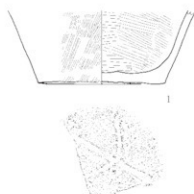
SB 25



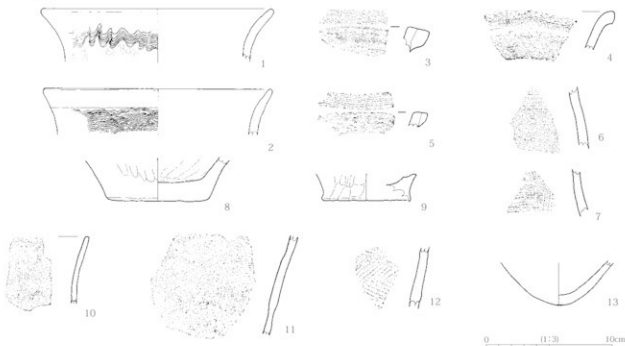
SB 26



SB 27



SB 28

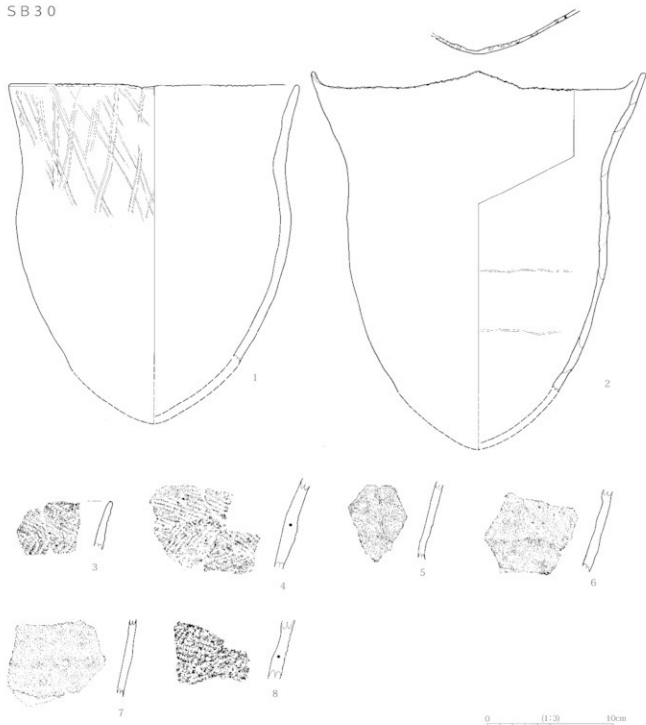


第 58 图 25·26·27·28 号竖穴住居出土土器

SB29

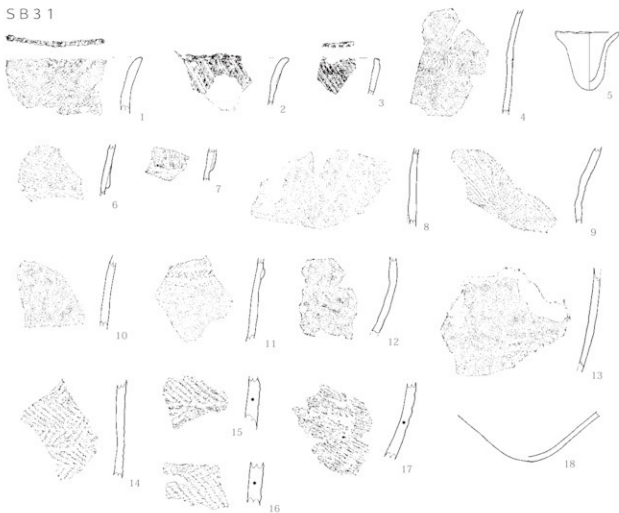


SB30

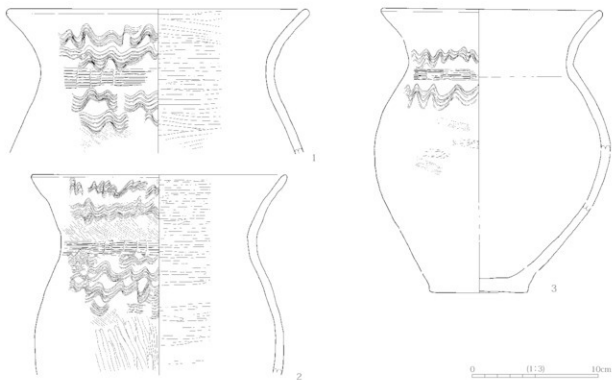


第 59 图 29·30 号竖穴住居跡出土土器

SB31

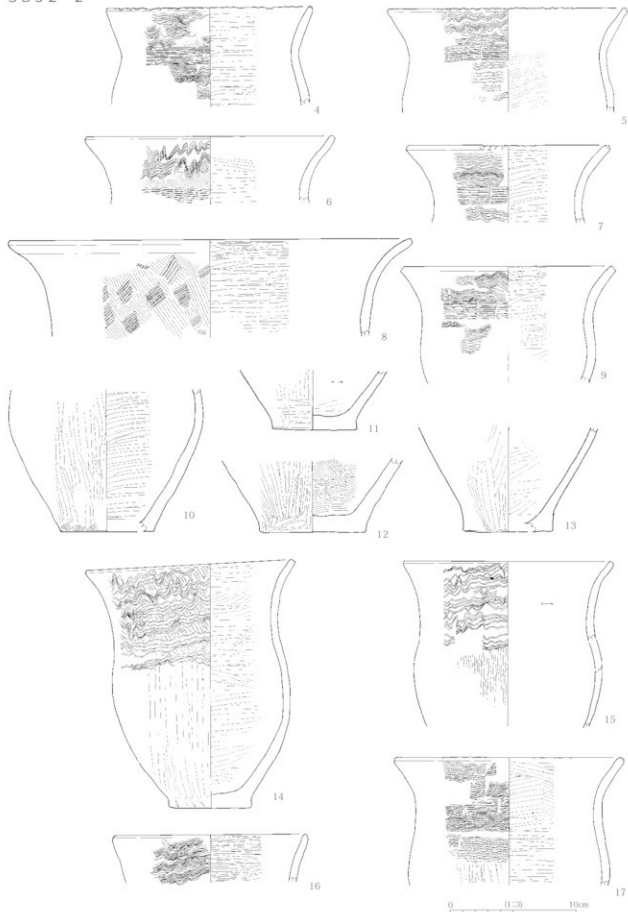


SB32-1



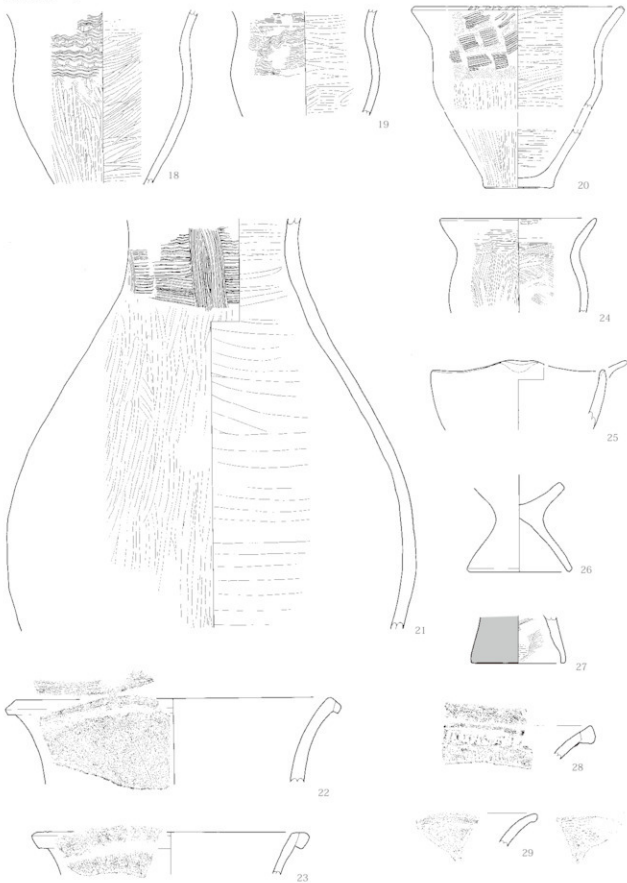
第60图 31·32号竖穴住居跡出土土器

SB32-2



第 61 图 32 号竖穴住居跡出土土器

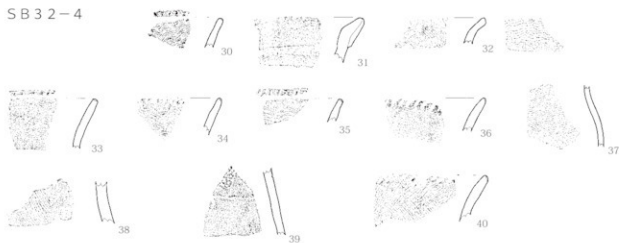
SB32-3



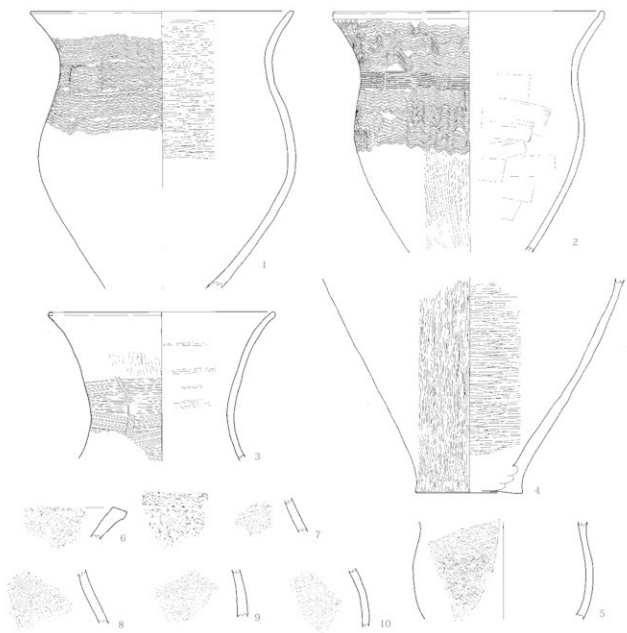
第 62 图 32 号竖穴住居跡出土土器

0 1:3 10cm

SB32-4



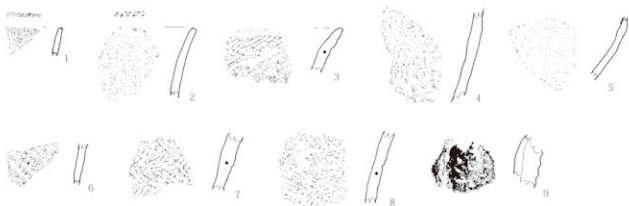
SB33



第63图 32·33号竖穴住居跡出土土器

0 1:3 10cm

SB 34



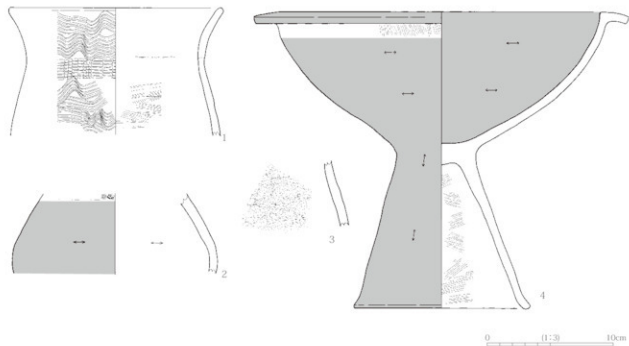
SB 35



SB 36

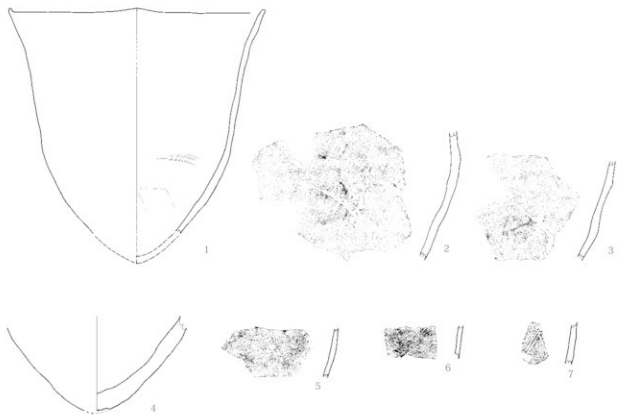


SB 37

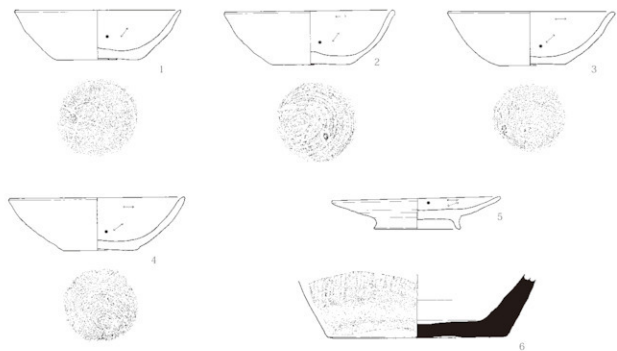


第 64 图 34·35·36·37 号竖穴住居出土土器

SB38



SB39



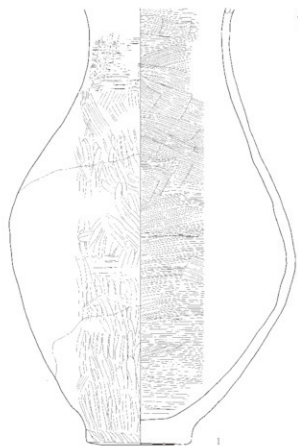
0 1:3 10cm

第65图 38·39号竖穴住居跡出土土器

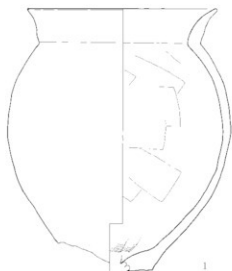
SD01



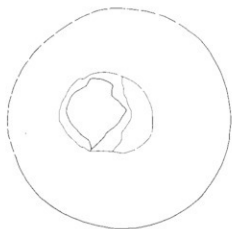
SD04



SK32



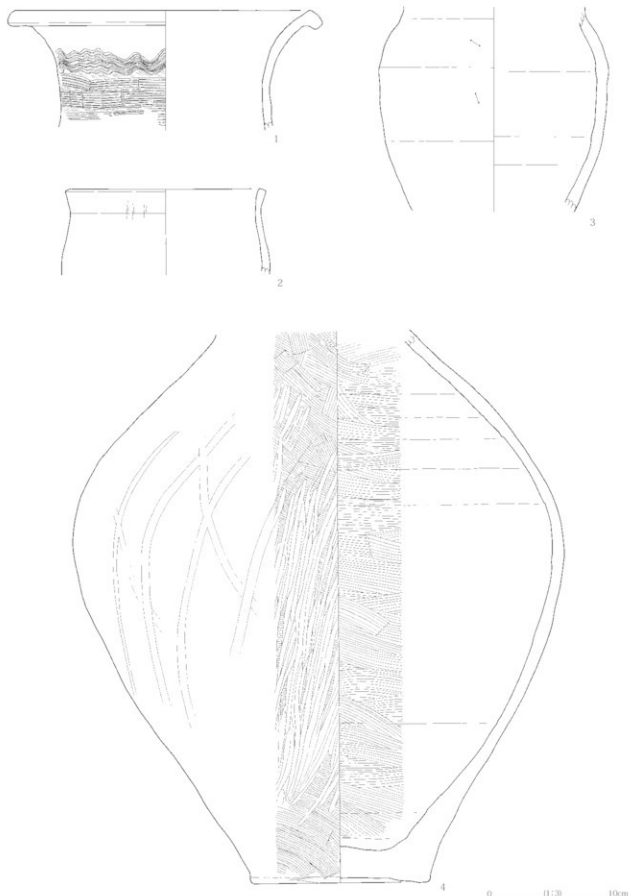
ST02



0 1:20 10cm

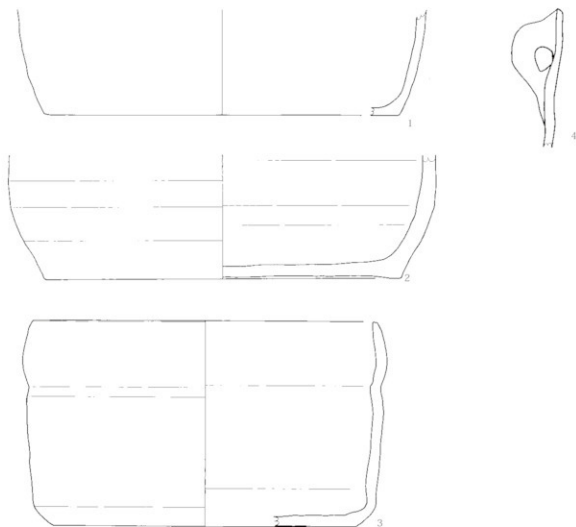
第66图 1·4号溝跡・2号掘立柱建物跡・32号土坑出土土器

SD05

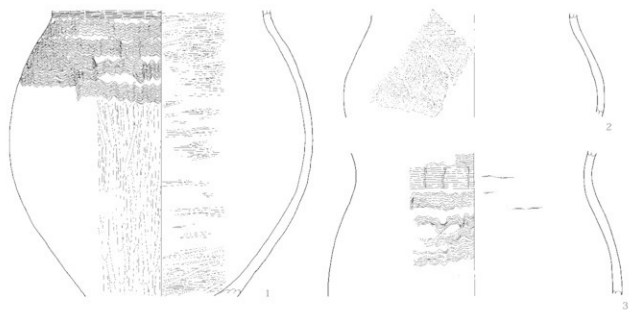


第67图 5号满跖出土土器

SK04



遺構外

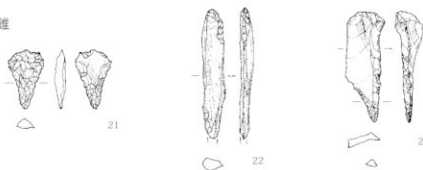


第68图 4号土坑·遺構外出土土器

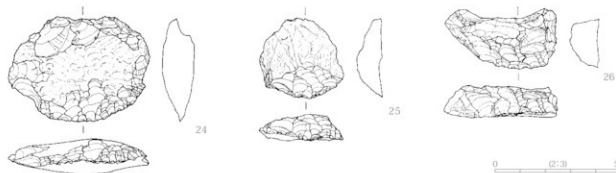
石鏃



石錐

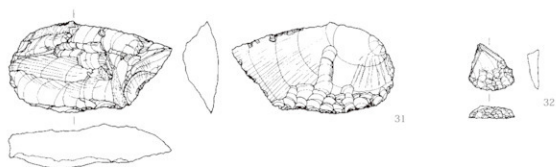
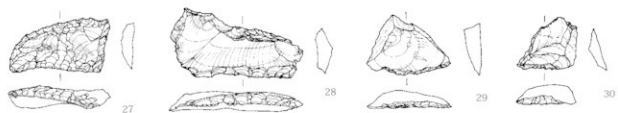


スクレイパー

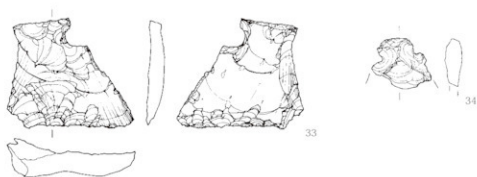


0 (2:3) 5cm

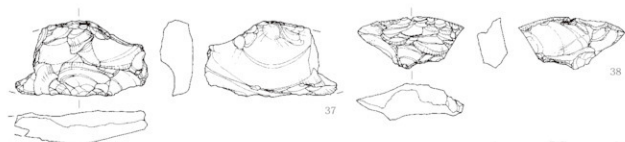
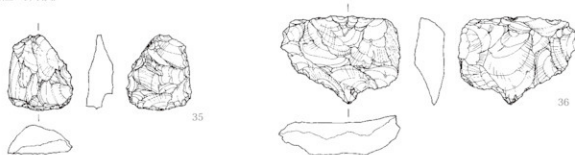
第69図 石鏃・石錐・スクレイパー



石匙

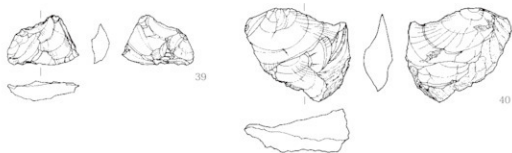


両極 (石核)

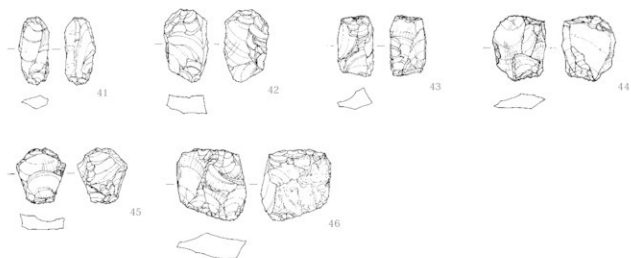


第70図 スクレーパー・石匙・両極石器

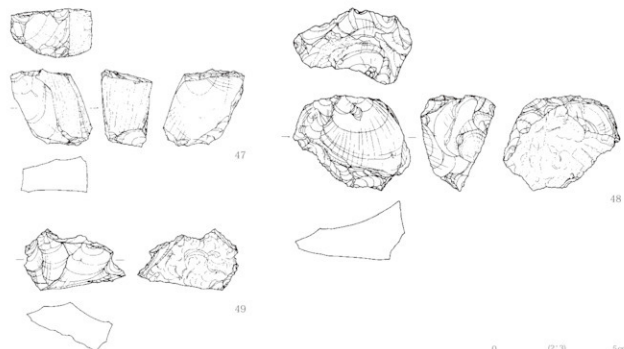
0 2:3 5cm



ピエス



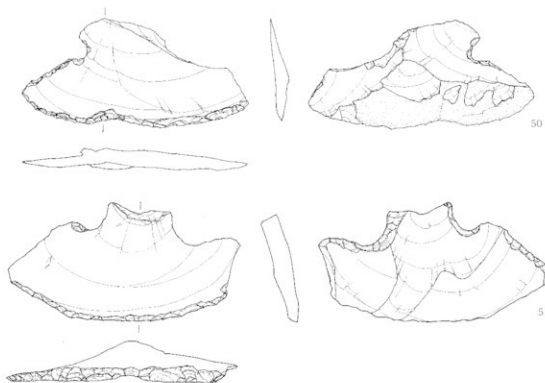
石核



0 (2:3) 5cm

第71図 両極(石核)・ピエス・石核

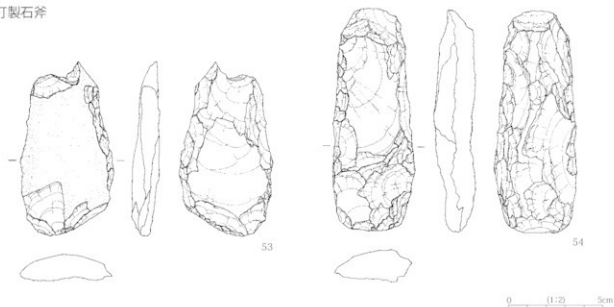
石匙



二次加工剥片



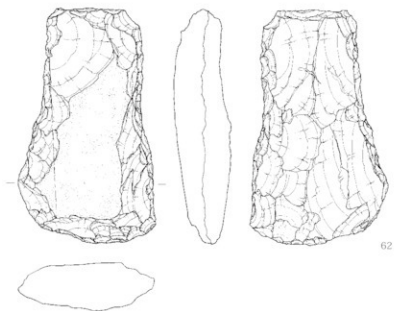
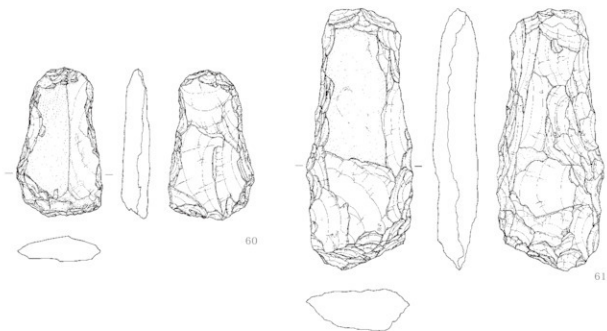
打製石斧



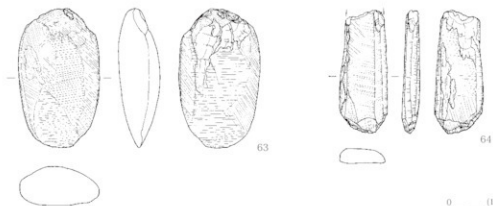
第 72 图 石匙・二次加工剥片・打製石斧



第73圖 打製石斧



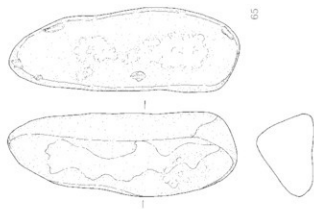
磨製石斧



第 74 圖 打製石斧・磨製石斧

0 (1:2) 5cm

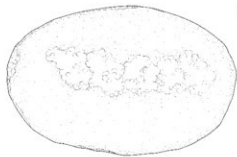
凹石



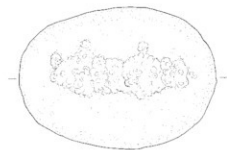
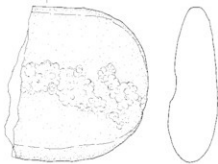
65



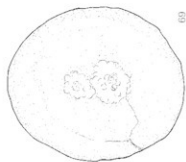
66



67



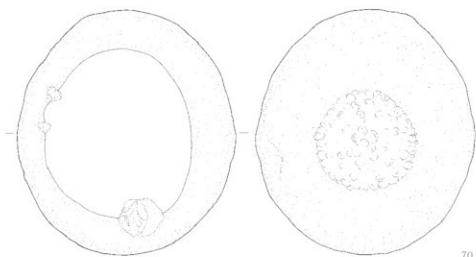
68



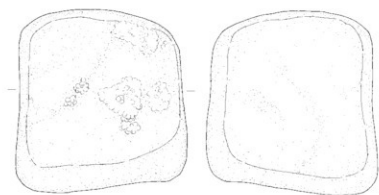
69



第75圖 凹石類(1)

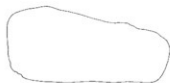


70



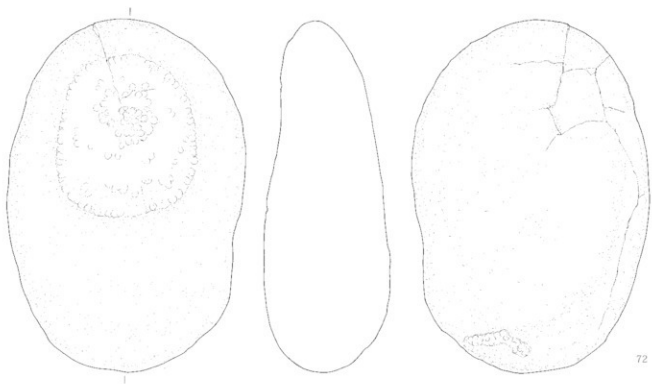
71

(共生凹石)

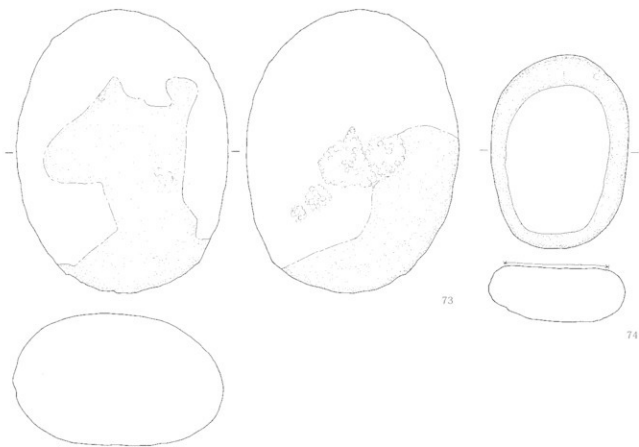


0 (1:2) 5cm

第76圖 凹石類(2)



72

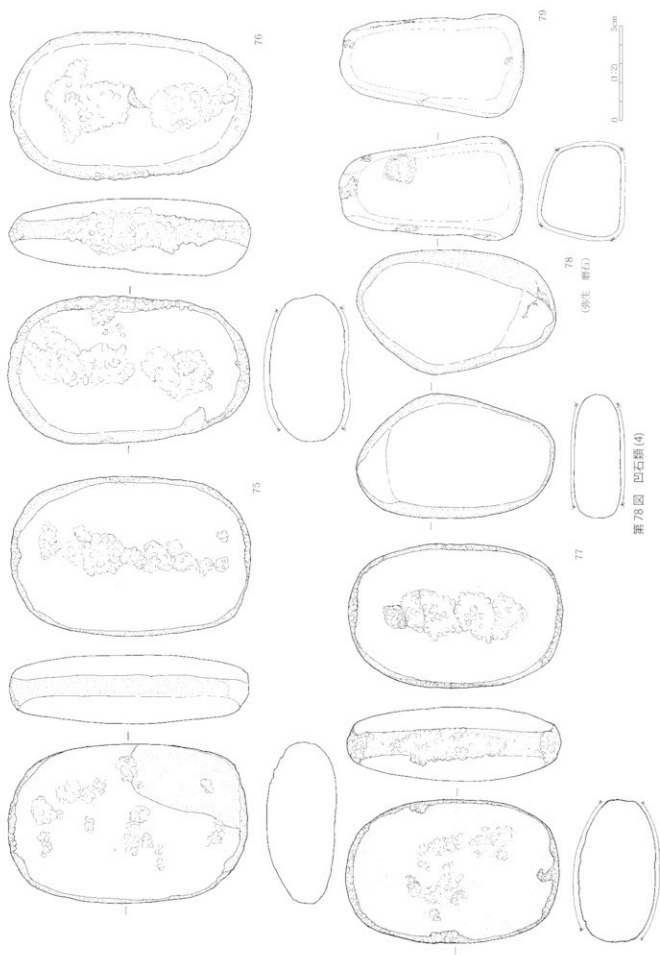


73

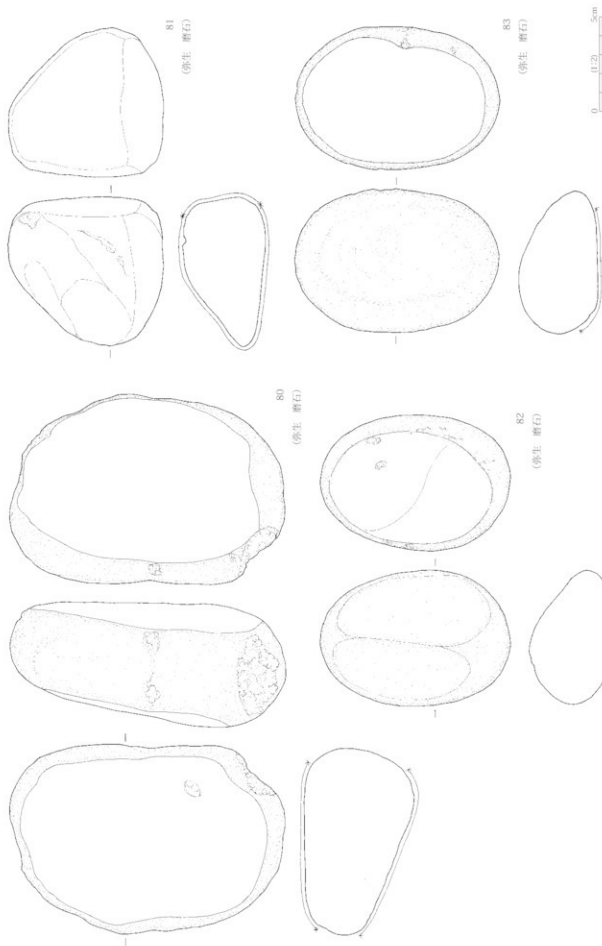
74

0 (1:2) 5cm

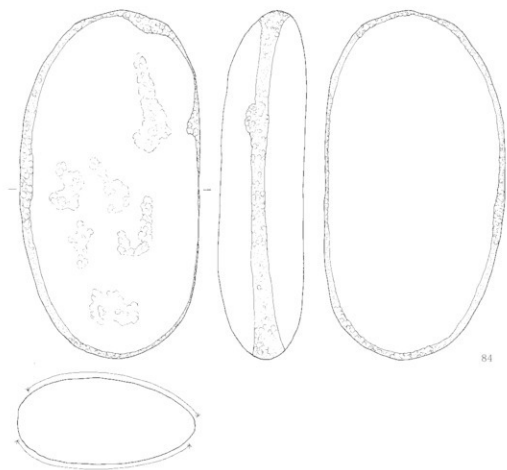
第77圖 凹石類(3)



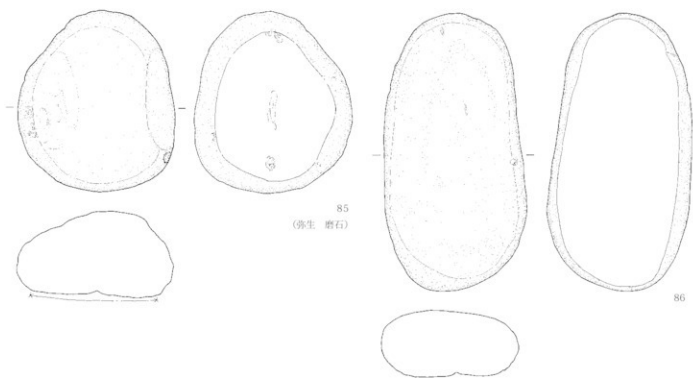
第78圖 凹石類(4)



第79圖 巴石頭 (S: 弥生 磨石)



84



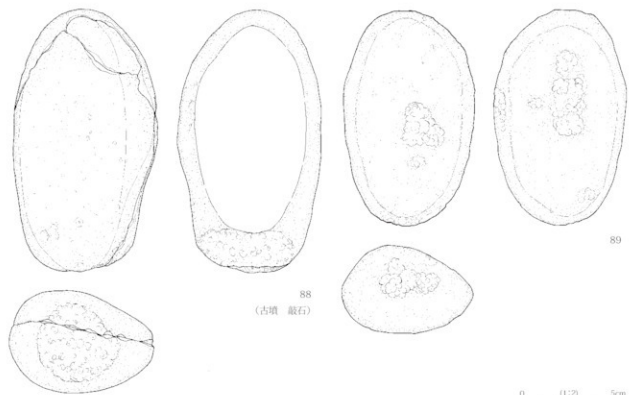
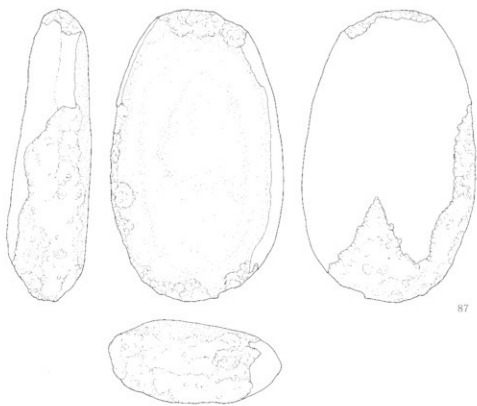
85
(弥生 磨石)

86

第80図 凹石類(6)

0 (1:2) 5cm

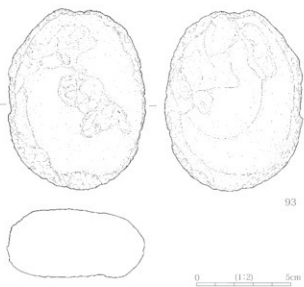
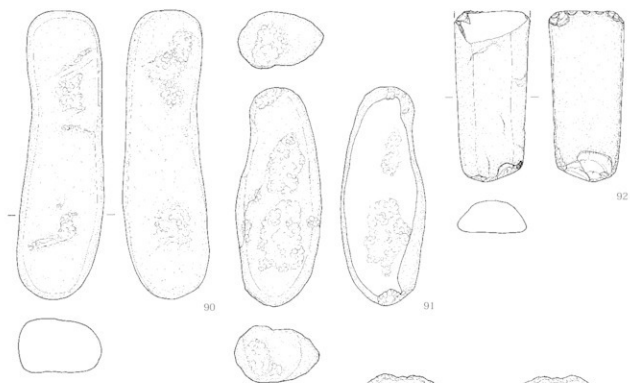
凹石 (敲石)



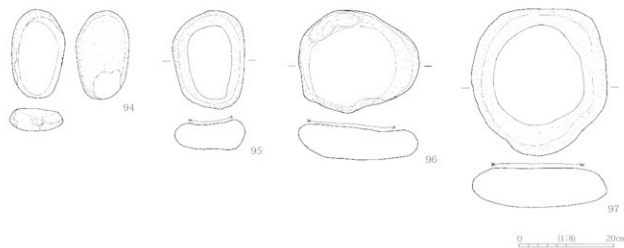
88
(古墳 敲石)

0 1:2 5cm

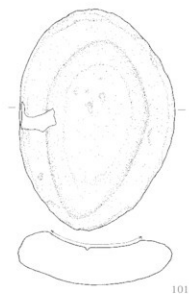
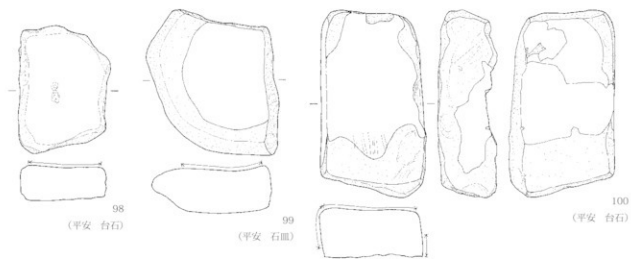
第 81 圖 凹石類 (7)



石皿

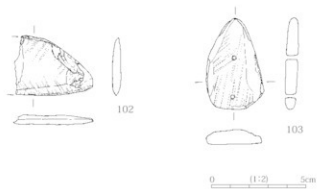


第82図 凹石類(8)・石皿

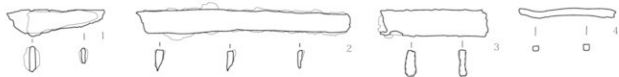


石包丁

石製模造品



0 (1:8) 20cm



第83圖 石皿・台石・石包丁・石製模造品・金屬製品・錢貨



SB01 全景 (南から)



SB01 石



SB02 完掘 (南西から)



SB02 カマド (西から)



SB03 遺物出土状況 (南から)



SB04 完掘 (南から)



SB04 カマド完掘 (南から)



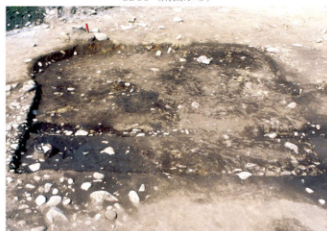
SB05 遺物出土状況 (南から)



SB06 (南西から)



SB06 カマド (西から)



SB07 完掘 (西から)



SB07 土器出土状況 (西から)



SB09 完掘 (南から)



SB10 (南から)



SB11・12 完掘 (北から)



SB13 カマド (南から)



SB14 住居完掘状況 (北から)



SB15 完掘 (西から)



SB16 完掘 (南から)



SB16 カマド完掘 (南から)



SB17 完掘 (南から)



SB18 土器状況 (南から)



SB19 完掘 (西から)



SB19 カマド遺物分布状況 (南東から)



SB20 (北から)



SB21 完掘 (東から)



SB22 火床



SB23 完掘 (東から)



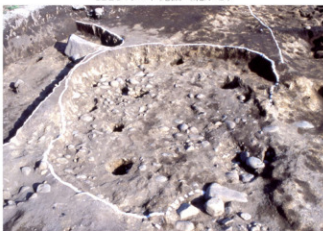
SB25 全景 (南から)



SB25 カマド完掘 (北から)



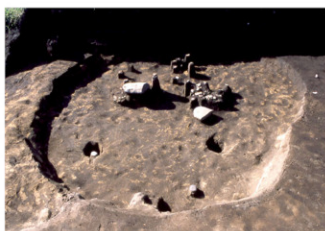
SB26 (北から)



SB28 (西から)



SB29 完掘 (西から)



SB30 (北から)



SB31 完掘 (南から)



SB32 遺物出土状況 (南から)



SB32 埴 (東から)



SB32 土器出土状況



SB33 完掘 (北から)



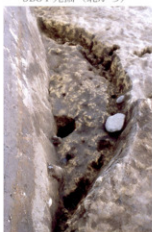
SB33 埴



SB34 完掘 (北から)



SB34 石皿出土状況



SB35 完掘 (北から)



SB36 完掘 (北から)



SB37 鉢



SB37 (硬化面) (南西から)



SB39 完掘 (南から)



SB39 カマド (西から)



ST01 全景 (南から)



ST02 全景 (南東から)



ST02・03 全景



ST02 全景



SD01 全景 (北から)



SD04 完掘 (東から)



周溝墓 (SD04) (北から)



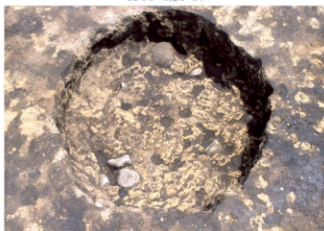
SD04 土器出土状況 (東から)



SD05 (北から)



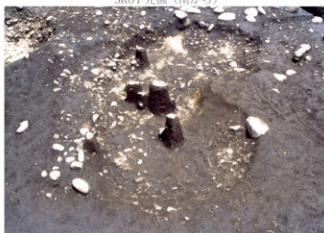
SD05No.1 出土状況



SK01 完掘 (南から)



SK03 完掘 (西から)



SK04 完掘 (南西から)



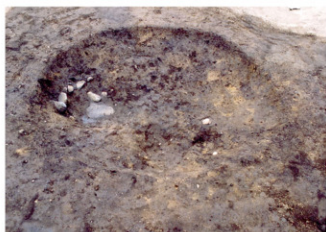
ST03 Pit11 完掘 (南から)



ST03 Pit04 完掘 (南から)



ST03 Pit07 (南から)



SK10 完掘 (西から)



SK32 完掘 (北から)



SK32 内土器出土状況



SK33 完掘 (東から)



SK (SK34) (東から)



土層断面 (南から)



復元



永明寺中学校体験学習

SB02



11

SB03



1

SB05



1



2

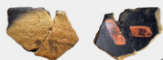


5



9

SB06



4



6



8

SB 07



1



3



12



14

SB 09



3

SB 10



15



4

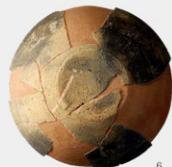
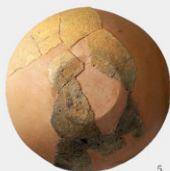
SB11



SB13



SB12



3

1

1

5

6

14

SB 15



1

SB 16



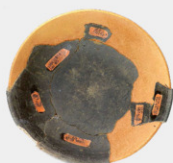
1



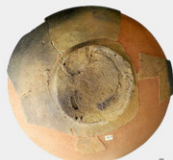
2



5



3



7



8



19



23



26



11



18



20

SB 17



6

SB 18



3



5

SB 19



6



2



3



9



13



15

SB 21



1

SB 24



4

SB 28



1



4

SB30



SB31



SB32





SB 33



SB 37



SB 38



SB39



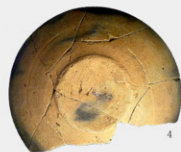
1



2



3



4



5

SD02



1

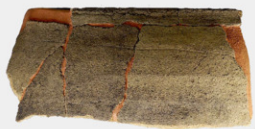
SD04



SD05



SK04



2



4

SK32

遺構外



1



1



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



石鏃



石錐・スクレイパー



石匙・磨製石斧・二次加工剝片・石包丁・石製模造品



両極石器・石核



打製石斧



凹石



磨石



敲石



94



96



95



97



98



99



100

報告書抄録

ふりがな	(と) おおとしせんけんせつにともなう まいぞうふんかざいはくつちょうさほうこくしよ
書名	(都) 大年線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	構井・阿弥陀堂遺跡
巻次	茅野市内
シリーズ名 番号	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 84
編著者氏名	藤原直人
編集 発行機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野県茅野市篠ノ井布施高田963-4 ⅴ:026-293-5926
発行年月日	2008年(平成20年)3月19日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(日本測地系)	(日本測地系)			
構井・阿弥陀堂遺跡	長野県茅野市ちの	20214	34	35度 59分 41秒	138度 09分 04秒	2005.04.21 ～11.30 2006.01.15 ～01.26	5000㎡	県道大年線建設に伴う事前調査

所収遺跡名	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
構井・阿弥陀堂遺跡	永明寺山南麓の上川が形成した段丘上	集落遺跡	縄文時代 前期前半 ～中期	住居跡9軒 土坑1基	縄文時代前期 前葉土器、 石器、黒曜石 製石器	縄文時代前期前葉～中世までの約5000年間、断続的に営まれた集落跡
			弥生時代 後期	住居跡5軒 溝跡2条(内:方形周溝墓1基)	弥生時代後期 土器、石器、 石包丁	
			古墳時代 後期～ 平安時代	住居跡24軒 掘立柱建物跡3棟 土坑23基 溝跡1条	土師器、須恵 器、灰釉陶器、 石製模造品	
			中世	竪穴建物跡1軒 土坑2基	内耳土器、 銭貨(宋銭)	
<p>長野県茅野市永明寺山南麓の上川が形成した段丘上に位置する。縄文時代前期前葉～中世までの約5000年間、断続的に営まれた集落跡。縄文時代前期前葉の集落は、茅野市内の諏訪盆地に面した地での初めての調査となり、在地の土器と伴に東海系の土器が出土している。また、弥生時代中期に低地に営まれた集落(家下遺跡)が、後期に至って丘陵上にもみられ、永明寺山南麓の広範囲に展開するようになる。平安時代の住居跡からは、在地の土器と伴に、甲斐地方の坏や甕が出土し、平安時代の交流の痕跡が認められた。</p>						

長野県埋蔵文化財センター発掘報告書 84

(都) 大年線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

—茅野市内—

構井・阿弥陀堂遺跡

発行 平成 20 (2008) 年 3 月 19 日

発行者 長野県諏訪建設事務所

(財) 長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157

E-mail maibun@grn.janis.or.jp